ギリシア
希臘から来た
ソフィア
さかき漣［作］
三橋貴明［原案］
自由社
希臘から来たソフィア
ギリシア
さかき漣［作］
三橋貴明［原案］
自由社

総選挙で落選し、浪人中の「橘航太郎（たちばなこうたろう）」事務所を訪れたのは
ギリシアからの留学生、絶世の美女ソフィア
八百万（やおよろず）の神々すまう日本を愛する青年、航太郎
国境線を否定するグローバリスト、ソフィア
歴史も文化も政治経済も、背負うものが違いすぎる二人だが……

希臘（ギリシア）から来たソフィア

さかき漣［作］
三橋貴明［原案］

自由社

希臘から来たソフィア

目次

◉登場人物――『希臘から来たソフィア』

橘 航太郎 政治家一族の名門、橘家の御曹司。国内トップである本郷大学法学部を卒業後、米トップのオールトン・ビジネス・スクールでＭＢＡを取得。

橘 藤一郎 航太郎の曾祖父。政治家。私塾を開き、多くの門下生を育てた。

橘 紀之彦 航太郎の祖父。首相経験者。

橘 龍之介 航太郎の父。政友党代議士。総選挙直前に急逝する。

橘 頼正 航太郎の大叔父。本郷女子大学教授。

橘 八重子 航太郎の母。名家出身。

ソフィア・ヴァシラキ 日本人とギリシア人のハーフ。アテネ大学法学部卒業。

アキレス・ヴァシラキ ソフィアの父。サントリーニ島で、ホテル・クリティアスを経営する。

京香・ヴァシラキ ソフィアの母。アテネとサントリーニで観光ガイドを務める。

霧島 さくら子 第97代内閣総理大臣。日本初の女性首相。経済成長路線の礎を築く。

朝生 一郎 第92代内閣総理大臣。霧島内閣において財務大臣を務める。

東田 剛 霧島総理の主席秘書官。経済に通暁した秀才。

九条 守 霧島内閣官房長官。名門九条家の御曹司。

丹後 芳樹　総理秘書官。財務省出身。
横井 良子　さくら子専属SP。
一之宮 雪乃　興産新聞社社会部記者を経て独立。フリーのルポ・ライター。
神庭 亮一　元興産新聞社社会部カメラマン。現在はフリーランスで活動。
宍戸 誠三朗　国際リベラルアーツ大学教授。専門は政治学。経済学にも精通している。
大河内　大手商社の重役。橘航太郎後援会の前会長。
六角　建設会社「六角興業」社長。橘航太郎後援会の新会長。
賀茂　初老の紳士。航太郎の後援者。
花園　吉祥寺商店街にある「割烹はなぞの」の女将。航太郎の後援者。
御室　橘航太郎事務所ボランティア・スタッフの青年。
嵯峨野　航太郎の秘書。
菅原 幸也　東京十八区選出の民進党代議士。
福知山　航太郎の学友。本郷大学ゴルフ部の同期。
望月 翔　早稜大学国際関係学部在籍の大学生。

装画　鈴木康士
装幀　神長文夫＋松岡昌代

プロローグ

ここはギリシアの南の島、サントリーニの街角。白壁の続く美しい街並みに、洒落た雑貨が所狭しと並べられた店があまた並ぶ。通りの向こうに垣間見えるエーゲ海の水面には夏らしい日差しが燦々と照り付け、街路は世界中から集まった旅行客のさんざめく音で満ちている。

この商店街の一角にある小さな食料品店で、日本からの旅行者である望月翔は、店主との会話がうまく通じず、困り気味の真っ最中だ。店主の男性は観光客である翔に合わせて英語を話してはくれるのだが、独特のギリシア訛りが強いためか、うまく聞き取れないのである。翔が顎の無精ヒゲを撫で、しばしの思案していると、急に、流暢な英語が彼の耳に飛び込んできた。

「ちょっと！　ギリシア語どころか、英語もろくにしゃべれないなら、ギリシアまで来るんじゃないわよ！」

驚いた翔は、すぐさま声の方に顔を向ける。するとそこには、中高生と思しき超絶・美少女の姿があったのだ。

抜けるような白い肌に、ゆるやかなウエーブを描いたこげ茶色の長い髪、大きな灰色の瞳には長いまつ毛が上下キレイに生え揃っている。まるでいつか観たハリウッド映画の中で、天使役を演じていたフランス人女優のような風貌だ。

しかしこの物凄いレベルの美少女は、青い海と空がどこまでも広がる美しい島に不似合なほど、酷いしかめっ面と、さらには酷い物言いなのである。
「えーと。いや、俺は確かにギリシア語を話せないけどさ。君らギリシア人は大抵、英語話せるだろ？ ただ、発音が聞き取りにくいんだよ」
翔が滑らかな英語で返すと、美少女は少し表情を和らげた。
「あ、なあんだ。ただの田舎者かと思ったら、英語は分かるのね。で、何がしたかったの？アジア人青年！」
さすがに翔はここで、少し眉根を寄せざるを得なかった。世界中を旅して廻っている翔にとっても、この美少女のセリフは随分なものに感じられ、内心あきれ返ってしまったのだ。ご多分に漏れず面倒臭くなった翔は、踵を返しその場を離れようとする。と、驚いたことに、美少女は店主に素早くギリシア語で話しかけ、さっと翔に品物を差し出したのだ。
「はい、コレ。……って、これで良かったのよね？」
少女の態度が急に自信なさげに変わり、翔を見上げる。
「……ああ。ありがと」
翔は意外に思い、あらためて彼女の顔を見た。やはり非常に整った美しい造作だ。しかし、まじまじと眺めるうちに、翔の中に一つの疑問が頭をもたげてきたのだ。

「もしかして、君、混血じゃね？」
すると美少女は、真っ赤に頬を染めた。
「オレ、日本人だよ。なんか君、日本人にも似てるカンジがする」
「……わたし、日本の血も少し入ってるわ」
「そか。やっぱりな」
店から出た二人は、マゼンタ色の花をこぼれんばかりに咲かせている、ブーゲンビリアの木の下に立ち止った。
「お嬢さんさあ、ホントは優しい性格なんだろ？　俺の買い物を手伝ってくれたんだからさ。まあ、イヤなこともあるかも知んないけど、世の中、色んな人種がいるから面白いんだよ」
「……」
「だから、あんまり、自分を卑下するなよ」
翔は買い物袋の中に手を突っ込んで、芳（かんば）しい香りを放つオレンジを取り出すと、その美少女の手に押し付けた。
「ありがとな。俺は翔、日本のオダワラっていう、海辺の町出身だ。君、名前は？」
少女は少しの間迷っていたが、遠慮がちに口を開いた。

「……ソフィア」

「そか、叡智（えいち）だな。アクロポリスを頂くギリシアに相応（ふさわ）しい名づけだ。じゃあな、ソフィア！」

翔は相変わらずのマイペースで、手にした固いリンゴをかじりながら、サントリーニの坂道を下って行った。

そして年月は流れ、ギリシアの島の美少女は、グローバルな視点を持った絶世の美女へと変貌を遂げる。

第一章
航太郎

事務所の真ん中に大仰に鎮座するテレビの巨大液晶画面に、速報のテロップが流れた。人々が固唾を飲んで見守る中、「菅原幸也氏、当確」の文字が現れる。

橘航太郎は愕然とし、大きく目を見開いた。

落ちたのか。自分は、落ちてしまったのか。

第四十七回総選挙は、霧島内閣が実施した「日銀法改正」「歳入庁設置法」という二つの大改革について、国民に信を問うことが主な目的であった。この二つの法律を通すに際し、第97代日本国首相、しかも日本史上の初の女性首相である霧島さくら子は、宣言した。

「わたくし霧島さくら子は、本法案を可決次第、国民に信を問いたいと存じます！」

そして公約通り、霧島首相は、法案可決後ただちに衆議院を解散する。衆院任期は四年満了までは未だ一年以上の期間が残っていたのだが、敢えてこの時点での解散総選挙を決断したのである。

98年に明らかに間違った方向に改正された日銀法。それ以来現在まで続いた「日銀総裁の罷免権を誰も持たない」という状況は、異常そのものであった。今回の再改正によりやっと総裁罷免権が復活し、日銀は国債の買い入れと通貨発行という正しいデフレ対策に乗り

出した。それに加え、財務省から国税庁を切り離す「歳入庁設置法」が成立したことにより、一カ所に異様に集中していた権力の分散が実現された。

長らく日本にはびこっていた歪んだ経済政策が、二つの法案成立でようやく終わりの時を迎えたのだ。勢いに乗った霧島内閣は、立て続けに「国土の強靭化」「防災」「減災」を中心とした景気対策に乗り出し、日本経済はデフレ脱却に向けて歩みを進め始めたところだ。

東日本大震災で大きな被害を受けた東北地区には、大規模な復興の槌音の音が響き渡り始める。今にして思えば根拠不明な「公共事業悪玉論」が払拭(ふっしょく)され、全国のインフラストラクチャーの防災化、メンテナンス事業が始まった。さらに、数十年に亘り凍結されていた全国の新幹線網や、高速道路網の建設工事も再開される。

政府の需要・雇用創出事業により、失業率は劇的に下がった。特に、突出して高い失業率に苦しんでいた氷河期世代が、政府主導のプロジェクトにより、次々に正規職を獲得していく。数十年の空白を経て、日本国民はついに、「所得が着実に増えていく」という、真の意味での豊かさを取り戻しつつあるのだ。

失業率も3%を切った今、日本は事実上の完全雇用状態にある。働く喜び、所得が増えていく喜び、消費する喜び、そして未来のために投資をする喜びに日本国民が目覚めた結

果、〝成長中心主義〟の政策を打ち続けた政友党の支持率は、40％前後で推移している。中でも霧島内閣の支持率は、現時点においても50％を軽く上回っているほどである。
この状況下に行われる今回の総選挙において、政友党の候補が小選挙区で負けるなど、通常は考えられない。無論、野党側にも地盤の強い候補者たちが多数いる。しかしその強固な地盤をもってしても、与党を支持する声に対抗することは困難を極めた。政友党候補であれば、もしも小選挙区で負けることがあったとしても、確実に比例復活できるだけの票数は獲得できると、誰もが信じて疑わなかった。それほど圧倒的な追い風が、与党に向かって吹いていた。
三鷹、そして吉祥寺という、西東京を代表する人気の街を地盤としてきた橘龍之介は、選挙のたびに、代表的左派議員である菅原幸也元総理大臣と、激しく議席を争った。前回の第四十六回総選挙では、龍之介は何と菅原を比例復活に追い込むという、数年前までは考えられなかった快挙を成し遂げたのである。しかも、小選挙区で龍之介が菅原につけた得票差は大きく、ほとんどダブルスコアに近い快勝であった。
三鷹と吉祥寺の有権者たちは、次回の選挙、すなわち第四十七回総選挙では、菅原元総理こそが落選の憂き目に会うと確信していた。おそらく菅原本人も、次は比例復活すらできないと想像していた事だろう。それほどまでに、今は亡き橘龍之介の勢いは圧倒的だっ

たのである。
まさに橘王国と化したこの地域で、橘の名を背負った候補者が敗北する憂き目に会うことになろうとは。いくら元総理大臣が相手とはいえ、首相在任中に度重なる〝人災〟を引き起こした菅原に、比例復活さえできない完敗を喫しようとは。
候補者である航太郎はもちろんのこと、選挙事務所のスタッフ、さらには政友党の関係者まで、誰もが文字通り言葉を失った。

何故、自分が落ちるのか。航太郎にはその理由がまったく分からず、脳内に目まぐるしく様々の思いが去来した。自分は国内のトップ大学卒であり、海外でＭＢＡも取得した秀才なのだ。しかも顔の造作は整い、柔らかな物腰と滑らかな弁舌を併せ持つ。その自分が何故？

「調子に乗っていたからだよ」
大叔父である橘頼正（たちばなよりまさ）の声が響き、航太郎は声の主を振り向いた。
「今、何て言いましたか？　僕のどこが、調子に乗ってたって⁉」
いきり立ち、航太郎は続ける。

「僕は開丞学園高校から本郷大学法学部に現役合格、その上、オールストン・ビジネス・スクール修了だ！　こんなに頭のいい候補が他にいますか？　それに外見だって、菅原よりよっぽど爽やかでしょう！　ボイス・トレーニングだって完璧にこなした！　スーツはチェスター・バリー、靴はエドワード・グリーンだ！……僕は、僕は、完璧だ！」
まくしたてた航太郎に、頼正を筆頭に多くの支援者が冷たい視線を送った。選挙事務所内が、水を打ったように静まりかえっている。
見かねた後援会長の大河内が、その沈黙を破り、
「バカバカしい！　よくも、自分が完璧だなんて言えたもんだ。今回の選挙戦を教訓として、そういう子供っぽい性格を直すんだね。いい潮時だ！」
と言い放った。大河内は、都心に本社を構える大手商社の重役である。その大河内が発した、子供というフレーズに、航太郎はブチギレる。
「僕に投票しない一般人のレベルが低すぎるんだろう！」
大声で言い返した航太郎に、大河内もさらなる怒声で一喝する。
「何がレベルだ、君はまだ、社会に出た経験すらないだろう！　アルバイトだってしたことも無い。客に頭を下げたことも、上司から頭ごなしに叱られた経験も無い若造が、有権者に対してレベル、とは、どういうつもりだ！」

ＭＢＡを無事取得した航太郎は大学院修了後、そのままアメリカに遊学していたが、衆議院議員であった父の他界により日本に呼び戻された。そして父の弔い選挙に出ないかと声掛けされ、当然のごとく航太郎は快諾したのだ。この自分が落ちるはずが無い、と。それがこの体たらく。原因は自分ではない、支援しない一般人のせいなのだ……。

後援会長に詰め寄った航太郎を制止しようと、頼正が航太郎の腕を強く掴む。航太郎はその手を憤然と振り払った。すると和服を着込んでいた大叔父はバランスを崩し、何と派手に転んでしまったのだ。

想像に難くなく、その後の事務所内は怒号で溢れ返った。これまで下にも置かぬ態度で航太郎に接してきた者までが、彼に非難の言葉を浴びせている。完全に頭に血が上った航太郎も罵声を繰り返し、もはや自分が何をしているのか分からない状態だ。

そのとき、航太郎の肩に手を置いた者があった。重く、熱い掌。それまで猛り立っていた航太郎だったが、何故かこの瞬間、彼の頭からすっと、上っていたはずの血が下りてくるのに気付いた。

振り向いた航太郎は、

「あ」

と小さく声を漏らし、そのまま固まった。何故ならそこには、時の財相、朝生（あさお）一郎（いちろう）の姿

があったからだ。朝生の表情は厳しく、航太郎を真正面から見据えている。

「航太郎君。もっと、勉強なさい」

「……勉強って……?」

現役の財務大臣であり、かつ現代の高橋是清(たかはしこれきよ)とまで称(たた)えられている朝生一郎の登場に、さすがの航太郎も臆す。

一気に黙り込んだ航太郎は、朝生の台詞(せりふ)を反芻(はんすう)した。勉強。勉強なら、散々にしてきたじゃないか。子供の頃から勉強漬けで、常に優等生であり続けたのが、橘航太郎という男だ。おかげで本郷大学をほとんど「優」評価で卒業し、オールストン・ビジネス・スクールにおいても優秀な成績で経営学修士を取得することができたのだ。

ここで新たに怒りの念が込み上げてきた航太郎は、顔を上げると、不遜にも朝生の両眼を睨みつけた。しかし朝生は選挙事務所内をゆっくりと見回しながら、流暢な英語を口にしたのだ。

「The first-class players, as a tribute to all their efforts, will quickly stand up. The average players will stand up after a little while. And the losers, will keep lying down on the ground.」

言い終えると、朝生は航太郎に視線を戻した。

「君も学生時代をアメリカで過ごしたならば、知っているだろう。テキサス大アメフト部の名コーチだった、ダレル・ロイヤルの言葉だ。……橘航太郎君。君は、敗者なのか？」
「敗者!?　この僕が？　そんな、そんな訳が無いでしょう！」
思わず大声を出した航太郎に、朝生は首を横に振る。
「ならば、私から君に教えるべきことは、もうないね」
淡々と宣すると、朝生は素早く踵を返した。
航太郎は、呆然とその場に立ち尽くした。先ほど朝生から教えられた言葉が、頭の中に響いている。

『一流の選手は、あらゆる努力を惜しまず、速やかに立ち上がる。
普通の選手は、しばらくしてから立ち上がる。
そして敗者だけが、いつまでもグラウンドに横たわったままである』

＊

選挙から二か月が過ぎ、航太郎の敗戦処理も終わりに近づいてきた。運命の投票日から

今日まで、落選した悲しみに身を埋もれさせることも叶わぬほどに、あまたの雑事に翻弄されてきたのだ。

正直なところ、航太郎は心身ともに疲れ切っていた。落選したというのに、人々から慰めの言葉は少なく、ただ目の前にある書類と領収証の山を処理しつつ、頼正に指示されるまま支援者への挨拶回りに奔走した。

選挙中は航太郎を必死で盛り立てていた母の八重子は、落選直後には落胆の故か、軽井沢の別荘へ逃げるように出て行ってしまった。つい先日、今後暫くは軽井沢を拠点として過ごすと、彼女から連絡が来たところである。八重子は自分の隠遁に、使用人も幾人か同行させたため、ますます吉祥寺の邸内は寂しくなった。豪奢な邸宅内に人の気配はなく、寂しい空気が充ちている。

ふと手を休めると、あの日の朝生の厳しかった表情と声音が幾度も思い返され、航太郎は悔しさを噛みしめた。

苦しい敗戦処理の作業にもやっと終わりが見えてきた日、珍しく早い時間に帰宅した航太郎は、玄関からそのまま父の書斎に向かうと、絨毯敷きの床に座り込んだ。久方ぶりに、もの思いに沈み込む時間を得た格好だ。

何故、菅原にあれほど多くの票が集まったのか。航太郎はその理由について考えを巡らせたが、考えれば考えるほど、答えは遠のくばかりだ。
思えば霧島恵之進の娘、霧島さくら子が首相に就任してからというもの、航太郎の属する政友党は追い風を受け続けてきた。それに対して、政権与党の座に就いてからあまたの失策を繰り返してきた民進党の凋落と言ったら、悲惨なものだった。誰であれ、政友党に属してさえあれば当選する、と言っても過言ではないほどの空気が日本国内にあったのも事実だ。
その上、曾祖父はあの高橋是清の弟子とまで言われた超有力代議士であり、同時に私塾を開き政治家を多数育てた、橘藤一郎である。さらに航太郎の祖父は、歴史に名を残す名宰相、橘紀之彦だ。また、もっとも航太郎に近い存在であった父は、知名度も高く地盤も強固な政友党所属の代議士、橘龍之介なのだ。〝橘航太郎〟と言えば、まさに西東京のサラブレッド。落選するような要素など、一体どこに……。
またも失意の念が込み上げてきた航太郎は、その思いを撥ね退けようと辺りを見渡した。
書棚の上部の壁には、祖父・紀之彦の手による書が額に納められている。達筆すぎて読みにくいが、禅語の一節、「人人悉道器」である。窓からは夕日が差し込み、室内を鈍いオレンジ色に照らす。

子供のころから、ここは航太郎にとって憩いの場所だったのだ。イヤな出来事があると、書斎に行き、無理矢理に手にした本を読み進めた。そうしていると、苦しい感情が霧散し、心は本の世界に飛び立てるからだ。ただ、この慰めの時間には条件があった。航太郎は書斎の扉の前に立つと毎回、室内に祖父や父がいるかどうかを窺った。彼らの在室に気付くと、航太郎はいつもその場から静かに立ち去った。

航太郎は、彼らが苦手だったのだ。祖父も父も厳しい人だった。航太郎にとって彼らは、決して越えられない高山のように思われた。女の多い橘家に育ったせいもあってか、航太郎は女性とは打ち解けることは得意であった。が、祖父と父に関しては、いつまでも間に横たわる違和感が拭い去れなかった。そしてその距離感は縮まらぬまま、彼らは死んだ。

書斎の中央には、どっしりとした風格のデスクがある。航太郎はふと、この特別席に座ってみようと思い立った。実はこれは、初めての経験だ。この椅子は、橘家当主しか座ることを許されない。そして現在の当主は、他でもない、航太郎ではないか。

重厚感あるオークの木肌に指を滑らせながら、航太郎はゆっくりと腰を下ろした。すると何か、足に触れるものがある。すぐに床の高さまでかがんでみると、そこにあったのは、小さな鍵だった。航太郎は咄嗟に視線を走らせ、デスクに作り付けられた、やはりこちらも小さな鍵穴を見つけた。早速、鍵穴に鍵を差し込む。

鍵の合わさる音に続き、響く軋音と共に開かれた引き出しの中には、焦げ茶の皮の手帳があった。航太郎はためらいながらも手を伸ばし、ページを開く。と、驚き、その紙面を凝視した。

何とそこには、見慣れた筆跡が躍っていたのだ。日付と天候、その日の出来事、そして綴られている心情の数々……この筆さばきには見覚えがある。先ほど目にしたばかりの、祖父の筆跡そのものなのだ。思うに、おそらくこれは、十年前に亡くなった祖父、紀之彦の日記なのではないか？　航太郎の手指は微かに震えた。

「昭和四十七年十月十五日。

首相就任の大命を受けてから一週間が経過した。

今日は、六年前に『ベトナムに平和を！　市民文化団体連合』が『ベトナムに平和を！　市民連合』に変わったことの記念日だという。つまり、市民文化団体連合が市民連合に変更されたのだ。当時から私は、両者の違いがさっぱり分からなかった。それは現在も未だに分からぬのだが。いずれにせよ、彼らが自分たちを地球市民と呼び、平和を叫べば平和になると主張していることに変わりはない。

平和という文言を叫ぶだけで平和が実現できるのならば、これほど楽なこともない。人

間一人一人が地球市民とやらになり、互いに争いを起こさず、豊かに暮らすことができるのであれば、この世に政治家という職は不要となるだろう。

しかし、そのような夢物語が実現することはあり得ない。何故なら人間には、欲があるからだ。そもそも、平和に豊かに暮らしたいという感情も、人間の欲の一つだ。が、人間による豊かな生活への欲望が無限であるのに対し、世界の資源は有限である。加えて、世界の生産力も有限なのだ。

全世界の人々の欲望を満たすに足るほどの十分な資源や生産力が存在しない以上、奪い合いが発生するのは必至である。ルールなき奪い合いは、強者にこそ勝利をもたらす。彼らの主張通り、真にこの世から国境がなくなり、全人類が地球市民として個々の欲望を満たすために動き出したなら、強者が全てを奪う、という陰惨な世界が誕生してしまうことだろう。

あらゆる人間にとって、完全なる個人主義の下で生きていくことなど不可能。人は共同体に属さなければ、その生を全うすることができないのだ。そして、我々の属しうる最大の共同体とは国家である。残念ながら現在、これより先のものは考えられない。国こそが、人間一人一人の個々の権利を擁護してくれる最大の存在なのだ。

現在の日本は国民主権国家である。日本国民は、自らの権利を擁護する最大の存在、国

の管理者たる政治家を、投票行為によって選択する権利を有している。この事実が、どれほど素晴らしきことか。国民は選挙を通じ、最大の共同体である国家に対し、自己の意見を反映させることができるのだ。

支那海の向こうの大陸では、文化大革命などといった空虚なスローガンの下、何億もの民衆が権利どころか自らの生命までをも奪われ、塗炭の苦しみに喘いでいる。その種の現実から目をそらし、やれ地球市民だの、やれ国家は要らないなどと騒いでいる連中は、結局は甘やかされた子供に過ぎない。」

記されているのは、どうやら首相在任中の一年程度に亘る日記である。ページを繰って行けば、時間は徐々に現代へ近づく。

〝祖父の直筆の日記の存在〟に惹かれ読み始めた航太郎だったが、ここまで読んだ時点で、現在の自分の置かれている状況に、まさに苦言を呈しているような内容に衝撃を受けた。もはやその堅苦しい文体をまったく厭わず、時が経つのも忘れ、航太郎の目は紙面を追った。

「昭和四十八年二月五日。

昨晩、人に薦められ、ジョン・レノンのイマジンという曲を聴いた。
『Imagine there's no countries. It isn't hard to do. Nothing to kill or die for. And no religion too. Imagine all the people Living life in peace』
という歌詞に驚き、つたない語学力ながらも訳してみる。
『想像してみなさい、国などないと。それほど難しくはないだろう。殺す理由も死ぬ理由もなく、そして宗教も存在しないと。想像なさい、皆が平和の内に生きることを』
国がない世界。もしかしたら将来的には本当に、国がない世界が誕生するかもしれないが、残念ながら殺す理由はなくならない。死ぬ理由も消えない。国家という共同体による制御をなくした民衆が、地球上で互いに互いから無限に奪い合う。勝者は全てを手に入れ、敗者は喪失するのみ。歌詞の示すように想像するならば、そんな未来が私の眼前に現れる。
　コミンテルンの世界革命論といい、ジョン・レノンのイマジンといい、なぜ人はこうも簡単に国家を否定できるのか。理由は恐らく、彼らが実際に国家を喪失した経験を持たないためなのではなかろうか。国が存在しない世界を、それこそ想像してみたまえ、だ。警察がない、消防がない、軍隊がいない。治安は崩壊し、火事を消しとめることもできず、外国の軍隊の蹂躙（じゅうりん）に手をこまねいているしかない。そんな状態が、平和の中で生きている、などと、果たして言えるのか。

二年前のニクソン・ショック以降、アメリカの銀行家たちが、資本の移動制限を緩和するよう、アメリカ政府に圧力をかけているという。愚かしいことだ。戦後何のためにブレトンウッズで、資本の移動の自由を制限したのか。各国の資本面の結びつきが強まった結果、一国の危機が他国に伝播(てんぱ)し、世界的な恐慌状態を引き起こしてしまったという反省からではなかったのか。

国家による制限がなければ、個々人の欲望を抑えることは困難になり、金融家たちの独善的な所得拡大の欲求も制御できなくなる。このままアメリカが銀行家たちの口車に乗り、世界的な金の動きの制限を排していくならば、いずれは必ず金融の暴走を招き、新たなる大恐慌を生み出すことになるだろう。金融家も結局は、欲にまみれた一人間だ。彼らが自身の欲望を追求するために、国境線を越え、自由にお金を動かすような世界で、経済が健全に成長するとは到底信じ難い」

航太郎は大きなショックを受けた。これまでの自分は、「グローバリズム」という思想の下で推進される各種の政策、運動について、疑問を持ったことがなかったのだ。それこそ「世界市民」「地球市民」として、国境線が着実に薄れゆく世界にあればあるほど、人々は豊かさを享受できると、確信を持っていた。

しかし現実には、金融家たちの暴走はとどまることを知らず、２００８年にリーマンショックというカタストロフを引き起こした。さらに、今年の春にはユーロショックが発生し、まさに世界は第二次大恐慌のとば口に足をかけている。

「もはや国境など古く、国家など無用の長物である。国境を越えて自由自在にモノ、カネ、ヒトが動き回り、政府の一切の制限なしで民間企業が利益を追求し、競争を繰り広げることで、経済成長は達成される。市場原理に忠実に政策を実施すること、言ってみれば政府の機能を縮小する制度改革こそが、人類を繁栄に導くのだ」

本郷大やオールストンで学んだ教義は、航太郎の脳に強烈に刻み込まれている。しかし祖父の言に導かれ考え直してみると、これまで航太郎が学んだ〝自由〟とは残酷な事実を孕(はら)んでいるように感じられる。真に自由な社会が実現するということは、つまり弱肉強食の世界が生まれるということで、人々が勝者と敗者にはっきりと分別されてしまう悲劇を生み出す。

否、というより、そもそも航太郎が受けた教えは、勝者と敗者を生み出すことを推奨しているのだ。勝者と敗者に人々が明確に分かれるからこそ、敗者になりたくないと人は努力し、勝利を目指す。それの何が悪いのか、それこそ自然である、という教えだ。オールストンでは、「自由な競争市場における敗者は、自己責任だ」という、いわゆる新古典

派経済学に基づく概念を叩き込まれる。そして航太郎も、「負ける奴は、能力が足りないから負ける、だから本人が悪いのだ」と考え、それに対して何の疑問も抱かなかった。自分には国家などいらない。よりグローバルに、〝自由〟に生き、競争市場における勝ち組になってみせる。オールストンで学びながら、航太郎は日々、誓い続けたのだ。

だが、この祖父の日記。

祖父は、個人は「国家」や「共同体」に守られている、と繰り返し訴えているのだ。家族や地域、地方政府、そして中央政府。それぞれの段階でそれぞれの役割を担った人たちが働き、社会全体の秩序が維持されている。誰もが互いに繋がり合い、各々の機能を果たすことで、共同体に安定がもたらされている、と。

書斎の床に落ちていた鍵、また橘家当主しか座ることを許されなかったデスクに作られた鍵穴の存在。そして、鍵のかかった引き出しの中に、その皮の艶も美しいままに保管されていた日記……。この状況を鑑(かんが)みれば、この日記が祖父から父へ託されたものがあることが容易に想像できる。祖父が綴り、父へ託した思い。航太郎が学んできた価値観と真逆の価値観が、祖父の直筆の文字を通し、体の中へ染みこんでくる。

航太郎は思う。確かに祖父の言うとおり、国家という最大の共同体に対し、自分は一有権者として口を出すことが可能なのだ。中華人民共和国の気の毒な人民たちとは異なり、

航太郎は自国の政府に関与することができる。政治家に投票するのはもちろん、自ら立候補することで、国家という機能の一翼を担うことすら可能なのである。

現に総選挙に立候補し、衆議院議員として国政に関与することを目指した。そんな自分が、今まで「国家」の共同体としての役割について無知なままだったのだ。そしてあろうことか選挙戦では、

「国家の役割を最小化し、競争を激化させる。これが世界標準の思想で、国民の幸福への道です。国境線でモノやお金や人の流れを制限するなど、不自由な時代の象徴であり、自由な存在である人間への冒涜です。現代はグローバル時代なのです！　日本人は、日本という小さな島国の内に終わらず、新たなグローバル市民として世界に羽ばたきましょう！」

などと、ひたすら国家否定の演説を繰り返していたのだ。日記にある祖父の考えと真っ向から対立する思想を、祖父の守った地盤でとうとうと語ったのだ。

思い返してみれば、オールストンで散々に叩き込まれた「グローバリズム」が、国境線でモノ、カネ、ヒトの移動を制限することを批判していたのだ。このグローバリズム風教義について何ら疑いを持たず、〝国家を管理する政治家〟を目指す選挙において、航太郎は〝国家否定〟の主張を掲げた。改めて振り返ると、支援者や聴衆に滑稽に取られていたとしてもおかしくは無い。

対抗馬だった菅原幸也元総理も、左翼活動家出身である。堂に入った雰囲気で、「地球市民」といった左翼が頻繁に使用する語句を連発していた。それに対抗した航太郎も、負けじとグローバリズム用語を叫び続けたのだ。

「菅原元総理のヴィジョンは古い！　日本人は〝地球の市民〟ではなく、グローバル経済に恩恵を受けた新たな世界、つまり、〝新世界の市民〟になるべきです。グローバルな自由競争こそが、人類に進歩をもたらすんですよ！」

地元が企画した討論会で、航太郎はこんなセリフを菅原元総理に叩きつけ、一人、悦に入っていたのである。「新世界の市民」という造語が気に入った航太郎は、街頭演説でもこのフレーズを再三に繰り返した。

祖父の日記は首相退任の前日で、記述が止まっている。最後の夜、老爺はこう記した。

「昭和四十八年三月十日。

本日、長かったお勤めが終わる。

世には今、自由主義経済やら自由化やら地球市民やら、我が国を外に向けさせる文句ばかりが溢れ、其れがあたかも至高の思想であるかのように大きな顔をしている。果たして、

其れで良いのだろうか。
父、藤一郎の言によると、かの高橋是清も同様の嘆きを抱いていたようだ。
『欧米列強が自由貿易を主張するとき、彼らは原理原則に従ってそれを主張しているのではなく、彼ら自身の利益のために主張している』
是清翁は父に、かくの通り語ったという。
自由主義経済など、英米独仏などが己の帝国を拡大するために編み出した理屈に過ぎぬのに、世には「自由」「自由」と浮かれる輩がとみに多い。さらに言えば、「地球市民」などと粋がる浮ついた連中も、我が国の内に少なくないのだ。
一体、我々はいつから、世界市民などという意識を持ったのだろうか。
我々は、日本人ではなかったか。
日本国。有史より二六〇〇年、連綿と続いてきた国、日本。私は日本人として、日本人の手によって、日本を守りたい、と切に願うのである。」
航太郎は暫時、紙面から目を離すことができなかった。
自分が本郷大やオールストンで学んできたことは、何だったのか。それ以前に、自分のこれまでの人生は何だったのか。もしや自分は、何ものをも、知ってなどいなかったの

ではないか？

窓から差し込む斜陽。航太郎の頬と日記のワトソン紙とを、くすんだ橙色に染め上げながら傾く。頭の中で、朝生の言葉が繰り返し再生されている。

『The losers, will keep lying down on the ground.』

あの落選の日から、航太郎の周囲からは日々人が去り続けていた。支援者はもちろんのこと、親族、そしてあろうことか母親まで。ああ、朝生の言う通りなのかも知れない。僕は敗者。無知蒙昧（むちもうまい）な、負け犬だったのだろう。航太郎は拳を固く握りしめる。

……今回は確かに負けた。惨敗だ。しかし負け犬のままで終わることなど、僕には到底耐えられない。自分は何者かになる、否、なるべき男なのだ。これまで自分が必死に追い求めたものを、今こそ認めねばなるまい。それは勿論、父であり、祖父であり、そして曾祖父だったのだ。

彼らに追い付きたい、彼らのようになりたい。航太郎の目標は、本当はずっとそうだった。彼らの背中を追いかけ、共に並び、胸を張って歩きたかった。そしていつか、彼らを超えたかった。お前も橘家の男として一人前になったと、褒められたかったのだ。

もう手遅れなのか？　それとも今から走り出せば、まだ間に合うのだろうか？　あの強靭で高潔な、三つの背中に。

航太郎は、床に座り込んでいた自分を恥じ、立ち上がった。壁に高く掲げられた、祖父の手による筆を見上げる。

「これからだ、まだ、これから。なりたい自分になるのに、遅すぎるということはないはずだ……そうだろ、紀之彦じい」

第二章　ソフィア

腰まで伸ばした、焦げ茶色の緩やかなウエーブの髪が揺れる。遠くからでも目立つ大きな濃いグレイの瞳には、マスカラがたっぷりと塗られた長いまつ毛が上下共に生え揃っている。加えて、抜けるように白い肌、すんなりと伸びた華奢な手足。その美しい肢体をAラインのワンピースで包んでいる姿は、まるでフランス人形さながらである。すれ違う人の中で彼女を見ない者は無く、特に男性からは熱い視線が注がれる。

誰が見ても明らかな超・美女は、しかし、その美しい顔を一気に不機嫌に歪めた。

「なんで、こんなにベタベタするのよ！」

彼女が今いるのは、日本国は成田空港のロビーである。ギリシアから来日した彼女、ソフィア・ヴァシラキは、飛行機を降りた瞬間に、むっと迫る湿気に驚いたのだ。

「日本は温暖湿潤気候といって、湿度が高い国だから。でも、すぐに慣れるわ。慣れてみると意外に気持ちいいものよ」

横から、こちらも美しい年配女性の声がかかる。艶やかな黒髪の美女は、ソフィアの母親、京香である。ソフィアは、ギリシア人男性アキレス・ヴァシラキと、元は日本人であった京香・ヴァシラキの娘、つまり、混血なのだ。

ソフィアの故郷、ギリシアは、夏には世界中からセレブリティがこぞって訪れるヨーロッパきってのリゾート地だ。その中でも特に有名な島、サントリーニに、ソフィアの生家は

ある。美しい海と空、どこまでも続く白壁の街並み。夏季の暑さは厳しいが、空気はカラリと乾燥し過ごしやすい気候だ。それこそヨーロッパ随一、世界最高峰のリゾートだと、ソフィアは誇らしく思っている。それにひきかえこの日本の、ウンザリするほどじめじめした気候！　いくらソフィアの母親が日本人だからと言って、何故、このようなアジアの僻地（へきち）に来なければいけないのだろうか？

ソフィアが不機嫌なのには、湿度の問題だけでなく、他にも重大な理由がある。ソフィアは、日本になど、来たくはなかったのだ。

今年23歳のソフィアは、昨年の夏、ギリシアの首都にあるアテネ大学を卒業したばかりだ。ギリシアでは、自国の大学を卒業した後、短期または長期の海外留学をするのがごく一般的である。大学進学のためにサントリーニの田舎からアテネへ出、ギリシアきっての名門大、アテネ大学の法学部に進学したソフィアは、入学直後から野心に燃えていた。自分も大学卒業後は留学し、アメリカの大学院でＭＢＡでも取ろうかと考えていたのである。ところが無事に最終学年を迎えた際、両親から「日本の大学ならば、留学してもよい」と宣告を受けたのだから、ソフィアの困惑と言ったら尋常ではなかった。

正直なところ、母親の故郷ではあるが内心〝日本〟という国をバカにしていたソフィアは、両親に詰め寄った。が、父のアキレスから「日本以外なら学費は出さない」と言われ

てしまうと、もうこれ以上の抵抗をすることは困難である。また、友人がみな海外留学の準備に勤しんでいるというのに、自分だけが就職への道を歩むなど、ソフィアは絶対にイヤだった。結局、不本意ながらも「日本の有名大学に入学する」という選択肢を選ばざるを得なかったのだ。

ソフィアはギリシアの島出身であるが、言葉については「アテネ標準語」を話している。これは「ディモティキ」と呼ばれ、アテネ方言の口語をベースにしたギリシア標準語である。田舎風の言葉など好まないソフィアは、子供のころから標準語を話すよう勝手に努力を重ねていた。大学進学でアテネに移り住んでからは、完全にスカした〝都市部の言葉遣い〟である。

実はギリシア人にとって言語や言葉遣いとは、極めて重要な問題だ。ギリシアは過去に言語、言葉づかいを巡り、国民が激しく争った経験を持つほどなのだ。

国としてのギリシアの歴史はそれほど長くはない。ギリシア民族の国家が存在したことは、1830年のギリシア王国成立前は一度もなかったのだ。しかし確固たる〝ギリシア国〟は存在していなかったとはいえ、古代ギリシアにおいて、各ポリスに属する人々は「自分たちは同胞である」という意識は持っていた。オリンピック競技会に代表される各種の

イベントは、ポリスの枠を超え、ギリシア民族の祭典として執り行われた。また、紀元前480年のペルシャ戦争時には、各ポリスは、ギリシア民族の存亡のため共に戦ったのだ。ここまで民族意識を濃密に共有していたにも拘わらず、〝ギリシア国〟は誕生しなかった。
ギリシア国の成立を見ないまま二度のペルシャ戦争を経ると、各ポリスはマケドニアのアレキサンダー大王の支配下に入り、その後はローマ帝国の一部となる。その後395年のローマ帝国の東西への分裂以降、ギリシア民族は東ローマ帝国、つまり「ビザンチン帝国」の中心民族となった。よってビザンチン帝国の公用語はギリシア語であった。
古代ギリシアの民とは対照的に、ビザンチン帝国のギリシア民族は「自分たちはギリシア人である」という意識を全く持っておらず、自らを「ローマ人」と称し、コンスタンティノープルに首都を置く祖国を単に「ローマ帝国」と呼んでいた。395年から1453年までと、ビザンチン帝国は実に一千年以上もの長きに亘り存続したが、最終的には、アナトリア西北部を起源とするトルコ人の国「オスマン帝国」によって滅ぼされることになる。
1453年4月、コンスタンティノープルの陥落と言う痛撃を受けビザンチン帝国は滅亡し、さらに1456年、オスマンによりアテネ公国も征服されると、ギリシアは「トルコクラティア」、つまり、〝トルコによる支配の時代〟に入った。
トルコ支配下のまま四百年近い歳月が流れた後、1821年、ようやくギリシア独立戦

争が始まる。以降、様々の紆余曲折を経て、1830年、史上初のギリシア人の国である「ギリシア王国」が、遂に成立したのである。民族にとって悲願の独立を果たしたギリシアだったが、今度は、領土紛争や内戦、政変などを繰り返す、凄惨な時代に突入してしまう。

1901年、それまで古代ギリシア語によって記されていた福音書が、口語ギリシア語に翻訳、出版されたことを受け、賛成派と反対派が激突する。翻訳者たちは「難解な古代ギリシア語で著された福音書を、現代の話し言葉に翻訳することが、人民のためである」と主張。それに対し反対派は「古代ギリシア語を現代ギリシア人が理解できないことが問題であり、福音書の現代語訳はなされるべきでない」と反発した。1901年11月には、学生たちを中心に翻訳反対のデモが発生するが、デモ参加者と軍人との間に銃撃戦が起きた結果、無残にも八名もの死亡者を出してしまった。さらに1903年、古典劇「オレスティア」の上演を巡り、再び〝古代語派〟と〝口語派〟の衝突が起きる。口語ギリシア語での上演に反対するデモ隊と警官隊との争いの内に、またもや死者を出してしまうのである。この「福音書事件」と「オレスティア事件」に象徴されるギリシアの言語問題は、後世にまで引き継がれることとなる。

ソフィアたち現代のギリシア人が話す言葉は「ディモティキ」と呼ばれ、直訳すると、「民衆語」という意味になる。それに対し、口語ギリシア語の使用に反対したギリシア人たちは、

古代ギリシア語を基本とした「カサレヴサ」、つまり「純正語」と訳される言葉を生み出す。純正語カサレヴサ派と民衆語ディモティキ派の争いは、二十一世紀後半にまで引き継がれた。1970年代に至っても、政府の公用文は基本的にカサレヴサであった。さらにギリシアのエリートたちは、公的な場での会話においてもカサレヴサを用いるようになり、ディモティキ派を見下した。ギリシア社会はまさに、言語により二分化されたと言っても過言ではなかったのだ。

　1967年、クーデターにより政権を掌握した独裁政権は、教育現場でのディモティキの使用を禁止する。ギリシアの子供たちは、自分たちが話しているディモティキは、正当なギリシア語ではない、との教えを受けた。ソフィアの父アキレスは、まさにギリシアが軍事政権により支配されていた時期に、小学校において、この偏（かたよ）った教育を受けていたのだ。

「当時は、家族の話す言葉と先生の話す言葉が全然違うので、いつも混乱していたなあ。そのうち、ディモティキとカサレヴサが混ざってきて、どっちが『正しい言語』なのか分からなくなるんだ。……今思い返すと、ただ徒（いたずら）に子供を混乱させただけで、ギリシアの伝統を教え込む役目なんか果たしてなかった、と感じるよ」

　父がこのように昔語りしたのを、ソフィアはよく覚えている。

しかし1974年に軍事政権が瓦解すると、軍事政権と一体視されていたカサレヴサもその地位を失うこととなる。そしてついに1976年、ディモティキがギリシア公用語として認められたのだ。これに付随して、カサレヴサを用いることによって他との差別化を図っていたエリート層も、徐々に姿を消していく。ディモティキの浸透は、最終的にはギリシアの国民的統一に貢献したと言えるかも知れない。

無論、ディモティキの母体となっているギリシア民衆語にしても、地方によって様々な方言がある。そのため、公用語となったディモティキは、首都アテネの方言をベースにしている。ソフィアはこの都市部の公用語を普段から話そうと、リゾート地であるサントリーニに住みながら、涙ぐましい努力をしていたのである。

ソフィアの持ついささか子供っぽい意地のためにも、彼女の母親が就いている職は、まさにうってつけだった。ソフィアの母、京香は長年に亘り、アテネやサントリーニにて日本人観光客向けの公認ガイドをしているのだ。

ギリシアで観光ガイドをするには、ギリシア政府公認の資格が必要になる。生まれの国籍は問われないものの、現時点でギリシア国籍を有すること、歴史、地理、作文の三科目においてギリシア語での試験をクリアすること等、一定の条件をクリアしなければ公認ガイドにはなれないのだ。

晴れて公認ガイドに認定されると、ギリシア各地の遺跡などの観光名所におけるガイド・ビジネスを、言ってみれば寡占状態で展開することができる。何故ならギリシアでは、観光地において公認ガイドでない者が観光客に遺跡等の説明をすることは、好ましくない行為と考えられているのだ。日本人観光客がアクロポリスなどに赴いた際に、現地のギリシア人の友人に案内をしてもらうと、周囲の公認ガイドとトラブルになる可能性さえある。

公認ガイド資格を持ち、かつ眉目秀麗な大和撫子である京香は、観光客から常に引っ張りだこの存在だ。旅行雑誌から取材を受けた経験も幾度かあり、「日本人がギリシアに旅行するならば、京香さんに頼めば間違いはない」という評判が立ってしまった。そのため京香は、ギリシアにいながらにして日常的に日本人と触れあい、現代風の日本語へのアップデートを行い続けてきたのだ。京香の話す言葉は、現代の日本人にとっても違和感が少なく、美しい日本語だ。

また父が経営するホテルも、島一番の高級ホテルであるため、もともと日本人の宿泊客が多い。加えて、京香のガイドを気に入り、急きょアテネからサントリーニへ滞在先を変える日本人まで出てくるのだ。この場合、多くの観光客は、京香の夫であるアキレスの経営する老舗、ホテル・クリティアスに宿を求めた。

こういった様々の理由で、ソフィアはギリシアに住みながらも、常に日本語に囲まれる

という生活をしてきたのである。そのためソフィアの日本語は、とても外国籍の人間とは思えない、堂に入ったものなのだ。

「もう、何でこんなに自動販売機があるの！　まるで、さっきからジハンキしか見てないみたい！」

成田エクスプレスから降りたソフィアは、駅の構内でも文句のオンパレードだ。流暢な若者言葉で盛んに悪態をついている。実際のところは自動販売機以外にも山ほどの事物を目にしているのだが、現在ご機嫌斜めの彼女にとっては、目につくもの全てがイラつきの材料だ。続いてソフィアは、しかめっ面のまま地下鉄に乗り換えようとし、またも文句を言い連ね始めた。侵入防止バーに、行く手を阻まれたのだ。

「アテネの地下鉄には侵入防止バーなんてないのに！　日本だと何故、切符を変な機械に通さないといけないのよ？」

改札の侵入防止バー。実はアテネの地下鉄には、これが無いのだ。切符を買わずとも、ホームまで入れてしまう。その代わりに車内へ時折、検札官が抜き打ちチェックに来る。もしも切符を提示できない場合、通常料金の60倍の金額を請求されることになるのだ。

アテネの地下鉄は、日本の地下鉄網の複雑さとは大きく隔たりがあり、今のところ三路線のみだ。路線が少ないのには理由がある。３０００年以上の歴史を誇る古都、アテネの

地下には、当然の如く、遺跡があまた埋まっているためだ。新地下鉄路線の建設工事中は、いたるところで古代遺跡が発見されてしまい、アテネ当局は度重なる工期の遅れと工事費上昇に悩まされた。

ソフィアが日本を訪れるにあたって利用した空港は、この3号線の終点、アテネ国際空港である。アテネ国際空港は、別名をエレフテリオス・ヴェニゼロス国際空港という。エレフテリオス・ヴェニゼロスとは、生涯で九度も首相を務めた、二十世紀前半のギリシアを代表する政治家である。ここからパリのシャルル・ド・ゴール空港を経て、ソフィアは遠き日本へやってきたのだ。

飛行機が着陸態勢に入ったところで、ちょうど目が覚めたソフィアは、窓に顔を近づけた。何とはなしに、これから自分が暮らすことになる土地を上空から眺めたのだが、ソフィアは大いに驚いてしまった。何故なら、遥か眼下に見渡せるこの国土には、どうやら市街地域と森林地帯の、大きく分けて二つのエリアしか無かったのである。ここまで緑に綿密に覆われた土地を見たのは、ソフィアには初めてのことだった。

ソフィアの故郷、ギリシアは乾燥している。ギリシアの森林率は29.1%だが、これはあくまでギリシア全土での数値だ。森林が少なくない西部山岳地帯のおかげで、ギリシアの森林率は随分と嵩上げ(かさあ)されている。アッティカのアテネ周辺やペロポネソス半島に限

れば、森林率は一桁にまで下がってしまう。低層の岩山と乾いた低地が延々と続くのが、ギリシア国土の特徴のひとつと言えるのだ。マケドニアや西部山岳地帯方面を除き、アテネ周辺やペロポネソス半島、エーゲ海の島々は、色で言うならば白と茶の世界である。飛行機から見下ろすと、土地の白色と茶色、海の青が目に飛び込んでくる。

実はエーゲ海が特異な青色に輝いているのは、ギリシア本土が乾燥地帯であることもその大きな理由なのだ。アテネを中心としたアッティカ地方、ペロポネソス半島、エーゲ海の島々などには、目立った川が見当たらない。さらに、ギリシアは雨が非常に少なく、特に夏季はほとんど降らない。有機物が海に流入することも極めて少なく、従って当然プランクトンの発生量についても小さく抑えられるため、エーゲ海はあれほどに高い透明度を保っているのだ。

独特の眩しさを誇るエーゲ海に比べると、日本国土の周辺の海は、沈んだような濃紺色だ。岩山と灌木、澄んだ青色の海を持つギリシアの島から、20時間のフライトを経て、鬱蒼と茂る森と緑の山脈、くすんだ紺色の海洋に囲まれる日本列島に遥々やってきた。機上のソフィアは、窓外を眺めながら、大きく嘆息したのだった。

時は２０１Ｘ年。日本は現在、数年前から実施された霧島内閣の経済成長路線により、

ようやくデフレから脱却しようとしている。

それに対してソフィアの祖国ギリシアはと言えば、先般ユーロを離脱し、ユーロ加盟前のギリシア通貨ドラクマに戻り、為替レートは暴落した。ユーロ加盟国だった時期に較べ、為替レートは実に半分にまで下がっている。つまり現在ギリシアは、超・貧乏になっているのだ。

政府はデフォルト、つまり債務不履行の状態に陥り、ソフィアら学生の生活にも大打撃を与えた。以前は大学生の留学に多額の国費が投じられていたのだが、現在は政府からの補助が無くなってしまったのだ。

また、ユーロに加盟していた頃には、商店にはドイツやオランダの加工食品、フランス産の農産物などが普通に並んでいたというのに、今や外国製品など高嶺（たかね）の花。為替レートが暴落したことで、海外製品の実質的値段も上がった。当然、これまでと同様には海外製品を輸入できなくなってしまったのだ。

外国製品が入ってこないなら、自国で生産すればよい。しかしギリシアでは、製造業はそれほど発達していないのが現状だ。新たに国内生産に手間をかけるよりも、既に生産ラインが確立している生産地から良品を輸入すれば事足りる、という考えが優勢だったことも理由のひとつである。ドラクマ暴落後、アテネの地元の小売店に並ぶ品々は、価格は安

いが品質はイマイチの国内製品ばかりになっている。
何故ならギリシアには、大手製造業が一つも無いからだ。度重なるクーデターや内戦、軍事独裁など、政変による混乱が続き、企業が安心して投資できる環境に長らくなかったことが最大の理由と考えられる。ある国において製造業を勃興させるには、国内社会の安定が不可欠なのだ。例えば、政治的混乱が断続的に発生している中東やアフリカ諸国において、まともな製造業を持つ国は、最南端の南アフリカのみである。逆に、ベトナム戦争後は比較的情勢が安定していた東アジア、東南アジアには、強固な製造業を持つ国が少なくない。
製造業の不在による商品の不足に加え、公的部門の肥大化により引き起こされた、民間企業が投資しにくい環境。この二つの問題を要因とし、ギリシアは慢性的な貿易赤字、高インフレに悩まされてきた。ユーロ加盟前まで、ギリシアは毎年のインフレ率が20％を上回ることが少なくなかった。その後ユーロに加盟してからは、インフレ率こそ5％未満で安定するようになったが、その分、貿易赤字が拡大してしまうこととなる。結局、ユーロに加盟して以降もメイド・イン・ギリシアの製品が増えることはなく、ギリシア国民は外国から輸出したモノやサービスの消費を相も変わらず続けた。ギリシア国民の消費好きは度を越しており、個人消費がＧＤＰに占める割合は75％と、何とあの消費大国アメリカを

も上回っているのだ。

消費大国ギリシアにとって問題なのは、小売業を営む大企業が国内に存在しないことだ。ギリシアの産業といえば、観光業と勘違いしている人が少なくない。確かに外国人のギリシア観光は、ギリシアにとって「観光サービスの輸出」に該当し、大きな輸出産業の一つだ。しかし実は、産業規模として最大なのは小売業なのである。しかも、ギリシアの小売業は、いわゆる中小零細企業がほとんどだ。

製造業がない。大きな小売業もない。従ってギリシアでは、高学歴の若者が就職する先は政府、つまり公務員しかなかった。貿易赤字国のギリシアが政府の規模を肥大化し、外国からの政府の借入を増やしていった結果、ユーロ崩壊へと結びつく財政危機が発生したのである。

結局、ギリシア経済の問題とは、自国で商品を生産しないという点に尽きるのかも知れない。ユーロ離脱後のギリシアでは、新たに導入された新通貨「ネオ・ドラクマ」の為替レートは、ひたすら下落の一途を辿った。結果的に、ユーロ加盟国などからの商品の輸入が激減し、現在のギリシアはかつての高インフレ体質に戻ってしまった。商店に物が並ばず、しかも並んだとしても品質は悪く、国民の不満は非常に大きいのだ。

それに比べて、日本は何故これほどに商品が豊富なのか！　日本産のものも、外国産の

ものも、そこら中に山のように溢れている。

（全部、ギリシア政府が悪いんだ）

ソフィアは、歯軋りしながら歩を進める。本来であれば自分は、超ド級の貧乏になったギリシアに見切りをつけ、アメリカでＭＢＡを取得して、グローバル人材として生きる予定だったのだ。それがこんな、東洋の辺境の島国に追いやられてしまうとは……。

（みんな、父さんと母さんのせいだわ）

イライラしているソフィアの目に、次々に商品の姿が飛び込んでくる。それにしても、値段が高い。ギリシア人の自分からすると、日本の物価は驚くほど高価だ。ソフィアは祖国の状況を思い出し、ますますムカついてきた。

ソフィアには兄と姉がいる。どちらもソフィアと同様にアテネ大学の出身であり、その後日本の明誠大学と学修館大学に留学した。兄たちは、ギリシア語、日本語、英語、イタリア語、スペイン語と、何と五か国語を操る秀才でもある。日本語に至っては、尊敬語から謙譲語までを器用に使いこなすエキスパートぶりだ。これは勿論、母親が日本人というアドバンテージがあるものの、彼らの資質によるところも大きい。くだけた日常会話の俗語から、ビジネス用語まで使いこなせるのは、兄たちの能力が高い証拠だ。

しかし、その優秀な人材である彼らが、ギリシア通貨危機や政情不安の故、就職もまま

ならない有様なのだ。現在、兄は在希日本大使館で臨時職員として働き、姉は商社で短期契約社員として働く日々である。正職員への道は遠く険しいのだ。

現在のギリシアの失業率は、実に30%を上回っている。特に若年層失業率については65%という、先進国としてあり得ない水準にまで高まっているのだ。この惨状を引き起こした主な要因として、これまで若者にとって最大の雇用主であったギリシア政府が、公務員数を増やせないでいることが挙げられる。

ユーロ離脱までのギリシアは、債権国であるドイツやフランス政府、それにEUなどの国際機関の圧力で、公務員削減や増税を中心とした緊縮財政を強制されていた。結果的に、ギリシア経済の規模はピーク時の半分未満にまで縮小してしまう。国民の所得が縮小したため、政府の税収も激減し、財政がますます悪化する悪循環に突入したのだ。失業率の極端な上昇に耐え切れなくなったギリシア国民の焦燥は止まる所を知らず、彼らは連日のように大規模デモを敢行した。世論の猛烈な向かい風を受け、ND（新民主主義党）を中心とした連立政権が倒れると、ユーロ離脱と反緊縮財政を主張する野党側が総選挙で勝利する。そしてギリシアは、史上初のユーロ離脱国となった。これをもってヨーロッパ中に、ユーロ崩壊を暗示する厳かな旋律が響き始めたのだ。

ユーロ離脱後のギリシア政府は、新たにネオ・ドラクマを導入し早期の通貨切り替えを

図ったが、瞬(またた)く間にユーロ建て対外債務のデフォルトに陥る。事前の予想にたがわず、ギリシア経済は混乱した。ネオ・ドラクマの為替レートは、導入時点と比較し、すでに半分未満にまで低下している。当然ギリシアへの輸入物価は跳ね上がり、国民は30%を超えるインフレ率に苦しめられることとなった。

現在ギリシア政府は、暴落した為替レートと激減した国民所得を利用し、外資系製造業の投資を拡大しようと図っているが、今のところ捗々(はかばか)しい成果は上がっていない。通貨下落の影響で外国人観光客は確かに増えたが、国民は何とか日々を生き残るための糧(かて)を何とか得ている有様なのだ。またも政府に対する怒りにあふれてきたソフィアは、辺りを睨みつけるように見渡した。

(ギリシアも、日本も、まるでウンザリなのよ)

ソフィアが居を定めたのは、大学からのアクセスも良く、利便性高い町でもある吉祥寺だ。タイミングが良かったのか、この駅前商店街からほど近い、瀟洒(しょうしゃ)なマンションを借りることができた。ギリシアの高級ホテルで生まれ、広々とした家屋に親しんで育ったソフィアにとっては、異様に狭く感じられるこの1LDKのマンションも、何とか一応の体裁を整えられた。室内のあちらこちらに、本国から持ち込んだ雑貨が並んでいる。

日本での生活場所を整え、公的手続きなども済ませると、入学式はもう目前だった。夕食を済ませ、部屋でくつろいでいたソフィアの横で、京香がマンションの窓を大きく開けた。一気に野外の冷気が流れ込み、ソフィアは顔を上げる。
「何？　寒いんだけど」
早速に不機嫌な声を発したソフィアを振り返らず、京香は窓外を眺めている。
「見てごらんなさい、ソフィア。桜の花がよく見える」
ソフィアは座っていた椅子から重たい腰をあげ、母に並んで窓辺に近づいた。確かに、マンションのすぐ横の公園には、大きな桜の木が立っているのだ。これまで気づかなかったが、どうやら大木は花の盛りを迎えたようで、ほの白い小さな花が無数に咲いているのが分かる。しかし、ギリシアの青い空と海をバックに咲き誇る、マゼンタ色のブーゲンビリアに馴れ親しんだソフィアの目には、〝白い紙屑のよう〟としか映らない。
桜から視線を逸らさぬまま、母の京香が、
「ソフィア、入学式はスーツで行くの？」
と尋ねてきた。
「そのつもりなの、知ってるでしょ。今更、何よ？」
ソフィアがけんもほろろに返すと、京香はやっと娘に向かい、少し寂しそうに答える。

「日本では、入学式や卒業式で着物を着る人も多いのよ。まあ今から思いついても、もう難しいんだけど……」
「服装なんかどうでもいいでしょ？　着物なんかイヤ、暑苦しそうだし。それに大体、私はギリシア人で、日本人じゃないんだから」
「そうよね」
母からの言葉は、それ以上は続かなかった。
未だ肌寒い春風の中、ソフィアが無事に入学したのを見届けると、京香はギリシアに帰って行った。

ソフィアが入学したのは、三鷹市に広大なキャンパスを構える、国際リベラルアーツ大学、通称ＩＬＵである。ＩＬＵは、グローバリズムに基づく「自由なる市民育成」を教学方針とした、米国型リベラルアーツ系教育機関の日本版だ。リベラルアーツの起源を遡（さかのぼ）っていくと、まさに古代ギリシアに行きつく。元々は、ヨーロッパの神学校や法律大学に進学する学生のための、基礎教育の性格を持っていたのだ。しかし現在は、言うなれば〝リベラルアーツのアメリカ化〟が進んでおり、マルーンズ大学を中心とする新自由主義経済学の教養の基礎を学生に教示する色合いが強くなってきている。当然ながらＩＬＵ卒業後、

新古典派経済学の本家本元であるマルーンズ大学や、オールストン・ビジネス・スクールに留学する学生は少なくない。

事もなくキャンパスライフを始めたソフィアだったが、しかし日が経つにつれ、大きな悩みが彼女にのしかかってきた。既に入学して一か月以上経つというのに、仲の良い友人が未だに一人もできないのだ。

常日頃からステディな友人を作ろうと努力してはいる。しかしソフィアには、どうも日本人との間に壁があるように思えて仕方がないのだ。日本人の多くは、自己紹介ははきはきと明朗で、笑顔も絶やさないというのに、そこから先の会話には繋がりにくい。

ソフィアに興味を示す学生は少なくないのだが、彼らの態度も、不可解だ。近づいてきたと思ったら、離れていく。離れていくと思ったら、次の日には近づいてくる。結局、自分と親しくなりたいのかそうでないのか分からず、距離感が全くつかめないのだ。

何らかのきっかけが欲しいと思い、ソフィアは友人たちをホームパーティに誘うことを思い立った。リベラルアーツは日本の他大学と違い、中学高校のようなクラス制度がある。ソフィアが少々気後れ(きおく)しながらも、同じクラスに属する女子学生10人程度に声をかけたところ、数日の後、何とそのうち5人から参加したいとのメールが返ってきたのだ。

約束の週末、ソフィアは朝から仕込みをし、夕刻には学友たちをマンションへ迎え入れ

た。訪れたのは皆、大学一年、一律19歳の面々である。ソフィアはここぞとばかりに腕を振るい、数々の自慢の手料理を披露する。部屋の大きさに合わせて小ぶりのダイニングテーブルの上に、所狭しと大皿が並んだ。乱切りトマトとスライス胡瓜の上に、フェタ・チーズが乗ったギリシャ・サラダ。ひき肉とナスとジャガイモを交互に重ねてオーブンで焼いたムサカ。ブドウの葉でコメなどを包んで蒸したドルマ、などなど。ギリシアの家庭料理のオンパレードだ。

「すごい、おいしー！」

ソフィアの住む1LDKのマンション内に、次々に友人たちの歓声が上がる。

「なんか、ギリシア料理って、日本料理と共通点あるよね」

「分かる！　野菜と魚介類がけっこうメインで出てくるし、お米まで使ってるし」

「味付けが〝素材の味を生かす系〟なのも、似てる気がする。フレンチとかって、ソースの味で食べるイメージ強いけど、ギリシアも日本も、ハーブの香りと塩分が基本だよね」

友人たちは詳しく感想を言いながら丁寧に完食し、食後のギリシャ・コーヒーにまで「珍しい、美味しい」と称賛の言葉を繰り返した。手放しで喜んでくれた学友たちの様子に、ソフィアもご満悦である。

帰りがけ彼女らは口を揃えて、今日のソフィアの厚意を褒(ほ)め称えた。

「ソフィアさん、今日はありがとう。異文化に触れられて、すごく勉強になった」
「留学生の多いＩＬＵに入学して良かった、と再認識しました、ありがとう」
過分な謝辞を述べられたソフィアは嬉しく、
「ええ、まあ、ギリシア料理だけじゃなく、私はいろんな国の料理が作れるんだけど。でも、喜んでもらえたなら嬉しいわ。また招待するわね！」
と返す。次回、彼女らの家に招かれたときには、一体どんなおもてなし料理が出るのかしら……と期待して、ソフィアは彼らを送り出した。
しかし、待てども待てども、誘いは来ない。
ソフィアは落ち込み、もしかして自分は嫌われたのだろうか？　と悩んでしまった。ところが、講義などで会えば彼女らは一様に優しく、相変わらず親切なのだ。ソフィアは大いに困惑した。この距離感は日本人特有のものなのだろうか？　これが日本における、友人付き合いのルールなのだろうか？
結局彼らからの返礼の誘いは皆無のまま、数週間が過ぎ、日本は入梅の時期を迎えた。
初めて体験する梅雨の鬱陶（うっとう）しさも手伝って、ソフィアの憂鬱は日々深くなる一方だった。
何しろソフィアが育ったのはギリシアの乾燥した島、サントリーニなのだ。これほどの高

湿度の中に生活するのは、初めての体験である。思えばギリシアは森が少なく、歴史的建造物はそのほとんどが石で作られていた。対して日本は木の文化、そこかしこに緑が生い茂り、草花の生えない場所を探す方が困難なほど。雨が多く湿度も高い日本の気候は、植物の生育にはうってつけなのだろうが、石の文化の島で育ったソフィアには馴染めるはずもない……。

紫陽花の葉に乗ったカタツムリを眺めながら、物思いに耽っていたソフィアは、微かに嘆息した。しかし、すぐに思い直す。別にそれならそれで構わないではないか、何故なら、わたしはグローバリストなのだから。国境なんて不要。境界線など取り払い、全てを自由にすればいいのだ。言ってみれば自分は、ボーダレス・ワールドを体現するグローバリストの、先駆者なのだ。

「古臭い日本人なんて、わたしは相手にしなくていいのよ。わたしは世界を飛び回り、活躍しまくるんだわ。日本なんて、日本人なんて、くだらない」

ソフィアは呟き、雨にけぶるキャンパスを今日もひとりで闊歩した。

第三章　日希文化の交差点

大学での研究テーマとして政治報道を選んだソフィアは、講義の後、担当教授である宍戸の部屋を訪ねた。日本国内での一般的な卒論の書き方について、アドバイスを乞おうと考えたのだ。今日もキャンパスは梅雨の中に潤み、ソフィアには耐え難いほどの湿気が迫る。未だ憂鬱が全く拭い去れないソフィアにとって、ＩＬＵにおける唯一の救いは、齢七十近い宍戸教授の持つ優しげな雰囲気だ。

ノックの音を大きく響かせた後、ソフィアが教授室のドアを開けると、見慣れぬ女性の姿がそこにあった。ショートヘアに包まれた卵形の顔の下には、淡い水色のサマー・ニットのアンサンブル。アイボリーの七分丈パンツの裾から、ほっそりと長い脚が覗いている。更に足元は高いヒールのバック・ストラップのパンプス。その落ち着いた風貌から推測するに、どうやら学生ではないらしい。が、また日本人だ、とソフィアは無意識に身構えてしまう。

するとその女性は、流暢な英語でソフィアに話しかけてきたのだ。咄嗟のことに、ソフィアは戸惑い、黙った。雪乃の声によって来客に気づいた宍戸が、ついたての奥から姿を現す。

「いらっしゃい、ソフィア君。ちょうどいい、紹介しておきますよ、こちら、ジャーナリストの一之宮さん」

宍戸が、相変わらずの穏やかな声音で、ソファに座っていた女性を紹介した。すると彼

女はすぐに立ち上がり、
「お会いできて嬉しいわ、ソフィアさん。私は一之宮雪乃（いちのみやゆきの）、フリーランスのルポ・ライターをしています」
と挨拶し、ソフィアに右手を差し出した。実は、英語が話せるというだけで、ソフィアの中で雪乃に対する信頼度が大幅に上がっていた。落ち着いて見直すと、雪乃は知的な雰囲気を漂わせており、少し癖のあるアッシュ・ブラウンの髪も魅力的である。
「初めまして、雪乃。わたし、日本語を話せるわ。それにギリシア人よ。母国語は英語じゃないわ」
「ああ、そうなの。ソフィア、日本語がすごく上手なのね」
「まあね」
ソフィアがそれ以上言わないのを見て取ると、宍戸が、
「ソフィアさんはギリシア国籍だが、母君が日本人なんだ。だから日本語に関しては困ることがまったくない」
と説明を加えた。
ソフィアは本題に入ろうと宍戸に向き合ったが、ここで彼は立ち上がり、身支度を整え始めた。

「申し訳ないが、私はこの後所要があってね。そうだ、雪乃君。ソフィア君は政治報道を専門に勉強したいと希望しているんだ。君、今日のこれからの取材、彼女を連れていってくれないかね。参考になると思うんだが」

驚いたソフィアが宍戸に異論を唱える前に、雪乃がにっこりと笑ってソフィアを振り返った。

「勿論、構いません。ソフィアさん、選挙事務所って見てみたくはない？　吉祥寺だから、すぐだし」

断ろう、と勢い込んでいたソフィアだったが、雪乃の笑顔を見てしまうと、どことなくこの誘いを断るのは惜しいような気がしてきた。当然その理由は、ここ数週間、実はソフィアが随分と寂しい思いをしてきたからに他ならない。しかも取材場所は吉祥寺、帰宅途中の寄り道の延長線上だ。

ソフィアは考え直し、

「行ってもいいわ。それからわたし、ギリシア語と日本語だけじゃなくて、当然、英語も話せるわよ」

と、得意げに英語で付け加えた。

教授室を後にしたソフィアと雪乃は、駅へ向かおうと、キャンパス内を歩き始めた。す

ると雪乃に傘を差しかける男性が現れたのである。
「ありがと。彼女はＩＬＵ学生のソフィアさん。橘さんのところに一緒に連れて行くから」
雪乃が素早く説明すると、彼はすぐにソフィアに視線を合わせ、
「このひとの仕事のパートナーの、カメラマンの神庭亮一です。宜しく、学生さん」
と名乗った。
神庭は日本人らしくない彫の深い顔立ちの持ち主であり、しかも、背が高い。母親譲りで背が小さく、身長が１６０センチしかないソフィアは、雪乃と神庭ふたりを見上げなければならないほどである。
ＩＬＵのキャンパスからＪＲ中央線の三鷹駅までは、徒歩で10分程度である。吉祥寺行きの車両に乗り込むと、神庭は、すぐさま空いている座席にソフィアと雪乃を誘導し、座るよう促した。ふたりを座らせると、神庭はその前に立ち、ポールにもたれながら器用にバッグからカメラを取り出す。日本の電車の混雑ぶりに困惑するのみで、実はまともに座ったことがこれまで一度も無かったソフィアは、神庭のスマート過ぎる一連の行動に感心した。
お互いにひととおりの自己紹介を済ませた後、ソフィアは雪乃に尋ねる。
「雪乃は何故、宍戸先生のところに来てたの？」

「宍戸先生は、学生時代の恩師なの。私は慶和大出身なんだけど、当時宍戸先生は、私が通ってた湘南キャンパスで教鞭を執られてて。学生だったときはあまり真面目に講義を受けてた訳じゃないんだけど……卒業してから、あらためて話を聞きにいくようになったのよね」

「正社員になってからも?」

「ええ」

「仕事がイヤだったの? それとも、暇だった?」

ソフィアのあまりと言えばあまりな発言に、それまで静かだった神庭が割り込んできた。

「学生のうちじゃ分からない〝学校の価値〟というものに、社会人になってから気づくこともあるんだ」

カメラを触りながら、神庭は続ける。

「ソフィアさんも、卒業すれば分かるよ」

何やら、当初の予想に反していけ好かない性格のように感じ、ソフィアは神庭から顔を背けた。

ものの数分で、電車は三人を目当ての場所へ届ける。ソフィアの住む街、吉祥寺。三鷹よりもさらに賑やかであり、人通りは多く、その中心地に井之頭公園があることでも有名

な街だ。
　実は吉祥寺駅は三鷹市ではなく、武蔵野市内に位置している。しかし、井之頭公園があるのは三鷹市だ。吉祥寺駅と井之頭公園は２００メートルほどしか離れていないというのに、両者は明確な境界線によって分かたれているのだ。
　駅と公園との間に引かれた境界線は、自治体の区分であると同時に、選挙区の境でもある。
　ＩＬＵのキャンパスがある三鷹市の選挙区は東京第二十二区。吉祥寺駅がある武蔵野市は東京第十八区と定められている。東京十八区は、武蔵野市に加え小金井市、府中市までをも含む大所帯だ。総有権者数は四十万を超え、小選挙区での当選には最低でも十万票は要すると言われるほどである。
　三人は駅の北口から街へ出ると、すぐに商店街のアーケードの中へ吸い込まれた。ソフィアが不思議そうに周囲を見遣る。
「なんか、わたしのマンションと同じ方向みたい」
「この辺りに住んでるんだ？」
「うん、この十字路を左に曲がって……この寂しい通りに出たら右に行って……あそこに木がたくさんある公園みたいなの、あるでしょ。その向かいのマンションの最上階」

ここまで聞いて、雪乃が笑い出した。
「それって、今から行く取材場所の、目と鼻の先よ！　それこそ徒歩一分もかからない」
橘航太郎の選挙事務所は、吉祥寺駅から北に３００メートルほどの、武蔵野市商工会館の近くのビルに本部を置いている。この三階建のビルは橘家の所有であり、すぐ近隣に銀行やコンビニ、さらには東急百貨店やロフトまである、便利な立地だ。また吉祥寺通り沿いであるため、交通の便も至極良い。さすがサラブレッドの航太郎は、このような好条件の事務所を父からそっくり受け継いだのである。
事務所のガレージには特注の選挙カーが駐車されているが、勿論これも父、龍之介の遺品だ。大型ワンボックス・カーの座席の一部を取り外し、候補者が身体を伸ばして休息できるよう改造してある。屋根の上には演台が設置され、折り畳み方式の梯子がぶら下がっている。
コンクリート製の〝橘ビル〟の上部には、「橘航太郎後援会事務所」と大きく書かれた立て看板、横看板が掲げられている。さらに、若い男性候補者の笑顔が紙面の九割を占めるポスターが貼られ、「国民経済の成長が全て！　橘航太郎」と極太ゴシックで書かれている。
雪乃と神庭と共に橘航太郎後援会事務所の前に立ったソフィアは、そのむやみに目立つ

看板やポスターをとっくりと眺めた。
「前回の総選挙から、もう二年以上経ってる。だから、ここも『後援会事務所』と銘打ってはいるものの、事実上は『選挙事務所』と化しているのよ。もう選挙戦は始まってる状態。皆さん、毎日すごく大変なの」
雪乃はそう説明したが、ソフィアは正直なところ、かなりの違和感を持った。ソフィアの目からは、随分とのんびりしているようにしか見えない。ギリシア人にとって選挙と言えば、もっと切実な、言ってみれば〝血の流れない戦争〟のような感覚なのだ。何故なら、ギリシアは過去に度重なる政治的混乱を経験しており、自らが投じる一票がまさに国民の生活を左右してしまうことを、身を以て体験しているからだ。
四百年にも及ぶトルコクラティア、オスマン帝国の凋落を受けバルカン半島で繰り返された戦乱。ナチス・ドイツを中心とするファシスト国家の侵略、さらに内戦と軍事独裁政権。厳しい歴史の中で何とか生き残ってきたギリシア人は、決して政治を舐めたりはしない。それは国民が、政治家を尊敬しているということではなく、政治を〝我がこと〟としてとらえる心情が強い、ということだ。これに伴い、当然、投票した政治家からの『恩恵』を期待する傾向も、国民の中に根強くある。
ソフィアの父アキレスは、かつて彼女に、

「ソフィア。歴史上、最も多くの人間を殺した職業とは、何だと思う?」
と、ギリシア人らしく、どことなく〝哲学者っぽい〟質問をしたことがある。ソフィアが、
「軍人? じゃない?」
と返したところ、アキレスは静かに首を振り、答えた。
「違うんだよ。答えは、政治家だ」
考えてみれば、軍人とは基本的に政治の要請で動くのだ。間接的にではあるが、最も多くの人を殺す職業、とは間違いなく政治家だ、とソフィアは納得させられた。特に国民国家では、国民の内から選挙によって選ばれた政治家が、軍人に命令し、敵対国の国民を殺させる。つまり選挙によって、〝人の生き死に〟がまさに左右されるのである。選挙とは戦いであり、ないがしろにされて良い部類のものでは到底ない。
その故もあってかギリシアの選挙は、他国と較べ随分と風変りである。何より投票する際には必ず、生まれ故郷の教会へ赴かなければならない。さらにギリシアでは「義務投票制」といって、有権者に投票義務が課せられているのだ。これに違反すると、入獄一か月以内の刑罰が与えられるルールになっている。
ギリシアは民主主義発祥の地であるのは確かだが、近代デモクラシーの祖ではない。何故ならギリシア人は四百年近くもの間、普通選挙制度を持たないオスマン帝国の支配の下

で、細々と生きてきたからだ。ギリシアで普通選挙が初めて行われたのは、1877年だ。しかしこの時点ではまだ成人男子に選挙権と投票権が与えられたに過ぎず、全ての成人男女が選挙権を行使できる「完全普通選挙」が実施されたのは1952年である。

1946年に本格化した内戦は、1949年にようやく終結し、1952年のNATO加盟と完全普通選挙実施という大イベントを迎え、ギリシアはようやく、普通の民主国となり得たかに思えた。ところが内戦下の暗い記憶は、その後のギリシアの歴史全体に大きく影を落とし、国内の至る所で、政争とテロリズム、またそれに対する報復が激化していく。

1963年、民主左翼同盟の党首が暗殺され、翌1964年の選挙において、ゲオルギオス・パパンドレウ率いる中央同盟が絶対安定多数を得た。しかし、ここでパパンドレウは、内戦時の政治的トラウマの克服と共に、東側諸国との関係改善に手を付け始めたため、軍部やアメリカの逆鱗に触れてしまう。1965年、軍の統帥権を巡り国王と首相の対立が激化。国王派軍人らの苛立ちも後押しし、ギリシア国王コンスタンティノス二世は7月、パパンドレウ首相を解任してしまう。ギリシア国内ではパパンドレウ派と反パパンドレウ派との間で政治闘争が激化し、国民は連日デモやストライキに明け暮れることとなる。そして1967年4月21日、とうとう、右派軍人の一団が、クーデターを決行するに至る。この年の五月に予定されていた総選挙において、パパンドレウ率いる中央同盟の再勝利が

確実視されており、これに対抗したのである。
クーデターによって強引に樹立された暗黒の軍事政権は、共産主義者や反軍事政権の民への圧政を貫き、その後1974年まで続いた。
大戦後も変わらず苛酷な時代を生きてきたギリシア人にとって、選挙に対する思い入れの強さが日本人の比ではないのは、当然なのだ。選挙とは戦争も同然。ソフィアの目には、日本の政治活動は緩慢（かんまん）としか映らないのである。
「賀茂（かも）さん、こんにちは」
雪乃が挨拶すると、事務所の入り口近くに置かれたテーブル・セットの椅子に腰かけていた初老の男性が笑顔を見せた。航太郎の支援者である賀茂は、手にしていた湯呑を卓上に置いてから応える。
「やあ、一之宮さん。いつもご苦労様。……そちらは？」
日本人らしい黒褐色の瞳を向けられたソフィアは、またも身構えてしまう。
「ソフィア・ヴァシラキ。ギリシア人よ」
突き放したようなソフィアの物言いに、雪乃は急いで付け加える。
「ソフィアさんは、日本とギリシアの混血、ハーフなんです。お母様が日本人なので、今はＩＬＵに留学中、政治学を専攻していて……つまり今日は、勉強の一環として、日本の

選挙現場の見学に来たんです」
「ああ、そうかね」
賀茂がさらに優しげな表情になり、ソフィアを見つめる。事務所に居残っていた人々も一斉に、物珍しそうな視線をソフィアに送ってきた。
「女優さんみたいねえ！　こんな美人なのに、ＩＬＵの学生で頭もいいなんて」
モスグリーンのスーツを着込んだ、ぽっちゃり体型の中年女性、花園が、にこにこしながら近寄ってくる。
「こんにちは、花園さん」
「よかった、今ちょうど、候補が戻ってきたところですよ。呼んできますからね」
雪乃と神庭、そしてソフィアは事務所の奥にある応接室に案内され、ソファへ座るよう勧められた。本革張りの、しなやかな手触りのソファだ。
「ちょっと、候補って何？」
ソフィアが囁くと、雪乃は、
「選挙の立候補予定者のこと。日本では省略して呼ぶのが定着していて、選挙に出る人のことを『候補』って呼ぶの」
と答えた。ソフィアはすぐさま言い返す。

「違う違う。だから、なぜ、その候補ってやつに会うのよ？」
「あ、そういう意味か。つまり、いま私は本を書いているんだけど、その主役が、ここの事務所の候補、橘航太郎氏なのね。彼の今回の選挙戦に密着して、一冊のドキュメンタリー本に仕上げるの。……航太郎さんの知名度が抜群だから〝売れる〟ってのもあるけど、今、彼のような人物の戦いを世に知らせるのは大きな意義があると、私は考えてるワケ」
「だから、雪乃はいつも通りに取材すればいいでしょ！　なんで、わたしまでこんな部屋に通されてるの？」
雪乃はちょっと呆れ顔になった。
「勿論、私と神庭さんだけだったら、あらたまって応接スペースでご挨拶するような仲じゃないけど。でも今日は宍戸先生から、大学の授業の一環として、あなたをお預かりしたのよ。ソフィアさんがゼミの延長のつもりで参加できるように、さっきこちらの事務所に電話して、お願いしておいたの。疑問に思った点とか興味があることとか、自由に質問していいから」
「へえー……」
興味なさげにソフィアが呟いた直後、応接間入口の扉が開いた。
「こんにちは、橘航太郎です！」

まるでアナウンサーのように滑舌の良い声が大きく響き、続いて、その声の主である男性の姿が室内に現れた。

ソフィアは驚いた。目の前で見る〝候補〟橘航太郎は、さきほどのポスターから受ける印象とはまるで違い、物凄い美形なのである。背はそれほど高くはなく、確かにアジア人らしさは否めない。が、鼻筋がくっきり通った高い鼻、憂いを含んだ二重の瞳は、ソフィアがこれまで出会った日本人とは一線を画する〝かっこいい〟男性だったのだ。外見だけ見れば、選挙候補というより、映画俳優か何かである。

雪乃が手際よく事情の説明を済ませると、航太郎が口火を切った。

「えー、ＩＬＵで政治学を専攻されてると……。いかがですか？　ギリシアと日本では、『選挙』や『政治』のスタイルは違う点も多いかと思いますが」

すると、にこやかに話題を振った航太郎に向かい、ソフィアはいともドライに応えたのだ。

「まあ、違うわね。でも、選挙とか政治とか、個人的にはどうでもいいんだけど」

「え」

さすがに驚いて、航太郎は間の抜けた声を発し、雪乃も微妙な表情になった。神庭はと言えば、専門外のことには絶対に口を出さないと〝自分ルール〟を決めているらしく、今

回も黙って聞いている。
　周囲の変な空気に気づかないのか、ソフィアは続ける。
「だって今や時代は、物やサービス、お金、人がグローバルに動き回る、『自由な世界』に向かっているじゃない。最終的には国境線をなくし、グローバルにフェアな規則の下で、各人や各企業が競争していく。このグローバル化の流れはどうしたって止められないから、どうせ国内政治なんて、すぐに誰も重要視しなくなるわよ」
「……」
「選挙や国内政治は、あくまで国境線の内側の些末なルールを決めるためにあるわけでしょう。でもね、各国の個別のルールなんて全部廃止されて、国境線の向こう側とこちら側で自由に貿易や投資が行われ、労働者も自由自在に動き回れる、そういう世界が、近い未来に完成されるわ。そうなれば、政治は最小限のことだけをやっていればいいから、社会の非効率やムダはすごく小さくなるし。つまりね、人間は政府が決めた余計な規制なしで、自由に生きるのが一番幸せなの」
　航太郎は目の前の美女を、それこそ穴が開きそうなほどに見つめてしまった。航太郎が驚いたのも無理はない、何故なら、ソフィアの精神状態はまるで、数年前の自分とそっくりだったからである。グローバル、グローバルと連呼し、自分がどこの国の人間であるか

を忘れている。しかし航太郎が日本人であり、ソフィアはギリシア人なのは、誰が見ても明白な事実ではないか。それにも拘わらず、この子は一体、何をぐだぐだ騒いでいるのだろう……。

場に微妙な空気が流れたところで、ちょうど航太郎の秘書の嵯峨野が、人数分の日本茶を淹れて応接間に入ってきた。気を利かせた雪乃が他の話題をふりかけたのを制し、航太郎が口を開く。

「ソフィアさん？　でしたね」

確認した後、航太郎は続ける。

「つまりソフィアさんは、国や政府が存在せず、政府の規制……つまりは法律ですが、それも無く、誰もが自由自在にビジネスをできれば一番良いと考えている、と。こういう認識で宜しいですか？」

「そう、そう」

ソフィアは事もなげに頷く。

「ビジネスに政府が口を出すと、必ず市場に歪みが生じるの。だって政府って、無責任な有権者から選ばれた政治家と、無能で民間の市場を知らない官僚の組織で構成されてるでしょ。政治家は有権者に言われるまま、地元に余計な公共事業を誘致して、社会保障や補

助金でお金をばら撒き、リソースの配分を歪める。官僚は官僚で、自分たちの利権を増やすためにムダなお金を使いまくる。で、結果的に、社会が非効率化する」

ソフィアはちょっと得意げな表情で続ける。

「つまり、政府の邪魔によって、全部がうまくいかなくなるの。逆に、法律や規制なんて無くし、国境も無くしちゃって、皆がグローバル市場で自由平等に競争していけば、人類全体が潤うの。理想の世界が築けるのよ」

次々に言葉をつなげるソフィアの姿を、航太郎は、ある種の不可思議な感覚と共に見つめていた。……デジャヴュ。目の前の女性は、前回の選挙戦での自分の姿そのままだ。あのとき、選挙に敗北した責任を有権者に押し付け毒づいた自分を、言葉少なに見つめていた、支援者の視線。きっと今の自分は、あの時の彼らと同じ目をしているに違いない。

新古典派経済学の教科書を丸暗記し、自分が現場の仕事を未だ知らぬ子供であることを忘れ、机上の論理で自由や市場を語る。徒(いたずら)に国家や法律などのルールを否定し、国境を忌(き)避(ひ)し、自らの能力を無謬(むびゅう)であると勘違いする。現実には国の庇護の下でぬくぬくと育ってきたのにも拘わらず、「政府や政治は市場を歪める、非効率で無駄な存在」と決めつける。数年前の自分に酷似した口調で、全く同じ内容を喋るソフィアを前に、航太郎には異様な恥ずかしさが込み上げてきた。政治学の道を志し、選挙戦を戦おうとしている自分を訪ね

てきたにも関わらず、「政治など不要」と言ってしまう。そんな想像力に欠けたところなど、まさしく三年前の自分そのままだ。
「んー、ソフィアさん」
かなり言葉を選びながら、航太郎は切り出した。
「ソフィアさんはギリシア人です。つまり、ギリシアという国家に守られて育ってきたのです。自分はその恩恵を受けて大人になったというのに、国を全否定するのは、何だか不思議な感じがしませんか」
「全否定じゃないわよ！」
ソフィアの表情が一気に不機嫌に変わり、口調も強くなる。
「わたしは冷静な判断で、批評をしてるのよ！　ギリシアなんてダメな国だわ。みんな貧乏で、仕事がなくて、国民はもう誰も政治に期待してない。失業率を下げることもできず、債務不履行に陥り、それでも何もできない政府なんて！　つまり、ギリシア政府はバカなのよ！」
「……」
「いや、もしかしたらギリシア政府も、バカなことをした過去もあったかも知れませんが……」
その政府を織りなす政治家を選んだのは、ギリシア国民一人一人でしょう、と続けよう

とした航太郎だったが、ソフィアに遮られてしまう。
「政府にも国民にもお金がない。カルフールも撤退しちゃって、店にはろくな製品がない。わたし、スーパーだと、カルフールが一番のお気に入りだったのに！　食品はあることはあるけど、フランス産からギリシア産に切り替わって、質はね、はっきり言って、ガタ落ちよ。通貨が暴落したおかげで、輸入品の値段は三倍くらいに跳ね上がって、買うに買えないし。若者は仕事が無くて、何ていうの、あ、NEETよ！　その、NEETになって、両親や祖父母に寄生して何とか生きてる。いつの間にか居ついてた不法移民が犯罪を起こすから、治安は悪化するばかり。どう、こんな政府、あったってなくったって、同じでしょ⁉……ううん違う、政府が無い方が国民は自分で努力するはずだから、そっちの方が絶対マシっ」
「いや、あのさ、一応、言いたいことは分かるんだけど……」
マシンガン・トークで自国の悪口をまくし立てたソフィアに、航太郎は漸く、口をはさむタイミングを見つけた。ソフィアにつられたのか、これまでの〝政治家らしい丁寧口調と、オブラートに包んだ表現〟が崩壊し、航太郎まで〝タメ口〟になっている。
「だからと言って政府をなくしてしまうと、弱肉強食の世界になる可能性もあるじゃないか。君、頭が良いようだから、そういう想像もつくだろ？　市場や社会での自由競争に勝

ち抜く人もいるだろうけど、当然その一方で、負ける人も出てくる」
「負ける人？　そんなの、自己責任でしょ」
ソフィアは、いともあっさり断言した。
「本人が無能だから負ける人間を、可哀相だからって政府がいちいち助けてたら、お金がどれだけあっても足りなくなるわよ。というより、ギリシア政府は過去に社会保障のお金を出しすぎていて、ドイツやフランスからお金を借りなきゃいけなかったの。あのとき、ちゃんと年金とか社会保障を切り詰めてれば、こんな事態にならなかったんだから」
「そういう部分も確かにある、が……」
航太郎は口ごもった。基本的に、新古典派経済学やグローバリズムの洗礼を受けた人々は、社会保障に代表される政府の支出について「常に削減するべき」と主張する。彼らにとっては、自己責任で負けた敗者を救うためのセーフティネットなど、無駄以外の何物でもないのだ。
『市場において、個人や企業が同じ条件に基づき競争し、勝者と敗者に分かれる。何らかのハンディキャップを負っていた場合はともかく、その他の市場における自由競争は、各プレーヤーに対し公正である。同一条件で敗北した以上、敗者の敗因は自己責任以外の何物でもない。自己責任で敗れた敗者に対して、政府は何もする必要はない、それどころか

〝何もしてはならない〟のだ。なぜなら、敗者はその気になれば、別の職に就くなり新たに起業をするなりの、再チャレンジの機会を与えられているからである。再チャレンジの機会に挑まない敗者もいるだろうが、それこそ自己責任であり、そのような怠け者のために、勝者から徴収した貴重な税金を使うなど、言語道断。再チャレンジの機会は、全ての者に平等に、自由に無限に、存在するのだから』

オールストンで航太郎は、現在の世界を席巻している新古典派経済学の教義、「負けた奴は自己責任」のロジックを、嫌になるほど叩き込まれた。しかし今の航太郎は、このいわゆる〝自己責任論〟を放置しておくことに、絶大なる違和感を持っているのだ。だからこそ目の前の、小生意気な外国人留学生に、何かうまい文句を言って納得させたいと思うのだが……。

「ソフィアさん、こういうのはどう?」

突然発された雪乃の明るい声が、航太郎の思考を遮った。

「航太郎さんは、来年の総選挙に立候補する予定の、選挙支部長、という役職に就いてるの。つまりこの事務所は、ある意味、日本の政治の最前線とも言える」

航太郎とソフィアは、揃って怪訝な顔を雪乃に向けた。

「航太郎さんはね」

雪乃は笑顔で続ける。
「OBS、つまりオールストン・ビジネス・スクールで、優秀な成績でMBAを取った秀才なの。同じように優秀なソフィアさんとは、正直、すごく気が合うと思う」
「そうだったの？」
ソフィアは改めて航太郎をまじまじと見つめた。彼も自分と同じグローバリストだったのか、と思ったのだ。
「それで、ソフィアさんは日本の政治を学びに来てるんでしょ。と、いうわけで、この事務所で政治活動の勉強をさせてもらうというのはどうかな？　勿論、外国籍のソフィアさんが活動を手伝うことはできないけれど、見学ということなら一向に構わないワケだし。どう、航太郎さん、良くない？　こんな美女が事務所に顔を出してくれれば、航太郎さんやスタッフの人たちにも励みになるでしょ」
「い、いや、ちょっと待って……」
航太郎は顔をひきつらせながら、雪乃に視線を送った。気づいてくれよ、と言わんばかりに。現在の自分は単なる落選候補で、来年は再度、人生を賭けた戦いに挑まなければならないのだ。こんな、明らかに面倒くさいタイプの女性、しかも新古典派経済学の熱狂的信者を招き入れるなど、揉め事の種を事務所内に蒔いておくようなものだ。

相手を怒らせずに丁寧に断るには、どんな言葉を使えばいいのか？　航太郎が頭をフル回転させ始めた。と、その時、大きな声が響いた。
「いいわ。じゃあ、見学に来てあげる！」
ソフィアがこれまでとは別人のように元気いっぱい、雪乃に断言したのである。すぐさま彼女は航太郎に向き直り、
「こんなしょぼい事務所だけど、これも大事な勉強の一環だわ。できるだけ頻繁に来てあげるから、感謝してよね」
「感謝って……いや感謝どころか……」
言いよどむ航太郎に構わず、ソフィアは続ける。
「日本のぬるい選挙と違って、ギリシアの本物の選挙を知ってるわたしが味方についたからには、正直、楽勝で勝てるわね。そうだ、あんた、政治家になって、そのまま大統領を目指せば？」
航太郎は内心大きく抗議の意を唱えたが、表面上は作り笑いをキープした。雪乃と神庭は、落選後の孤立無援であった自分に向こうからコンタクトを求め、それ以来ずっと応援してくれている、大事な支援者なのである。
それにしても、と、航太郎は再度ソフィアを見遣った。彼女は早速立ち上がり、自分が

通うことになる事務所内を物色している。どうしたって厄介者の臭いが拭えない女性を抱え込むのを甘受するとは！　手痛い敗北を経験して以来、自分は驚くほど我慢強くなっているのだな、と、あらためて感じ入った航太郎ではあった。

雪乃と神庭に連れられて事務所訪問をしたその翌日から、ソフィアは完全に〝橘ビル〟に入り浸るようになってしまった。地道な政治活動に奔走する航太郎は、当然事務所内にいられる時間も限られ、最初はその実態に気づかなかった。しかし支援者から聞くところによれば、ソフィアは大学で講義の入っている時間帯以外はほぼ事務所におり、講義の無い日に至っては朝から夜まで事務所に〝いっぱなし状態〟になっているという。

航太郎が気づいた頃には、既にソフィアは、大学に行く前に朝食をとるためだけに事務所に来るほどになっていた。また大学が終われば、その後は夕食、食後のお茶まで事務所内で済ませている始末である。時折、航太郎はソフィアに、

「何故、そんなに長時間に亘って見学に来てるんだ？　君が見て楽しいようなイベントは無いし、学業の方も忙しいだろうから、なにも無理して来なくていいんだよ」

とお伺いを立ててみるのだが、ソフィアからは、

「別に」

と、にべもない返事が来るのみである。

しかし、航太郎に接する時のように、ソフィアの態度がいつも悪いかと言えばそうではなく、事務所内の人々はソフィアと和気藹々と楽しげにやっている。厄介ごとを起こすのではないかという当初の心配は、どうやら杞憂に終わったようだ。

「……何だか、よく分からない子だ」

航太郎はひとり首を傾げてはみるのだが、日々の喧騒に追われ、ソフィアのことはすぐに意識の外に出て行ってしまうのだ。

凄まじい土砂降りの夕刻、航太郎は急ぎ遊説先から事務所に戻ってきた。車から降りると、運転してくれていたボランティアの青年、御室も、

「台風、今夜にも関東直撃らしいですよ。自分もこのまま帰宅しますんで、先生もお気を付けて!」

と告げ、すぐさま自家用車に飛び乗ってしまった。一時間前までは強風が吹くのみで未だ雨脚は遠かったというのに、今や横殴りの雨が窓ガラスを激しく叩いている。

航太郎が濡れたスーツをバサバサとはたきながら建物内に飛び込むと、珍しくビルの中は閑散としており、人影がまったく見当たらない。航太郎の自宅は、ここから徒歩10分程

度の閑静な住宅街の一角に位置する、大邸宅である。すぐに帰宅するか、雨が少し弱まるまで待つか、逡巡しながら応接間のドアを開けた航太郎は、大いに困惑してしまった。何故ならそこには、ソファでうたた寝しているソフィアの姿があったからである。

困った航太郎がドアをわざと乱暴に閉めると、大きな音が周囲に鳴り響き、眠り込んでいた彼女の瞳を開かせた。

「えーと、もう帰ったほうがいいですよ。台風が来てるので」

航太郎がいかにも居心地悪そうにしていることに気づかないのか、ソフィアはぼんやりとしたまま、

「……おなか、すいた」

と呟く。

「は?」

ソフィアはやっと周囲を見渡し、事務所内の静かな空気を感じ取ったようだ。

「わたし、随分寝てたのね。そうだ、他に誰もいないみたいだから、食事に付き合ってよ」

「ああ?」

航太郎は戸惑った。正直なところ、航太郎はこの美女の性格が理解不能であり、あまり深入りしたくないのである。しかし、窓に派手にぶつかり大合唱を響かせている、この大

雨。暫くの間は事務所から出ることは困難であろうから、このまま彼女をひとりで置いておくわけにもいかない……。

「えー、まあ、そうですね……いや、暴風雨がスゴイから外食は無理ですよ……たぶんキッチンに何か差し入れがあるだろうから、見てこようか」

そそくさと応接室を出て、事務所の一階にある台所の奥、巨大な冷蔵庫を物色した航太郎は、予想通り山ほどの差し入れを見つけた。それらを抱えて応接室に戻り、缶ビールと共にテーブルに次々に並べる。すると、その中の一品を見とめたソフィアが、

「ドルマだわ!」

と歓声を上げたのだ。

ソフィアが驚いたのは、事務所によく手伝いに来ている女性、花園の差し入れのチマキを見たからである。花園は、吉祥寺の街に古くからある「割烹はなぞの」の女将なのだ。彼女の手による日本の「チマキ」は、まるで、ギリシアの郷土料理「ドルマダキア」そのものだ。

ギリシアのドルマダキアとは、米とひき肉の炒め物を葡萄(ぶどう)の葉で巻き、蒸したものだ。それに対し、粽(ちまき)はもち米を笹の葉でくるみ、蒸すか茹でるかして作られる。一万キロ近く離れているギリシアと日本に、「葉っぱで米を巻いて蒸す」という同じ工程を含む料理が

存在するとは！　喜んだソフィアはチマキに葉っぱごとかぶりつき、
「！！！」
当然の如く、一気に顔をしかめた。
航太郎は慌てて、
「これ、剥いて食べるんだよ。ソフィアさんの言うドルマにもっと近いのは、桜餅とかかもな」
と、急いで笹の葉を剥き、中身をソフィアに渡してやった。チマキとは違い、ギリシアのドルマは、葉っぱごと食すのである。
簡単な食事をしながらソフィアは、そこら中に乱立する飲食店の看板について航太郎に質問攻めにした。ソフィアにはどうにも見慣れない、理解しがたい光景なのだ。ギリシアは地元の大衆食堂、タヴェルナを中心に飲食店が存在しているのだが、東京にはとにかく、いつでもどこでも、何でもある。
「日本人は、他国の文化を取り入れることが上手い、ってことを表してるんだと思うよ。取り入れて、日本文化と融合させて、その文化の日本国内での立場を作るんだ。よく日本は排他的だ、なんて批評するヤツもいるけど、これほど他国文化の流入について寛容な国も珍しいんじゃないかな……」

しかし航太郎の弁を受け、ソフィアは

「つまりね、日本人は節操がないんだわ。うん、きっと、そうだわ。自国文化をないがしろにするなんて、ダメな民族よね！」

と言ってのけた。日本人である航太郎は当然、少々イヤな気分なのだが、そんなことはお構いなしに、ソフィアはギリシアの食文化について語り続ける。

「ギリシアはガストロノミー、つまり美食の国、なのよ」

ビザンチン帝国やトルコの影響を受け、ギリシア料理は欧州にしては珍しく、蛸(たこ)やイカなどを含む魚介類を使用する。オリーブやフェタ・チーズなど土着の食材と野菜を用いて作る、ムサカ、スプラキ、ザジキ、タラモサラダ。食事の席に供されるアルコールも、ウゾーやミソス、ギリシアワインなど、多彩に揃っている。ギリシアは独自の食を誇り、しかもどれも美味しいのだ、と。

先ほどから航太郎は、缶ビールを飲みながら、静かに聞き役に徹していた。が、疲れている体にアルコールを流し込んだせいか、普段のポーカーフェイスを崩したい気分になってしまった。そこでソフィアに向かい、

「君、ギリシア文化を大好きなんだな。さっきから、〝ギリシア愛〟とも言うべきものが、こっちに凄く伝わってくる……。それでも『国境をなくせ、自分はグローバリストだ』と

主張してるんだから、何か違和感を持つんだよ。どっちが君の本音なんだろう、と」
と呟いた。
航太郎に指摘されると、ソフィアはそれまでの楽しげな雰囲気を一変させ、不機嫌に黙り込んでしまった。航太郎はまたも居心地が悪くなり、聞き役から、今度は必死で話題を振る役に成り変わった。

航太郎は日々、地元の商店街や土建産業などに挨拶をして回り、駅前に立ってビラを自ら配り、ときおり講演会を開催し、地元でイベントがあれば可能な限り顔を出し……と、懸命に政治運動を展開している。
航太郎の挑戦が真剣なのには、ひとつ、大きな理由があった。先の総選挙で落選し、浪人中の航太郎は、次回総選挙が最後のチャンスなのだ。政友党には、二回落選した候補者には、以降公認を出さないというルールがあるのである。
嵐の夜に食事をしてからというものの、何故かすっかり航太郎になついているソフィアは、いつの間にか、この地道な政治活動に同行するようになった。しかしそこはソフィアのこと、活動の合間を縫っては航太郎に、ギリシアの政治事情について盛んに話しかける。
「ギリシアの政治がおかしいのは、えっと、歴史的にいつでもおかしいんだけど……とに

かく、今のおかしさが始まったのは、アンドレアの時代なの。つまり、アンドレアス・パパンドレウが総理大臣になって以降のハナシ」
「パパンドレウ？　よく聞くね、その名前」
　頭の中でギリシアの歴史を辿り始めた航太郎に、ソフィアは、
「09年にユーロ危機の引き金を引いた、ギリシアの首相ゲオルギオス・アンドレアス・パパンドレウは、アンドレアス・パパンドレウの息子よ。そして、アンドレアス・パパンドレウはゲオルギオス・パパンドレウの息子。ゲオルギオス・パパンドレウは、65年にギリシア国王から罷免された、革新派の大物政治家」
「んん？」
　あまり真剣に聞いていなかった航太郎は聞き返した。パパンドレウ、ゲオルギオス、アンドレアスというカタカナが脳内に入り乱れ、誰が誰だか分からなくなってしまったのだ。
「だからね、第二次世界大戦中と、内戦後に二回、総理大臣を務めたのがゲオルギオス・パパンドレウ。その息子が、ＰＡＳＯＫとして初めて政権を握ったアンドレアス・パパンドレウ。さらにその息子が、ユーロ危機勃発時にＰＡＳＯＫの党首で総理大臣を務めていたゲオルギオス・アンドレアス・パパンドレウ。分かった？」
　あらためて聞いても、分かりにくいことに変わりはなく、航太郎は苦笑いを浮かべる。

ギリシア人の名前が分かりにくいのは、例えば長男に父方の祖父の名前を引き継ぐなど、独特の習慣があることも理由のひとつだ。そのため、パパンドレウ家のように三代続けて政治家として活躍した名家の場合、祖父と孫の区別がつかなくなってしまうのである。

ギリシア版華麗なる一族とも言えるパパンドレウ家。二代目であるアンドレアス・パパンドレウは、ギリシアがECに加盟した直後の1981年、政権の座を握った。パパンドレウ率いるPASOKは、内戦下に国民が受けたトラウマを克服するに役立つ政策に着手し、それに加えて、国民の支持を得るために大々的ないわゆる〝バラマキ政策〟を行ったのである。

今の状況と同様に、当時のギリシアは国内の供給能力が不足しがちであり、20％ものインフレ率に苦しんでいた。当然ながら貿易収支は赤字で、国内が貯蓄不足、つまり経常収支の赤字の状態にあった。経常収支赤字国は、政府の国債を国内金融機関だけで消化することができず、政府が国債を発行しようとした場合、外国からお金を借りることになってしまう。二代目パパンドレウの率いるPASOKは、主にEC諸国などからお金を借り、国内の支出拡大に充てていった。外国からの借入を原資とする政府のお金は、補助金や社会保障支出として国民の手に渡り、消費や不動産投資につぎ込まれていった。

政府が外国からお金を借りること自体は悪ではない。日本政府も、戦後は世界銀行から

お金を借り、東海道新幹線や東名高速道路、黒部ダムなどのインフラ整備を実施した。当時、外国からの借入で建設されたインフラストラクチャーが、その後の日本に高度成長をもたらした要素のひとつである。

しかしギリシア政府は、外国から借りた金を、国民の歓心を得るためにばら撒いてしまったのだ。国内の消費や不動産投資にお金がどれだけ注ぎ込まれたとしても、経済成長の基盤となるインフラストラクチャーは構築されない。結局ギリシアは自国の供給能力を高めることができず、インフレと貿易赤字という根本的な病理は解消されないままに終わった。インフレと貿易赤字が続くということは、国内の貯蓄不足も続くということであり、政府はますます外国からの借入に財源を依存せざるを得なくなる。結果的に、ユーロに破滅をもたらすことになったギリシア危機は、その歩を緩めなかったのだ。

さらに問題だったのは、政権を握ったPASOKが、支援してくれた有権者に公務員職を与えるなどの悪習を状態化させてしまったことである。いつしかギリシアの民主主義においては、政策論議ではなく「どれだけ支援者に恩恵を与えられるか」を政党同士競うことが目立つようになった。個々の政治家レベルでは無論それまでも同様の事例が存在していたのだが、PASOKはそのパトロンとクライアントの関係を、政党の立場として認めてしまったのである。加えて、後にPASOKから政権を奪取したNDまでもが、外国か

らの借金を財源とした国内へのばら撒きや、公務員職で票を買う行為に手を染め始める。最終的に、ギリシアでは公務員数について、政府でも把握できないような状況に至ってしまったのだ。

しかも、ギリシアの政治家は世襲が少なくない。NDはカラマンリス一族、PASOKはパパンドレウ一族が支配し、両家から順番に総理大臣を出している状態だ。世襲の政治家が、パトロンとしてクライアントに恩恵を与えるために、国家のリソース配分を歪める。もしかしたら新古典派の経済学者が最も嫌う、「民主主義国の政府が有権者の要望により、市場におけるリソース配分を歪めてしまい、結果的に財政が悪化し、国内の供給能力が拡大せず、インフレや貿易赤字が解消しない」という考えをそのまま実現してしまったのが、ギリシアという国なのかも知れない。

「あ。なんか、日本と似てるわね。二世や三世の世襲政治家が多くって、公務員も異常に多いってカンジ」

何気なく感想を述べたソフィアに対し、航太郎は

「いやいや、そこは全っ然、違うよ」

と、珍しく激しく否定した。何しろ、日本国は公務員数の「対労働人口比率」はOECD諸国で最も小さく、何と、労働人口のわずか5%に過ぎないのだ。それに対し、ギリシ

アは25％である。
社会民主主義の色が強いスウェーデンやノルウェーなどの北欧諸国では、労働人口の30％が公務員だ。政府の社会保障を充実させたいのであれば、公務員数は増やさざるを得ないのだから当然だ。ギリシアの公務員は、確かに北欧諸国と比べると少ない。しかしギリシアは社会民主主義国ではないのだから、やはり25％という数字は大き過ぎる。
しかも、ギリシアがすでに百年近くも経常収支赤字国であるのに対し、日本は長年に亘り経常収支の黒字を継続しているのだ。経常収支の黒字とは、対外純資産の増加を意味する。日本が経常収支の黒字を続ければ続けるほど、「外国に貸しているお金から、外国から借りているお金をひいた額」である対外純資産額は積み上がっていく。そして、日本国の対外純資産の額は世界最大、つまり、世界で最も金持ちの国家なのだ。これは国内のインフラが整備され、企業が設備投資を積み重ね、国民が働き、供給能力が極端に大きくなっているためだ。供給能力が国内の需要をきちんと満たしているからこそ、日本は経常収支の黒字国で、毎年、巨額の対外純資産を積み上げている。
日本が経常収支の黒字を続けているのは、公務員が少ないことも理由のひとつである。公務員数が少ないということは、相対的に、民間の力が強いということの証左だ。日本同様に経常収支が黒字の先進国であるドイツも、日本よりは多いとはいえ、やはり相対的な

公務員数が少ないのだ。
また、政治家の世襲云々に至っては、航太郎が断固反発したくなるのも無理はない。無論のこと航太郎は、父親、祖父、曾祖父と、三代続いた政治家一族ならではの資産を継承した身である。確かに一般のサラリーマンと比べると、政治家への道筋は容易だったかも分からない。しかし、日本版パパンドレウの御曹司(おんぞうし)である自分を、武蔵野の有権者たちは容赦なく落選させたのだ。
その候補に能力がない、魅力が無いと判断すれば、日本の有権者が票を投じてくれることはない。だからこそ航太郎からすると、政治家の世襲の問題は、「有権者を信頼するか、否か」という問題に見えて仕方がないのだ。親が政治家だろうとサラリーマンだろうと、当選した国会議員はすべて、一定の票を有権者から得ている。そういう意味で、昨今の世襲批判論は、要するに有権者を信頼していないのだと、航太郎は思ってしまう。加えて、何よりもまず、日本では国民に対して、職業選択の自由が保証されているのだ。「両親が政治家の国民は、政治家になることが許されない」などというのでは、明確に憲法違反、民法違反ではないか。
しかし、二世三世どころか四世である自分が「世襲批判へのさらなる批判」を繰り広げたところで、他者から理解が得られる筈もない。当然ながら、航太郎はいつもこの件に関

しては口を閉ざしているのだ。

梅雨も明け、大学の夏季休暇が始まる頃には、ソフィアは事務所のアイドル状態になっていた。彼女の変な〝グローバル論〟には戸惑わされるのだが、やはり若い女性の笑顔は周囲を明るくする。橘事務所に常駐していたのは、これまで老人や中年ばかりだったのだから、雰囲気は大きく様変わりした。加えて、彼女がいるとちょっと面白い事件が起こることになり、いつしか航太郎もソフィアを邪魔だとは思わなくなった。長期休暇にも拘わらずギリシアへの里帰りをしないらしく、ソフィアはとうとう寝る時間以外はすべて、事務所にいるか、または航太郎に同行している状態になった。

8月15日の夜には、ギリシアの夏のお祭り「聖母被昇天祭」を祝い、ソフィアが事務所で夕食会を催した。雪乃や神庭も招待し、ソフィア自ら、ギリシアの郷土料理をふるまったのだ。家の墓参りや親族との付き合いを済ませた後の夕刻、招待客は続々と事務所に集う。いつものお盆とはまったく違う楽しみ方に、普段から事務所に出入りしている人々は喜び、盛り上がった。花園を筆頭に、近隣に住む女性らも手作りの日本料理を持ち寄り、テーブルの上は日本とギリシアの文化の博覧会となる。

「お店で食べるのと全然違うでしょ？　日本にあるギリシア料理店は、日本人の好みに迎

合して、本来の味を出せていないのよ。だから、わたしの作る料理が、正しいギリシア料理なのよ！」

この言が正しいかどうかは別として、ソフィアがいつの間にか、橘事務所のムードメーカーになっていたのは事実だった。航太郎は驚き、彼女を厄介者と適当にあしらっていたことを反省した。前回の落選から後、橘家の重鎮の親族らが近寄らなくなっていた橘航太郎事務所にとって、ソフィアはまるで突然舞い降りた天使のようだった。

しかし唯一の難点は、この天使、口を開けば憎まれ口ばかり、ということである。

第四章

八百万の神々の島

秋学期が始まり、初日の講義に出席したソフィアは、大学が終わるとそのまま橘事務所に直行した。

航太郎の事務所内に展開されているのは、いわゆる〝選挙事務所っぽい〟雰囲気とは程遠い、都会的なオフィスのような空間だ。昔ながらの灰色の事務机と椅子のセットなどは見当たらず、茶色の木製デスクに、黒のチェア。ところどころに置かれた観葉植物の葉の表面は、埃ひとつなく拭われている。ミース・ファン・デル・ローエの黒のバルセロナ・チェアが置いてあるかと思えば、マッキントッシュのヒルハウスが壁際に三つ、綺麗に並ぶ。

事務室の一番奥にある、他と較べて一回り大きいサイズのデスクが、候補・航太郎の席である。ソフィアが事務所を訪れると大抵の場合、航太郎は不在か、またいたとしてもパソコンを前に作業をしていることが多い。しかしこの日の航太郎は、何やら様子が違っていた。小ぶりの封筒を手に、腕組みをして苦悶の表情を浮かべているのである。ソフィアは近づき、航太郎の手にしていた封筒を取り上げた。

「ちょっ……オイ！」

航太郎が珍しく、ヘンな抗議の声を出した。

「何コレ？　パーティの招待状？」

「友人が結婚するから、そのパーティの……じゃなくて、君ね、人の物をそんな風に取り

上げるのは失礼だろう！」
航太郎は本郷大に在学中、ゴルフ部に在籍していたのだが、その同じ部に所属していた学友の福知山（ふくちやま）から、この度、結婚式への招待を受けたのである。福知山は現在、父親の経営する会社で役員として働いているという。社会に出て数年の間は、系列会社にて修業を重ねたようだが、今や大企業の専務である。そのうえ二十代後半で結婚とは、まさしく順風満帆な人生そのものではないか。
いつになくイライラしている様子が面白いのか、ソフィアは航太郎をからかうように声をかけた。
「あー、自分は結婚できてなくて悔しいから、行きたくないんでしょう？」
「違うよ」
現在、航太郎は落選中の浪人、否それどころか、はっきり言ってしまえば〝無職〟である。学生時代の友人たちが会社役員やキャリア官僚や弁護士、医師、または研究者として華やかに活躍する中で、自分だけが無職。しかも航太郎が先の総選挙で惨敗を喫したのは、知人の内でも周知の事実なのだ。
航太郎の落選に対して何らかの感想を持っているだろう人々の前に、惨めったらしい姿を晒（さら）すのは避けたい。かと言って、式と披露宴を欠席することもできない。航太郎の性格

的に、「落選したから来れないのだ」と揶揄されるのが我慢ならないのである。何とか恰好がつく方法はないだろうか、と航太郎はかれこれ小一時間ほど悩んでいたのだ。
「じゃあ、何なのよ？　彼女がいないから？」
憎らしいことに、ソフィアはまだしつこく尋ねてくる。まったく、造作は美しく整っているのに、なんと可愛げのない子だろうか……。航太郎は苦虫を噛み潰したような顔で、ソフィアを見返し、ここではたと気づいた。
あらためて眺めてみると、ソフィアは絶世の美女である。しかも、ギリシアでトップのアテネ大学を卒業し、現在も日本の名門大学、国際リベラルアーツ大学在学中の留学生。
「そうか……ソフィア、頼みがあるんだけど」
「何？」
航太郎はソフィアに向かってにんまりと笑った。

さて結婚式当日の明治神宮には、いつも以上に〝すかした〟オーダー・メイドの礼服を着込んだ航太郎と、黒のミニ丈ドレスに身を包んだソフィアの姿があった。華奢ながら出るとこは出ているという、ソフィアのセクシーな体つきが目立つ、ぴったりしたラインのドレスだ。しかし惜しむらくは、この絶世の美女、最悪のむくれ顔なのである。

「言っておくけど、私、日本人の恋人なんて、本当は絶対にイヤなんだからね！」
「ハイハイ、重々承知ですよ……」
せっかくの三つ揃えも形無しの不機嫌な顔つきをしながら、航太郎も答える。航太郎は先ほどから、落選の事実を又聞きしているであろう知人からの白い目線と戦い、必死にプライドを保っていたのだ。これほどの美男美女でありながら、恋人同士にはとても見えない二人連れである。
そうこうしているうちに、参列客の前に花婿と花嫁の姿が現れ、婚礼の行列が神社の境内の中を進み始めた。学生時代に見慣れていた福知山の薄っぺらい体躯が、紋付き袴姿に包まれた途端、ある種の雄々しさを放っている。軽く衝撃を受けた後、彼の横に並ぶ小柄な花嫁に、航太郎は視線を移した。そして目を見張った。
つのかくしに、白無垢。白粉(おしろい)を万遍なくはたいた肌の上に、控えめに引かれた紅。うっすらと発光しているかの如く清らかな女性の姿が、そこにあった。禰宜(ねぎ)の袴姿、巫女の清楚な立ち居振る舞いの中、傘を差し掛けられながら、日本の花嫁はしずしずと歩みを進める。
実は航太郎、これまでまともに神式の花嫁を目にしたことがなかったのだ。親族の付き合いは多く、ホテルでの結婚式や披露宴には頻繁(ひんぱん)に出席させられた航太郎だったが、神社

で行われる式に参加した経験は数えるほどしかない。成人してから以降に至っては、今回が初めての参列経験なのである。美しく匂い立つような花嫁の姿に目を奪われ、航太郎は暫時(ざんじ)、言葉を失ってしまった。

ところがその時、横からソフィアが、

「何これ、お葬式？」

と言い放ったのだ。

「なんか、地味ね。騒がないの？　みんなで拍手しないの？」

風情(ふぜい)の無いソフィアの反応に、婚礼行列への感動の余韻もどこかへ吹き飛んでしまったほどである。徐々に遠くなる白無垢の後姿を眺めながら、航太郎は呆れ顔でソフィアに応じる。

「日本には、〝わびさび〟っていう、美意識があるんだよ」

「何なの、それ」

「派手に華やかにやるのもいいけど、もっとこう……抑え気味にして、最小限のもので美しさを感じるっていうかさ」

今度は、ソフィアが呆れ顔になった。

「華やかなことが嫌いなの？」

「違うよ。うまく言えないなあ」
「あのね、ギリシアの結婚式は楽しいわよ！　まず教会での式のスタートは土日の夜6時くらいでしょ、ゲストの数は三百～五百人が当たり前で、みんなスゴク賑やかに盛り上げるの。式を挙げた後には、ゲスト数百人が教会からレセプション会場に移動して、食べて、飲んで、踊り明かすのよ」
「お、踊り明かす?」
「そうよ、ゲスト全員でダンスしまくるの」
　戸惑う航太郎をお構いなしに、ソフィアは嬉しそうに続ける。
「パーティは夜の9時か10時くらいに始まって、終わるのは明け方。とにかく、一晩中踊って、食べて飲んで、お祝いするのよ」
「……何だろう、僕としては、人生の節目のイベントはもう少し厳かな方がいいんじゃないか、と感じるね。日本人もパーティの二次会からは騒ぐ人も多いけど、式と披露宴自体は粛々と進むもんだよ。……それこそ、文化の違いなんだろうけど」
　航太郎の言を受け、ソフィアは一気に怒りを含んだ表情になった。
「何言っているの!?　節目っていうなら、それこそ辛気臭いことやっても仕方がないじゃない。……だいたい、日本人は暗いのよ！　結婚式ですらあんなに暗くやるから、コミュ

ニケーションをまともに取れない連中ばかりが育つのよ。せっかくこっちが友達になってあげようとしたのに、みんな近づいてこないし」
「ちょっと待った」
珍しく、航太郎が鋭い声で口をはさんだ。
「つまり君は、大学での友人関係にムカついているから、日本の伝統的な結婚式に難癖を付けてるのか？　もしも君が本当に友人ができにくいとしたら、それはギリシア人である君が日本人独特の距離感に慣れていないからであって、そもそも結婚式のスタイルとは関係ないだろう？　まず大前提として、日本人は基本的にシャイで、外国人とのコミュニケーションに慣れていない人が多い。そういう国民性を持つ国に君は来たんだと、理解してくれよ」
「ギリシアでなら、お互いに仲良くしたいと思ったら、すぐに友達になれるわよ！」
ソフィアは強い口調で言い返さずにはいられなかった。
「じゃあ、どうしたら普通に日本人と友達になれるって言うのよ？　グローバルで見たら、国籍なんて関係なく、普通に友達を作れるわ。ワビサビとか、外国人にはワケ分かんない概念を偉そうにしゃべって悦に入ってる、日本人が変なのよ」
ソフィアに加え、航太郎もかなりイヤな気分になり、二人は顔を背け合った。と、航太

郎の視界に、見覚えのある男性の姿が現れたのだ。なんと、祖父の弟、大叔父の頼正である。

「航太郎」

頼正は、堂々たる雰囲気を醸(かも)しながら、航太郎に歩み寄ってきた。恰幅(かっぷく)の良い大叔父の体型に、和服がしっくりと似合っている。

「おじ様、こんなところでお会いするとは……」

慌(あわ)てて謙虚な姿勢を取りながら、航太郎は思い出した。確か、福知山の母親が、頼正が教授を務める本郷女子大の教え子だったのだ。名誉職に就いている大叔父は、おそらく披露宴の来賓として招きを受けたのだろう。

頼正はソフィアに一瞥(べつ)をくれた。

「その子が婚約者かね」

航太郎は、本日の招待状に返信する際に、「婚約者も連れていく」と福知山に伝えておいたのである。

「あ、はい、ソフィアと言います。日本とギリシアのハーフで、国際リベ……」

そこまで言いかけた航太郎の声に、頼正の厳しいセリフが覆いかぶさった。

「君は落選中だろう。今の時期に結婚などもってのほかだ。チャラチャラしているんじゃない」

必死で口を開こうとした航太郎を制し、さらに頼正はソフィアに胡乱の者に対するような視線を向けた。
「政治家の妻と言うものが、どれほど厳しいものか分かっているのかね。常に後ろで目立たぬように控え、誰にでも頭を下げる。場合によっては土下座もするんだ、夫のために。日本人でも難しいものを、外人が……」
「いや、おじ様」
「だいたい何だね、その服装は。もっと場に相応しいものがあるだろうことに、気づかんのかね？　髪ぐらい、まとめなさい……航太郎、これは君の責任でもあるぞ。自分の妻ぐらい、教育できなくてどうする？　礼儀作法の心得も無い嫁など、橘家の跡取りに恥をかかせるだけだ」
ここで頼正はあらためて航太郎に厳しい視線を投げた。
「だいたい、落選中の身で女など連れて、恥ずかしくはないのか？　身を慎みたまえ、航太郎」
航太郎は視線を下げ、黙りこくった。そのうち頼正は近くに知人の姿を見つけたのか、そちらへ挨拶に向かった。
大叔父が目の前から去った後も、航太郎は暫く口を開かなかった。すると、そんな航太

郎の様子を気にもせず、ソフィアが、
「何なのよ、今のひと！　うるっさいわね。だいたいわたし、航太郎となんか付き合ってないし、全然関係ないんだから……あ、それで、ドゲザってなに？　レイギサホウって何？　ワビサビも、まだ説明がついてないわよ」
と一気にまくし立てたのだ。航太郎は呆気にとられ、大叔父に〝ガンをつけて〟いるソフィアの横顔を見つめた。あまりに無神経なソフィアの反応に助けられ、落ち込みまくっていたはずの気持ちが持ち直し始めたのだ。航太郎は苦笑した。なんだか今日は、このウザい性格に助けられているな……。
「よし。日本の文化ってものを、教えてやるよ」
お礼の意味もあり思わず豪語したが、口に出してから、航太郎は戸惑ってしまった。冷静になって考えてみると、実は自分も、日本文化の神髄など分かってはいないのである。
披露宴会場に向かう人の列に流されながら、どうしたものかと悩んでいた航太郎の脳裏に、ふと祖父の日記が思い出された。確か、祖父が海外使節団を案内する際に伊勢神宮へ赴いた、と書いてあった気がする。
伊勢神宮は、歴史的に日本の政治家とは切っても切れない関係に永らくあった。当然、橘家の人間で政治の道を志す者は、欠くべからざる慣習として伊勢詣りを行ってきたのだ

が、航太郎はこれまで一度も伊勢を訪ねていなかったのだ。ソフィアに日本文化を紹介するこの機会に、自分も伊勢まで行ってみてもいいのかも知れない。

伊勢詣りの計画で頭がいっぱいになっていた航太郎は、披露宴の終盤、新郎新婦に未だ直接は祝福の弁を述べていないことに気づき、慌てて立ち上がった。福知山夫妻と通り一遍の会話を済ませた後、場を持たせようとした航太郎は、

「しかし皆、学生時代とはまったく別人のようだな。『将来の社交に役立つから、ゴルフ部に入れ』と父に言われたまま入部したんだが、今のところ僕には、その機会が訪れないよ」

と苦笑ながらに口にした。福知山も笑って返事をした後、しかし、切れ長の目で航太郎を見遣り語ったのだ。

「まあ君もそろそろ、進む道を考え直してみてもいいだろうね。いつまでも親の引いた無茶なレールをなぞっているのはツライだろう？　政治屋なんてオイシクない職業だと皆が分かっているから、結局、頭の悪い連中ばかりが立候補するんだ。橘君も、もっと賢い生き方をしないと、損するよ」

明らかな屈辱感を覚え、航太郎は福知山から目を逸らした。

神宮。

伊勢神宮は、実はその正式名称を「神宮」と言う。明治神宮などの他の神宮と区別をするため便宜的に「伊勢」と付けてはいるが、正確には「神宮」なのだ。伊勢神宮は、数多い日本国内の神社の中で最も格式が高く、「神宮」の一語で指し示すのは伊勢神宮のみである。

三重県伊勢市に位置する神宮は、大きくは内宮（ないくう）と外宮（げくう）の二つに分かれ、それ以外の小さなお宮も合わせ、計125もの社から構成される。内宮は正しくは皇大神宮（こうたいじんぐう）の名であり、日本の主神とでもいうべき天照大御神（あまてらすおおみかみ）を祀（まつ）っている。外宮の正式な呼称は豊受大神宮（とようけだいじんぐう）とい い、食物や穀物をつかさどる女神である豊受大御神（とようけのおおみかみ）が祀られている。内宮、外宮と、日本の神の宮の本家本元に祀られているのが、二神ともに女神である。

遥か昔の日本国において、天照大御神は、自らの孫である火瓊瓊杵尊（ほのににぎのみこと）に葦原中国（あしはらのなかつくに）を治めることを命じた。これが天孫降臨（てんそんこうりん）である。天孫降臨とは、高天原にある天神（あまつかみ）、中でも「天」照大御神の「孫」である火瓊瓊杵尊が天下った故に「天孫降臨」と言うのだ。

天孫降臨の舞台は日向（ひむか）の国の高千穂。天照大御神の孫である火瓊瓊杵尊は、日向にて木花咲耶姫（このはなさくやひめ）と結ばれ、その二人の子として彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）が生まれた。彦火火出見尊の息子は鵜鶿草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）であり、そのまた息子が神日本磐余彦尊（かむやまといわれびこのみこと）、つまり日本国の初代天皇、神武である。

天孫こと火瓊瓊杵尊の父親は天忍穂耳尊（あまのおしほみみのみこと）、すなわち天照大御神の息子だ。そして天照大御神とは、国生み、神生みの神である伊弉諾尊（いざなぎのみこと）と伊弉冉尊（いざなみのみこと）との間に生まれた女神である。つまり日本の天皇陛下は、国の生みの親たる伊弉諾尊、伊弉冉尊の子孫ということになるのだ。

「……ここまでをおさらいすると、伊弉諾尊と伊弉冉尊の間に、天照大御神、月読尊（つくよみのみこと）、素戔嗚尊（すさのおのみこと）の三柱の神が生まれた。そのうちのひとり天照大御神の、息子である天忍穂耳尊（あめのおしほみみのみこと）の、そのまた息子である火瓊瓊杵尊（ほのににぎのみこと）が、天孫として高千穂の地に天下った。さらに、火瓊瓊杵尊の曾孫が磐余彦尊、これは初代天皇に即位した神武天皇のこと。……とまあ、こういうわけで、神武天皇の祖先である神々は、現在の天皇陛下の遠い祖先になる、ということが分かるんだ」

航太郎が得意げに語ると、ソフィアは、

「ふ〜ん……」

と、何やら気の抜けたような声を出した。まずソフィアには、登場する固有名詞が「みこと」「みこと」ばかりで、誰が誰なのかさっぱり理解できなかったのだ。加えて、現在の日本の皇室が神話の時代にまで血筋を遡（さかのぼ）れるなど、荒唐無稽（こうとうむけい）な話にしか感じられず、俄（にわ）かには信じ難い。ギリシア人にとってみれば、「ギリシア王はゼウスの子孫です」と、言われ

るようなもの。現在のギリシアに国王はいないが、もし王統が存続していたとしても、それが神の子孫だと言われて信じられるだろうか？

　吉祥寺から伊勢までの旅は、列車を何度も乗り継ぐ必要がある。吉祥寺から品川まで出て、品川から新幹線で名古屋まで一時間半。さらに近鉄名古屋駅から伊勢市までは特急電車に乗り、やはり一時間半。およそ四時間の伊勢行の途上、航太郎はソフィアに延々と「日本神話と天皇」についての解説を続けたのだ。

　実のところ航太郎の披露している知識は、完全な付け焼刃である。昔の航太郎であれば日本神話や皇室になど全く興味がなかったのだから当然だ。しかし前回の選挙で航太郎は「国になど興味はない。僕はグローバリストだ」と傲岸不遜な態度をとったため大敗北し、その反省から、日本について考え直す機会を得た。元来、好奇心旺盛な航太郎である。勉強すればするほど、特に日本神話にはハマってしまった。神話を紐解くにつれ、自身が生まれ育った日本という国が、どれほど世界的に特異で、比類なき国家であるかを少しずつ知っていったのだ。

「それで、そのジンムが、伊勢神宮を作ったの？」

「いや、違うよ」

　ペットボトルの蓋をひねりながら、航太郎は首を振った。

「皇室の祖である神武天皇は日向の国、つまり現在の九州地方から東に向かい、大和の国、つまり今の奈良県に入った。そこで素戔嗚尊の子孫である出雲の大国主神の娘である五十鈴姫と結婚し、初代天皇として即位したんだ。まあ五十鈴姫の出自については、あくまで諸説ある内の一説にしか過ぎないけれど、とにかくここでようやく、大和朝廷が始まったと言われている」
「何だかスゴクややこしいんだけど。つまり、アマテラスの子孫と、スサノオの子孫が、ヤマトで結婚したってことよね」
「その通り。よく分かったね」
ややこしいと文句をつけながらも、骨子はきちんと理解しているらしいソフィアに、航太郎は感心した。日本人の中でも、この神話を認識している者は少ないのだ。
「それで、そのヤマトに伊勢神宮があるの?」
「いや、そうじゃなくて。神武からさらに時が流れ、第十代目の崇神天皇の時代、疫病が流行ったり反逆する豪族も出てきたりなど、大和の国中が大変な状況になったんだ。そこで崇神天皇が占いをしてみると、天照大御神からご託宣が下った。その内容は、『私を皇居の外の、もっとも良い処に祀りなさい』というもの」
「悪いことが続くのがイヤならば、もっと素晴らしい場所に自分を移せっていう、アマテ

ラスによる〝脅し〟だったんじゃないの？」
　ソフィアが随分毒のあることを言ったが、航太郎は聞き流して続ける。
「そこで、崇神天皇は大和の笠縫邑（かさぬいのむら）というところで天照大御神を祀り、皇女の豊鍬入姫尊（とよすきいりひめのみこと）に奉仕をさせた。つまり、天照大御神の化身（けしん）たる八咫鏡（やたのかがみ）を皇居の外に祀った、ということだ」
「ということは、そのカサヌイ？　に伊勢神宮があるのよね？」
「それが、まだ続きがあってね」
「はあ？」
「崇神天皇の後を継いだ垂仁（すいにん）天皇の代に、天照大御神を祀る役目を、別の皇女である倭姫尊（やまとひめのみこと）に託したんだ。倭姫命は天照大御神を祀るべき土地を求めて、ほうぼうを旅して回った。伊賀、近江、美濃とまわり、最後に伊勢の国に入ったとき、天照大御神は倭姫尊に、この地が最上の祀り場所であるという神託を下した。というわけで、天照大御神の化身である八咫鏡は伊勢に移され、その時から伊勢神宮が始まった、と」
　航太郎がここまで説明したところで、車内に女性の美声によるアナウンスが流れた。二人が乗車している新幹線は、あと数分で名古屋駅に着くのだ。
「もう！　長過ぎる！」

ソフィアは、テーブルに広げていた〝伊勢志摩・観光ガイドブック〟をバッグに突っ込みながら、航太郎を睨みつけた。
「伊勢神宮の由来を説明するだけで、いったい何時間、話し続けるつもりよ？　わたしは、日本文化のワビサビだとかドゲザだとかを教えて、って言ったのよ？　何故、神様のハナシになるの？　しかもさっきから、登場する神様の数が多過ぎだし、変な名前も多過ぎ！　一度聞いたぐらいで、外国人に理解できるワケないでしょ。ほんっと、航太郎って、気が利かないわね！」
「気が利かないってね……」
航太郎は呆れて返す。
「あのね、日本は『八百万の神』という言葉もあるほど、神様がたくさんいる国だよ？　現在の天皇家も天照大御神の血を受け継いでいるほど、日本国と神様は強固に結びついてるんだ。日本文化を知りたければ、神々への理解ナシには無理なんだよ。それを外国人の君でも分かりやすいように、噛み砕いて説明してるっていうのに……。だいたい君、神様の数でいうなら、ギリシア神話だって相当なもんじゃないか」
「残念でした」
ソフィアは一気に偉そうな口調になった。

「ギリシアは古臭い神話の国じゃなくて、オーソドクスの国なの。れっきとしたキリスト教国と、ワケ分かんない神がぐちゃぐちゃ溢れてる日本と一緒にしないでくれる?」
「え。君って、キリスト教の信徒なのか?」
　驚いた航太郎が大きな声を上げた。ちょうど新幹線は名古屋駅に到着し、二人は近鉄線に乗り換えるため、駅構内を歩き始めた。
「わたしはギリシア正教徒よ、当たり前でしょ?　ギリシア人は、カトリックやプロテスタントとは違って、正統なキリストの教えを受け継いでいるのよ」
　ギリシア正教は、またの名を東方正教会と言う。これは、キリスト教会の東西分裂以降、ビザンチン帝国を中心に信仰された正教会（オーソドクス）の呼び名の一つである。１０５４年にローマ教皇とコンスタンティノープル大主教が互いに破門し合った東西分裂は、あくまでキリスト教の分裂である。ローマを中心とするカトリックから、正教会が分離したということではない。
　ギリシアの街を歩いていると時折、全身黒づくめの男性を見かける。丈の長い黒色の服に、同じく黒色の帽子。大抵は立派な髭をたくわえている。彼らは、実はギリシア正教の聖職者だ。総じてギリシア人は信心深く、年に数回は教会を訪れ痛悔（つうかい）する者も多い。いわゆる懺悔（ざんげ）のことである。

イコン、つまり聖像に対してのギリシア正教徒の崇敬の念は非常に深い。イコンは単なる絵画という位置づけにはないため、画家も好き勝手に描くことは許されず、その形式は厳格に守られている。

また、正教徒の信仰の源泉は、聖伝だ。聖伝とは、過去より連綿と受け継がれてきた信仰の記録であり、教義でもある。聖伝にはもちろん新旧約聖書も含まれるが、それ以外にも各種の文書、祈祷、教会法、聖歌、イコン、さらには教会と共に生きてきた人々の体験をも含んでいる。つまり聖伝とは、〝正教会の記憶〟と言ってもいいのかも知れない。

「だから、私たち、すごく福音的な生活を送っているのよ。ギリシア人ならば誰だって、教会の前を通りかかったら必ず十字を切るぐらい」

近鉄名古屋駅から伊勢市駅への特急に乗り、指定席に腰を落ち着けると、ソフィアは航太郎の目の前で十字を切って見せた。

「正教会の十字の切り方は、右手の親指と人差し指、それに中指をまとめて額、胸、右肩、左肩と手を動かすの。十字を切るときは、必ず三回、この動作を繰り返すのよ。カトリックの方は、指をまとめずに額、胸、左肩、右肩と、一回だけ十字をきる。くれぐれも、間違えないでよ！」

「ああ、僕が今後の人生で十字を切ることはおそらく無いだろうから、その点は心配ない

よ」
そう一歩引いて答えつつも、知識欲旺盛な航太郎としては、やはりこの豆知識をきっちり覚え込んでしまうのである。

航太郎とソフィアは伊勢市駅に降り立つと、タクシーに乗り込み、早速外宮へ向かった。外宮のみでも、実に広大な敷地を有している。道の両側には緑葉揺れる林が続き、一帯にすがすがしい空気が充ち充ちる、まさに清浄の空間である。航太郎はとりあえずソフィアに、手水舎における手口の浄め方と、参拝の際の二礼二拍手一礼の作法を教えると、御正宮へ歩を進めた。無事に参拝を済ませると、次に訪れるべきはメインの内宮である。
どことなく名残惜しい思いと共に外宮を後にし、続いて内宮を訪れた二人は、天照大御神が祀られる御正宮（ごしょうぐう）へ参拝に向かった。年間数百万人がその上を通って参拝に向かうという、名橋（めいきょう）の誉れも高い宇治橋を渡り、正殿への参道を先へ進む。
天孫降臨に際し、天照大御神は「この鏡を私の御魂（みたま）と思って、私を拝むように敬い祀りなさい」と、孫である瓊瓊杵尊に命じた。この鏡こそが日本国の宝、三種の神器（しんき）の一つである八咫鏡であり、伊勢神宮の内宮に御神体として祀られているのである。
時は201X年、数年前の平成二十五年に式年遷宮（しきねんせんぐう）、つまり〝宮遷し（みやうつし）〟が執り行われた

ため、ご神体は現在、西の宮に移されている。伊勢神宮は二十年に一度お宮を造り替える祭りを厳格に保持しており、この祭りを式年遷宮という。二十年毎に東の宮から西の宮へ、あるいは西の宮から東の宮へと、旧来の社殿の横に新たに建てたお宮に天照大御神の神器を遷すのだ。

神宮最大の祭りである式年遷宮。第一回の式年遷宮は持統天皇四年、西暦では６９０年より行われた。千三百年以上もの昔から脈々と、二十年ごとに神を遷す祭りは続いてきたのである。

御正宮前の石段を登りながら、航太郎は、眼前の雄々しいお宮を見上げた。正宮は、唯一神明造という神宮独特の建築様式で建てられている。この建築は弥生時代の穀倉に端を発すると言われるもので、伊勢は昔の建築技術を現代にまで伝えるという大役さえ担っているのだ。切妻造りの茅葺の屋根に鰹木、千木。歴史の重みを体感しながら、航太郎は一段一段を踏みしめる。

皇室の祖にして、日本国民の総氏神。他の神とは一線を画する神、天照大御神の御神前に立った航太郎は、二礼し、二度手を打ち、手を合わせたところで、しかし、航太郎ははたと固まってしまった。

……何を願えばいいのだろう？

当然ながら航太郎の脳裏には、短い一瞬間の内に、様々な願いの言葉が去来したのだ。次回の選挙に当選したい、自分をバカにした友人を親族を見返したい。そして……そして自分は、曾祖父、祖父、父の背中に追いつきたいのだ。……だが、それでいいのだろうか？今の自分が抱えている願いとは、言ってみれば〝身から出た錆の収拾〟であり、神明に訴えるような、価値ある願いではないのではないか？

迷いに迷った末、航太郎は結局、何も願わなかった。ただ、「長きに亘り、日本国にいてくれたそうで、ありがとう」と、心の中で呟いた。

参拝の後、航太郎とソフィアは神楽殿へ向けて足を運んだ。無論、御神楽を奏上するためだ。御神楽は「神遊び」とも呼ばれ、古くから伝わる神事としての歌舞（かぶ）である。申し込みを済ませ建物内に通された二人は、広々とした舞殿内の様子にまず圧倒された。続く畳の間の奥に、一段高く舞台が作り付けられ、舞台壇上の正面に神座はある。神座の両側に大きな榊（さかき）の枝が生けられている。榊に施された五色の絹の装飾が、雅（みやび）に光る。

航太郎とソフィアがきょろきょろと周囲を見渡していると、神主による御祓（おはら）いが始まった。榊の枝が頭上で左右に振られるのに気づき、慌てて航太郎は頭を低く下げる。ソフィアは不思議そうな表情を浮かべたが、すぐに他の人の気配を感じ、壇上に視線を戻した。あらたな登場人物は、楽師（がくし）の面々である。音もなく楽師と舞女（まいひめ）が入殿し、あくまで静か

に、しかし非常な素早さで歩を進める。畳に座り舞台を見詰める二人の前を、舞女の纏う白羽二重の千早と緋色の長袴が、目まぐるしく動いていく。楽師が雅楽の音を奏で始めると、舞女は御神札と神饌を御神前に供えた。

舞女が下座に引くと、神主は神座前に座り、厳かに祝詞を奏上し始めた。祝詞とは、神主が人々の願いを天照大御神まで取り次ぐための、古式ゆかしい形式が保持された、祈願の言葉である。古めかしい大和言葉の最中に航太郎とソフィアの名とが読み上げられると、ソフィアは随分驚いたようで、航太郎の方をチラリと見遣った。そんなソフィアに航太郎は身振りで、頭を下げるよう指図する。

突如、篳篥の音が鋭く鳴った。音は神楽殿の内に凜と響き渡り、一瞬で場の空気を変貌させる。航太郎は驚き、目を見張った。

榊を持った巫女があらたに姿を現した。髪に華やかな紅梅の天冠を付けた舞女が近づくと、巫女は榊を舞女に手渡す。榊の枝には、やはり、五色の絹が付けられている。とうとう、神宮特有の御神楽、倭舞が始まるのだ。

みやびとの　させる榊を　われさして
よろづ代までに　かなであそばむ

和琴、笛、篳篥が順に響き、音と音との艶やかな競演が、壇上で展開される。空気の中に幽玄にたゆたう緋色と白、躍る真榊の濃き緑。舞女の黒髪が小さく揺れるが、彼女らの厳かな表情には一点の動揺も見当たらない。

航太郎は息をのみ、舞女の一挙手一投足を凝視した。一種異様な雰囲気が、そこにはあった。言ってみれば、今この瞬間の神楽殿は、時間的にも空間的にも異界だった。時の流れは止まり、まるでこの世にあるのは楽の音と舞女の踊りだけであるかのような。

楽師たちが楽を奏し、神主の祝詞は周囲にこだまする。響き渡る楽の音はすがすがしく、舞女たちの衣はひたすら美しく目に染みる。まるで二千年の時を遡り、古(いにしえ)の日本国にタイムスリップしたかのよう。

ふと我に返った航太郎は、自分の掌(てのひら)と手の甲に、両の指の跡ががっちりと付いてしまっていることに気づいた。真剣に見入っていたためか、両手を存外強く握りしめていたらしい。横に座るソフィアも神楽の迫力に圧倒されたようだったが、実は航太郎の受けた衝撃といったら、尋常(じんじょう)では無かったのだ。こんな凄いものを今まで知らずに生きて来たのか、何と勿体(もったい)ないことを自分はしてきたのかと、後悔の念すら覚えたほどであった。興奮冷めやらず、航太郎は楽師と舞女とを幾度も見返した。

内宮を後にした二人は、どこかぼんやりとしたまま、内宮に隣接する〝おはらい町〟に向かった。ここには、地元伊勢の名物を販売する店が集まっているのだ。おはらい町という名称は、かつてお伊勢詣りが全国的に大流行した時代に一般化したものだ。当時、伊勢の神職の一種である御師(おんし)が、日本中から殺到する参拝者のおはらいを、内宮の門前町で行っていたことから、おはらい町と呼ばれるようになったという。

様々の店舗が軒を連ねる街の、中心地に建つ茶店に入る。古風な佇(たたず)まいの店内に入ると、すぐ近くの大きな窯(かま)で茶を煮立てているのが目に入る。戸外を眩しく照らす秋の暖かい日差しとは一変し、戸内は薄暗く涼やかで、大きく開けた縁側から反射光が差し込むのみだ。

茶菓を注文し、奥の座敷に上がると、やっと航太郎の口から感想が漏れだした。

「凄かった、な。神様って今も本当にいるんだと思ったよ」

航太郎の問いかけに、ソフィアは珍しく素直に肯く。

「うん……そうかも」

ソフィアの殊勝(しゅしょう)な様子を意外に感じた航太郎だったが、ふとここで、重大な疑問が頭をもたげてきたのだ。

「ソフィア。ギリシア神話の神々はどこに行ったんだ？　ゼウスやアポロン、アテネ、ビー

ナス、とか」
思いつくまま、その問いを口にし、航太郎はソフィアの横顔を見つめる。するとソフィアは、
「今は誰も信じてないわ。古代の神々を祀るイベントもほとんど行われてないし。だいたい、今朝も教えたけど、ギリシア人はオーソドクスを信仰してる、キリスト教徒よ」
と、事もなげに返したのだ。航太郎は驚きのあまり、珍しく声が裏返ってしまう。
「ええ⁉ いや、僕ら日本人からしたら、ギリシアとはギリシア神話の国、古代の多神教の国だよ。キリスト教国のイメージなんて、まったくと言っていいほど、無い！ 勿論、僕も不勉強だったのは確かだが……いや、これは、ギリシアと日本とは決定的に違うという証左だな……」
これまでもソフィアにはびっくりさせされることばかりだったが、今回が最強だ。航太郎は自宅の書斎で、幼いころからギリシア神話を読んで育ったのだ。古事記や日本書紀と同様に、人間臭い神々が縦横無尽に動き回るギリシア神話の世界を、愛着を持って読み楽しんでいた。その頃に植え付けられたイメージ、〝ギリシアには、古代の神々が息づいている〟というイメージを、27歳の今まで保持していたのである。航太郎が驚愕(きょうがく)したのも無理はない。

しかし、大いに驚いている航太郎に、ソフィアは何やらむっとしたようだ。

「だから何なの？　わたしに言わせればね、日本にはちゃんとした宗教がないから、こんなヘンな国になっちゃったのよ。国民が信仰を持っていない国なんて、グローバルの時代に生きていけるわけがないでしょ」

蔑むような口調で断言したソフィアに、今度は航太郎がむっとする番だった。数秒考えた後、航太郎はやにわに財布から紙幣を一枚抜き出した。日本円の紙幣、千円札だ。ソフィアに向かって紙幣を広げると、そこに印刷されている肖像画の人物を指差した。

「この老人、誰だか知ってる？」

意表を突かれたソフィアは、改めて千円札を覗き込んだ。古風なメガネをかけ、禿げ頭が目立ち、和服を着こんだ老人の姿がある。ソフィアはその人物を知らないことを認めたくなさそうに、小さく首を傾げる。

「この人は高橋是清（たかはしこれきよ）っていって、百年近く昔の世界大恐慌から日本経済を救い出した偉人なんだよ。一昨年に紙幣のデザインを変えた際、千円札は野口英世から高橋是清に肖像が変わったんだけど」

「それで？」

ソフィアとしては、日本人でもない自分に、日本のマイナーな偉人について質問してき

た航太郎に、イラつきが増す一方だ。そんなソフィアをお構いなしに、航太郎は、今度はバッグから古びた革製の手帳を取り出した。

「この高橋是清が、日本の文化についてこんなことを語ってるんだ」

航太郎は一呼吸置いた後、その古い手帳を開き、朗読するように言葉を繋げた。

「我が国の文明は、ことごとく輸入されたものである。儒教でも、仏教でも、皆そうであるが、しかし、ひとたび日本に輸入されて来ると、日本特有の儒教になり、仏教となって調和が保たれているのである。というのは、昔の人は、外国の文明を消化し、同化する力があったからである」

「…………」

「さらに、是清は、神様についてこんな文章を残している」

航太郎は手帳のページを繰り、是清の言葉を続ける。

「私は、神様を信じている。私の神様というのは、日本の八百万の神々をはじめ、釈迦も孔子も、また耶蘇（やそ）も、全てを含んだ神様である。人間、自分より上のものがないと、どうも自惚（うぬぼ）れていけない。自惚れが出ては、人間もおしまいである。神様を忘れると、人間が破滅するばかりである」

「…………」

「耶蘇っていうのは、イエス、つまりイエス・キリストのこと。日本は太古の昔から、海の向こうから文明や神様を受け入れ、きちんと消化し、自国の文明と同化させていったんだよ。時代の変遷と共に、海外からは次々に新しい神様が入ってくるんだけど、日本人は元々山や川、竈、針にすら神様が宿るという八百万の神々という発想を持っていたから、全てを受け入れて、消化してしまったんだ。結果的に、元旦には神道の風習で初詣に行き、クリスマスにはクリスチャンになり、死ぬときは仏教でお葬式という面白い状況になった。他国の一神教の民からは理解し難いだろうが……でも、それでいいんだ。他所から入ってきた文明や宗教を無闇に排斥するのではなく、きちんと受け入れて消化してきたからこそ、現在の日本の繁栄がある、とも言えるんだから」

「そ、そんなの、グローバルな時代に通用するわけないでしょ！」

いきなり、ソフィアが猛反発した。

「そんなことだから日本人は、何を言いたいのか、何をやりたいのか、全然わからないのよ。……今の航太郎の説明でよーく分かったわ、つまり、日本には確固たる神がいないから、ダメなのよ！　神様に対してまで曖昧に接するなんて、野蛮人の証拠だわよ」

このソフィアの態度には、さすがの航太郎は気を悪くし、普段であれば絶対に言わないようなセリフが口を衝いて出てしまう。

「あのね、確固たる神の名の下で、キリスト教徒は散々、異教徒を殺してきたんだろ。十字軍がいい代表だ。結局、宗教なんて欧州の他国侵略の武器の一つでしかないんじゃないか?」
「十字軍をやったのはカトリックで、正教徒じゃないわよ! むしろ、ギリシアは、ラテン帝国の十字軍にコンスタンティノープルを蹂躙(じゅうりん)された、犠牲者なんだから!」
このソフィアの返答に、またも航太郎は厳しく言い返してしまう。
「犠牲者って、それ、何百年前の話だよ?」
案の定、ソフィアは大きな声でまくし立てた。
「あんたたち日本人に、ギリシア人の気持ちが分かるわけないのよ! ビザンチン時代は同じキリスト教徒の十字軍に侵略されて、コンスタンティノープルを落とされてからは四百年も異教徒のトルコ人に支配されて、やっと独立したら今度はトルコやブルガリアと戦争ばかりになって、第二次世界大戦ではナチス・ドイツの支配で何十万人も飢え死にして、戦争が終わったと思ったら共産主義者と内戦になって、それでやっと内戦が収まったかと思えば、今度はファシストの軍事政権に国家を蹂躙されて……だから、つまり、私たちギリシア人は、いつだって〝犠牲者〟だったのよ!」
航太郎は眉をひそめた。口癖のように「グローバル、グローバル」と言っている割に、

明らかにギリシア民族としての思いを次々と並べたてるソフィアに、大きな違和感を持ったのである。

「ギリシア人の過去の歴史が大変だったのはよく分かるし、同情するよ。けど、それももう何世代も前の話で、今現在のハナシじゃないじゃないか？　過去のギリシア民族は確かに犠牲者だっただろうが、ソフィア、君が犠牲者本人なワケじゃないだろ？」

航太郎から指摘を受けたソフィアは、周囲の客が注目しているのも厭わずに、大声で叫んだのだ。

「日本人は他国に蹂躙されたことが無いから、分からないのよ！　ああ、もう、だから、国境なんて嫌いなの！　これからはグローバルの時代、わたしは地球市民なんだから」

いきり立っているソフィアに、違和感どころか嫌悪感まで抱き始めた航太郎も、

「君、さっきまで『ギリシア国民』として、自分は犠牲者だとか言っていたじゃないか。都合がいいときはギリシア人になって、都合が悪くなればグローバル市民になるのか？ダブル・スタンダードもいいとこだな！」

と直球を投げる始末。当然ソフィアは激怒し、不器用に畳から立ち上がると、戸外へ走って出て行ってしまった。航太郎は航太郎でウンザリし、旅行用のソフト・トランクから文庫本を取り出してみたが、気が散ってしまい読書に没頭することができない。

ダメ元でソフィアの携帯に電話をかけてみるが、予想通り彼女は出ない。暫く逡巡した後、航太郎はタクシーに乗り、ホテルに向かうことにした。ソフィアもさすがに、この見知らぬ土地において単独で遠くまで行くことは無理だろうし、おそらく疲れている彼女がこれから向かうとしたら宿泊先だろうと、航太郎は考えたのだ。

ホテルに向かいながら、その道中、航太郎は窓外の景色を見遣った。

山々を染め始めた紅葉の様が目に入る。日本の紅葉は不思議だ、それこそ錦綾（にしきあや）なすように、赤色、橙、黄色、茶、緑、多くの色々が、決して混じらず、ただ群れてある。それはあたかも、巨大な絹織物で伊勢の国を飾ったかのように。

神々の国。日本には確かに八百万の神が息づき、秋の山をもひとつの芸術作品として染め上げるのである。

伊勢湾を見渡せる風光明媚な場所に建つ老舗ホテルに、航太郎はチェックインした。ソフィアと共にとるはずだった夕食もひとりで適当に済ませ、ベッドに入る。

すると夜半、携帯の着信音がけたたましく鳴り響き、微睡（まどろ）んでいた航太郎の眠りを妨げたのだ。目をしばたきながら携帯を手に取ると、ソフィアからの着信だ。ソフィアの身を案じていたためか夢見の悪かった航太郎は、すぐさま受話ボタンを押した。

「どこにいるんだ？」
航太郎が怒りを含んだ口調で問うと、ソフィアの遠慮がちな声が携帯の向こうから聞こえてきた。
「……眠れないの。ハナシに付き合ってよ」
さすがに、航太郎は呆れ返った。とりあえず居場所を聞き出そうと、再度航太郎が口を開いたところで、部屋のチャイムが鳴り出した。何と航太郎の部屋のドアの前に、既にソフィアは来ていたのである。仕方なく航太郎はソフィアを室内へ招き入れ、テラスの椅子に座るよう、彼女に促した。
空には雲一つなく、星々の煌(きら)めきが肉眼でもよく見える。ひとたび秋の澄んだ夜気の中に出てみると、航太郎の眠気と苛立ちはどこかへ吹き飛んでいってしまった。先ほどまで、この美女に対してしたたか怒りを持っていたことも忘れ、手際よく二人分のコーヒーを淹れる。航太郎はテラスへコーヒーのカップを載せたトレイを運び、ソフィアにも一つを勧めた。ソフィアも素直に椅子に腰かけ、差し出されたカップを受け取った。小さな形良い唇で、ふうふうと息を吹きかけて、手の中のコーヒーを冷ましている。
「僕はさ、別に君らギリシア人の苦悩を否定しているわけじゃないんだよ」
航太郎は、ソフィアに気づかう気持ちと、しかし日本人ならではの〝神〟との付き合い

方についてソフィアに理解してほしいという気持ちとが綯い交ぜになり、慎重に言葉を選びながら語り出した。

……人間は、共同体に属さなければ生きることはできない。共同体なき社会は、弱肉強食の法則が生きとし生けるものを支配する、理性なき荒野である。そして現在、人間が属する共同体として、正常に機能している最大のものが、〝国〟なのである。日本にいまだに息づく神々、皇居におわす天皇は、共同体としての日本国の象徴であり他国に誇る権威でもあるのだ。神々や天皇といった権威があってこそ、国に属する国民は安心感を得られ、共同体は維持される。

ギリシア王国の初代国王オトン一世は、1862年のクーデターで退位し、ギリシアを後にした。これに端を発し、ギリシア王国は建国当初から、共同体としての権威の不在に悩み続けてきたとも言える。

ギリシア王国の権威の座に挑戦したのは、ときには古代ギリシアであり、ときにはビザンチン帝国であった。あるいは、エレフテリオス・ヴェニゼロスやコンスタンディノス・カラマンリスに代表される政治家たちが権威を担おうとした。さらには共産主義、ファシズム、そして軍隊による独裁政権も権威たらんとした。ギリシア国とギリシア国民は宿命として、自らのアイデンティティを追い求めてきたのだ。しかし結局、いずれの挑戦者も

確固たる権威とはならず、ギリシア国民は常に不安感と共にある生活を強いられた。
その後のユーロ時代、ギリシアの若者の多くはグローバリズムを意識し、ギリシア人として生きることに背を向けようとした。しかし、世界で活躍するギリシアの若者といえども、自国の影響下から完全に抜け出すことはできない。〝グローバル〟な現代においても、結局のところ国民は国民であり、国境線をなくすことなど不可能なのだ。だからこそギリシアは、総選挙でユーロ離脱を選択し、ドイツやフランスも国境を取り戻しつつあるのではないのか。
国境を否定する世界市民思想など、所詮(しょせん)は夢物語なのだ。むしろ国境線の内側で、同じ言語を話す民族が、他国の文化を取り入れ消化し、多様な文化を享受し生きていく方が幸せではないかと、現在の航太郎は思うのだ。
「それを実現する可能性がある稀有(けう)な国が、日本なんだ」
航太郎は続ける。
「たとえば、君に同行してもらった、先日の明治神宮での結婚式。日本人は、お互いがどんな宗教でも、大抵の場合、結婚できるんだよ。もちろん例外はあるが……少なくとも神社では、他国人が神道に帰依(きえ)しなくても、普通に結婚できる。これが日本の宗教観をよく表してると思うんだ」

グローバリズム思想の致命的な欠落について航太郎が指摘した件りから、それまで穏やかだったソフィアの表情が、またも剣呑な風情を伴ってきた。
「そんなのおかしい……だから日本は、節操が無いって言うのよ」
何だか、ソフィアは自分でもおかしいくらい腹が立ち、航太郎に言い返す。
「ギリシアにだって、オーソドクスとアクロポリスの共存があるわ。確か、どこかの教会には、足の病気を治してくれる神様がいて、そこには多くの患者が訪れるのよ。ギリシア正教の教会なのに、古代ギリシアの神がいるのよ。これこそ、日本でいうところの、神社と仏閣の共存や融合なんじゃないの？」
航太郎は両手を広げ、首を傾げてみせた。アメリカ仕込みの、何やら相手を小バカにしているようなジェスチャーだ。
「それはそうかも知れない、が、日本での融合とは所詮レベルが違うよ」
するとソフィアは、もうほとんど泣き顔になって航太郎に言い返したのだ。
「日本人は、節操が無いのよ。それに、明治時代には国家神道とか言って、悪いことをするための洗脳の道具に使ってきたんじゃない！　それが戦争を引き起こしたのよ。日本は悪い国だわ！　だから、世界からバカにされてるのよ！」
航太郎はソフィアの顔をまじまじと見つめた。さすがの航太郎も、冷静ではいられない、

とんでもない言い草だ。せっかく遠路はるばる伊勢まで案内したにも拘わらず、こんな散々な態度をされて終わるとは……。

とうとう堪忍袋の緒が切れた航太郎は椅子から立ち上り、呆れたように、

「ああ、分かったよ。もう、君とは話すことはない」

と冷たく言い放った。そのままベッドに寝転がり、文庫本を読み始める。すると暫くの後、航太郎の背後から小さく、声が聞こえた。

「ごめんなさい」

「……え？」

耳を疑った航太郎が振り返ると、もうソフィアの姿は無く、廊下へのドアの閉まる音が室内に響くのみであった。

第五章

オリンポスの神々の島に生まれて

師走を迎え、吉祥寺駅前の商店街にも年末独特の忙しい空気が流れだした。しかしこの忙しさは、心が浮き立つような、どことなく好ましい部類のものである。

「ややあ、ソフィアちゃん。いらっしゃい。いやー、今日もスゴイ美人さんで、目が覚めますねえ」

商店街から一本外れた通り沿いに建つ橘ビルを、いつも通り訪ねたソフィアに、紺色の作業服を着た中年男性が、右手をビシっと掲げて挨拶してきた。橘航太郎後援会会長の六角(ろっかく)である。

前回の選挙での航太郎の〝ていたらく〟を受け、それまで出張っていた古参の面々は散り散りになってしまったが、六角はその後あらたに後援会会長の職責に就いた男性である。立候補を経ての就任から、既に二年ほど経っている。本業は割と手広く事業展開している建設会社「六角興業」の社長なのだが、現在は経営のほとんどを、専務である弟に委(ゆだ)ねている。そのため、本人は平日の昼日中であるにも拘わらず、後援会事務所に常駐してもいられるのだ。

「六角さん、相変わらず元気そうよね」

小さくお追従(ついしょう)笑いを浮かべたソフィアに対し、こちら六角は、ワイドフレームの眼鏡の下に満面の笑みを浮かべ、

「いや、これがね、今日は凄いニュースがあるから、私は元気なんですよ」
と、口にした。
「何のこと？」
顔を寄せてソフィアが尋ねると、六角は両掌をこすり合わせながら、答えた。
「なんと、今や日本中で超・話題の、あの霧島さくら子総理が、航太郎君との対談を了承してくれたんですよ！　来週、首相官邸で二人の対談を撮影し、その動画をインターネットで配信するんだよねえ。あ、ネット配信については、うちの若いモンがやってくれるんですけど」
「へえ、すごい！」
霧島さくら子と言えば、今や世界的にも有名過ぎる、日本国内閣総理大臣だ。未だ三十代でありながら、現在の日本の経済成長路線の礎（いしずえ）を築き、日本史上かなり珍しいレベルの長期政権を維持している。しかしその外見は単に〝実年齢に見合わぬ童顔の小柄女性〟としか見えないため、これまで成してきた偉業の数々とは、イメージ的に大きな乖離（かいり）がある。それ故か、職責以外の面での伝説化も著しい、ある意味、ネタ満載の女性首相なのだ。
現在、日本は霧島内閣によるデフレ対策が功を奏し、名目ＧＤＰで５％超の経済成長を続けている。国土のあちらこちらで槌音が響き、国民は活気を持って働いているのだ。こ

れは、三年前の桜の季節に、さくら子首相が国会で稀代の大演説を敢行し、日本政府が日銀の国債買入（買いオペレーション）、建設国債発行、そして国土強靭化の公共投資拡大という、デフレ期における正しい経済対策に乗り出した結果である。この政策転換によって日本はついに実に二十年間も続いたデフレーションから脱し、世界屈指のスピードで経済成長を始めた。霧島さくら子を〝大転換〟へ導いた契機の詳細については未だ不明だが、とにかく彼女は齢三十八にして既に伝説の人になってしまったのだ。

勿論ソフィアもアテネ大学在学時から、日本国初の女性首相・霧島さくら子の存在は知っていた。が、正直なところ、ソフィアはさくら子について、あまり興味を持っていなかった。遠く離れた極東の島国の、異民族の首相などに、どうしたら関心を持つというのか？しかし、今このように日本に留学してみると、やはり〝霧島さくら子〟を、一度直接見てみたい、という欲求を禁じ得ない。

「六角さん、航太郎は今日、何時くらいにここに来るの？」

「そうだねえ、さっき吉祥寺駅前で遊説しているって聞いたから、もうすぐに戻ってくると思うよ」

六角がソフィアに答えていると、台所の奥から花園が顔を出した。

「ソフィアちゃん、さくら子ちゃんのとこ、一緒に連れてってもらえばいいじゃない。こ

んな機会、なかなか無いよ」
　花園は、手製の薯蕷饅頭（じょうようまんじゅう）がぎっしり並んだ漆塗りのお重をソフィアに押し付けると、今度はお茶を淹れようと、再度キッチンへ入って行く。不思議なことに、日本の50歳以上の女性の多くは、霧島首相のことを「さくら子ちゃん」と呼ぶのである。
　お茶を待つ間、ソフィアはすっかり好物になった和菓子にぱくつきながら、霧島首相との対談に自分も行けるよう航太郎に頼もう、と考えた。六角も早速饅頭を食べ始めたが、ふと事務所内を見渡し、
「なんだか、こんな小洒落た事務所は居心地が悪いですよねえ。あんな椅子、いったい誰が座るんだか」
　と、マッキントッシュ社製の小ぶりの椅子を指差した。件（くだん）のヒルトップとバルセロナ・チェアとを交互に見ながら、六角はぶつぶつ続ける。
「あっちのイヤにでかい、黒い椅子ならまだしもねえ、こっちのチビッこいのは、あるだけで邪魔ですよねえ」
　するとちょうど、航太郎が演説から戻ったのである。疲れ果てた体を応接室のカッシーナのソファに横たえた航太郎が、絶世の美女から突然、
「航太郎。あんた、首相の霧島さくら子と対談することになったんですって？〝ロウニン〟

のあんただけだと心配だから、わたしも一緒に行ってあげてもいいわよ」
と、とんでもないセリフを浴びせかけられたのだから、こちらもはっとするほどの美男の顔がしたたかに引きつったのは、言うまでもない……。

〝議員浪人〟航太郎の、超・有名首相との栄えある対談は、首相官邸で行われた。
2002年に竣工した近代的な官邸ビルディングまで、航太郎は自らハンドルを握り、父親譲りのシルバーのアウディA8を走らせた。本来であれば秘書の嵯峨野が運転するところだが、航太郎は今日、気分転換のため自分で運転したかったのだ。航太郎たちの乗るアウディを追うように、その後ろには、六角たちの乗ったホンダのワゴンが付いてきている。
助手席に収まったソフィアはといえば、
「わたし、対談の最中はカメラマンの役目をしてあげるわよ。航太郎、わたしみたいな優しい友達がいて、良かったわね！　あ、でも、ビデオの使い方がまだよく分からないから、あんた、後で教えてよね」
などと盛んに喋っているが、ソフィアの軽口にもいい加減慣れっこの航太郎は、右から左へ聞き流す。今日のソフィアはピスタチオ色のニット・ワンピの上に、紺のツイードの

ジャケットを重ねている。彼女のグラマラスに均整のとれた体型を、さらに目立たせるコーディネートだ。それをチラリと横目で眺め、外見だけは異常に魅力的なのにな、と、航太郎は少々残念な気持ちにかられた。

厳しい身体チェックを受けた後、一行は官邸の出入り口にほど近いコンパクトサイズの会議室へと通された。航太郎が少々緊張しながら壁の時計を気にしていると、約束の時刻きっかりに、霧島さくら子首相が複数のＳＰと共に、会議室へ入ってきた。と、航太郎は驚いた、日本国内閣総理大臣のさくら子は、なんと和服姿で登場したのである。

「こんにちは、皆さん」

目にもあやな常盤緑（ときわみどり）の訪問着に身を包んださくら子に、航太郎は意表を突かれ、口をぽかんと開けてしまった。そんな航太郎の様子を気にも留めず、さくら子は如才なく挨拶の言葉を述べる。

「ご無沙汰しておりますわ、橘さん。前回の選挙で応援演説に伺って以来ですね。あなたのような有用な人材は、次回こそ勝って、共に働いていただかなければなりません。そのためにも、本日は宜しくお願い致します」

「こちらこそ、その節は誠にふがいなく……」

航太郎は慌てて立ち上がり、頭を下げる。

「えー、こちらはソフィア、日本とギリシアのハーフで、現在はＩＬＵにて政治学を専攻する学生です。その関係で現在、私の事務所に社会科見学に来ております。本日も勉学の一環として、この場に同席させていただいております」

〝社会科見学〟と言われたことに加え、さくら子が和服なのに対し自分がただのワンピだったことも手伝い、ソフィアは少々むくれ顔になり、航太郎の言葉が終わるや否や即座に口を開いた。

「初めまして、霧島総理、お目にかかれて光栄です。わたしはソフィア・ヴァシラキ、現在は学生としてグローバリズムについて研究していますが、将来は霧島総理みたいに、ギリシアの誇る女性宰相になるかも知れないわ」

「初めまして、ソフィアさん。わたくしこそ、未来のギリシア首相をお迎えし、とても光栄に存じてよ」

さくら子は微笑を浮かべて答えると、すぐに航太郎の方へ視線を戻した。

「それでは早速、始めていただきましょうか」

「ええ、宜しくお願い致します、総理」

ソフィアとしては、カメラマンの役目は？　と疑問符が浮かんだのだが、航太郎が何も言わないところを見ると、どうやらソフィアによる撮影はもともと不要だったらしい。見

れば、六角とその会社の社員と思しき数名の男女が、カメラを既に回しているのだ。航太郎とソフィアが挨拶をしているうちに、準備は整っていたようだ。
航太郎は椅子に浅く座り直すと、居住まいを正し、さくら子に向き合う。
「こんにちは、橘航太郎です。今日は日本国内閣総理大臣、霧島さくら子総理にお話を伺います。総理、本日は宜しくお願いします」
「国民の皆様、霧島です。本日は橘さんと共に、日本国のとるべき指針について、お話したく存じます。どうぞ宜しくお願い致します」
さくら子の朗らかな笑顔がカメラに十分に収まった頃合いを見計らい、さっそく航太郎は本題に入る。
「それでは最初に、今後の日本の経済成長戦略について、お聞きしたいと思います。総理は現在どういった分野を、まず投資し発展させるべきとお考えですか？」
いきなり経済の話題から始めた航太郎に、ソフィアは正直なところ驚いたのだが、さくら子の落ち着いた態度に何ら変化は見られない。
「まず申し上げておきたいのですが、経済成長とは、政府と民間が共に手を携えて、各々の役割を十分に果たしながら実現しなければなりません。そして政府は、多くの産業を並列に捉え取捨選択し、国民経済の成長分野を定めることは、これをすべきではないと考え

ております」
「え？」
航太郎は言葉に詰まってしまった。
「……ですが、過去の日本政府は、例えば医療分野を成長させるとか、環境分野を伸ばすとか、その時々に相応しい分野をピックアップして、成長戦略を立てて来たと思うのですが」
「わたくしの総理就任前、つまり霧島内閣発足以前は、確かにそうでした」
さくら子は続ける。
「しかし本来の視点に立ち戻って考えてみれば、政府のやるべきこととは、民間企業が投資をしやすい環境を整備することである筈です。そして経済活動には、数段階の層、レイヤーがあるのです」
「レイヤー、ですか」
「国には、まず一番下に国土があり、その上に道路や橋梁、港湾、トンネル、電力網といった物理的なインフラストラクチャーがあります。さらにその上には、行政システムと医療、健康保険、教育、治安、安全保障といった『産業的インフラストラクチャー』があります。これらの、ある意味根源的な産業についてまで、市場原理に則り各事業体が利益追求をす

ると、国民の福祉が害されることになるのです。例えば所得が少ない国民が、お金がないために医療サービスなどを享受できないとなると、これは問題です。また、貧しい境遇の子供が教育を受けられないことは、明らかな憲法違反になります。このような理由で、国民に一定の品質でサービス供給がなされるべき分野については、政府がある程度の関与をする必要があるのです」

「おっしゃる通りですね……」

さくら子の弁を受け、航太郎は、経済活動を行う各事業体について、これまでは全てを同じレイヤーで考えていたのだと気づいた。思えばオールストン時代には、レイヤーに関係なく全ての産業や事業を民営化して市場競争の現場に放り込むことが正しいと学んだが、さすがに今の自分はそんな絵空事を盲信してはいない。そしてその逆の考え、つまり「全ての事業を市場競争の荒波にさらさない」というのも、同様に正しいとは言えないのだ。

「とすると、市場原理を適用しない方が良い産業は、他にもありますね。例えば農業、エネルギーなどの、国民の安全保障と密接にかかわっている分野については」

航太郎の、打てば響くような態度に、さくら子は嬉しそうな顔つきになる。

「ええ。ただ勿論、農業分野一つをとっても、むしろ市場原理を適用し外国企業に市場を開放した方が好ましい分野もあります。しかし、日本人の命を繋ぐ作物、例えばその筆頭

の米についてまで、全面的に外国に依存してしまうのでは、安全保障の観点からも問題があります。

エネルギーに関しましても、全ての国民にあまねく適切な価格で良質な電力サービスを供給されること、つまりユニバーサル・サービスが保証されることが前提であれば、市場競争を導入しても構わないでしょう。しかし数年前までのアメリカやドイツのように、電力サービスの市場競争が激化した結果、送電網への投資が疎(おろそ)かになり、停電が頻発(ひんぱつ)するような事態を、わたくしは良しとしません」

「確かに、農業や電力産業などは、ただ営利産業という訳ではなく、国民の命を守ることにも密接に関わってきますからね」

「逆に、政府の関与によって安定した社会基盤が構築された後は、その上のレイヤーでの市場競争については、政府は口を出すべきではないのです。政府主導の産業政策で巧くいったケースは、それほど多くはありません。つまり、政府はマクロ的に安定した基盤を構築し、その上で民間企業がミクロ的に市場競争を繰り広げる。これが正しい資本主義国家のあり方だと、わたくしは考えているのです」

航太郎は、さくら子の穏やかで分かりやすい説明手法に感心し、改めて〝日本国が誇る童顔首相・霧島さくら子〟を見直した。

「よく分かりました。これまで私は、成長戦略、つまり重点分野を政府が定め、そこに政府自らが投資をすることによって、雇用を創出することができると思っていたのです。しかし総理のお話を伺ううちに、それはまるで共産主義国家のような考えだと気づかされました」

「そう、共産主義……あるいは、設計主義とも言えますわね」

さくら子は目を伏せ小さく呟いた後、また航太郎のほうへ顔を上げた。

「共産主義にせよ、新古典派経済学をベースとした新自由主義にせよ、経済学者の設計主義に基づいての社会制度構築を志向している、という点では同じです。共産主義は共産党に率いられた国家が全てを、それこそありとあらゆる分野において管理を徹底すればうまくいくという思想です。また逆に、新自由主義つまりグローバリズムは、国家が全ての分野で一切の管理をしなければうまくいく、という思想でした。おそらく正解は、両者の間のどこかにあるはずなのです。が、最近の世界では新自由主義が大手を振って歩いており、多くの地域で国内格差が拡大しています。その典型が、グローバリズムと新自由主義に基づいて設計された、ユーロですね。ユーロとは、加盟国の国民を不幸にするシステムだった、と言っても過言ではないのです」

と、さくら子の言葉が一段落ついたところで突然、ソフィアが鋭い声で会話に割り入っ

た。

「変なこと言わないでよ！　ユーロは間違ったシステムなんかじゃない、ギリシアは、近いうちにユーロに復帰するのよ！」

ソフィアは、今自分が話している相手の立場を忘れたように、感情的な声でくってかかったのだ。航太郎はギョッとし、しかしすぐに冷静に状況判断すると、六角にジェスチャーでカメラを止めるよう指図した。そしてソフィアの両手を引っ張り、椅子から立たせようとする。とりあえず、彼女を廊下に出そうというのである。

さすがのさくら子も少々驚いたようだったが、咄嗟（とっさ）に柔らかな表情を浮かべ、ソフィアに向き合った。ソフィアは渾身（こんしん）の力で航太郎を押しのけ、さくら子の目の前に強引に座ると、

「ユーロは、経済的統合のためだけに設計されたような、押しつけのシステムじゃないわ！共通通貨の実現によって、戦争が絶えなかった欧州に平和をもたらし、物やサービスやお金や人の動きを国境線によって妨げられなくすることで、最も効率的な経済圏を構築する。こういう、素晴らしいヴィジョンに基づいて、自然発生的にできあがったシステムなの。確かに、経済的には失敗したかも知れないけど、〝欧州合衆国〟を建国するという最終的な目標の前の、小さな躓（つまず）きにしか過ぎないわ。すぐにまた、欧州を一つにまとめようと

いう動きが再稼働する。もちろん、今度こそギリシアは、ユーロの一部として大成功するんだから！」
と、一気にまくしたてた。
「ギリシアの方々のお気持ちは、痛いほどお察ししますわ。しかし、それでもやはり、ユーロの成功は難しいかも知れません」
ソフィアの大声に対して警戒心を露わにするSPの横井に、さくら子は軽く頷いた後、続ける。
「現在、地球上に住む人間は、文化や言語によって区別された共同体の中でなければ、精神的に、また物理的に安定して生きていくことは困難です。未来については分かりませんが少なくとも現時点においては、正常に機能している最大の共同体は、〝国〟なのです。
共通通貨ユーロは、各国の文化、歴史、伝統、生活様式、さらには言語までをも無視した、新自由主義的、グローバリズム的なルールに則(のっと)って運営されていました。ユーロ圏内での関税や各種規制の撤廃、資本移動の自由化、加えて労働者の移動の自由も実現してしまった。結果的にユーロ圏に実現したのは、ルールなき弱肉強食の世界だったのではありませんか？
ドイツのように生産性が高い国は、ギリシアやスペインといった生産性の低い国に向かっ

て、一方的に自国製品を売る。当然ながら南欧諸国は、対ドイツにおいて対外負債をひたすら増やすことになります。何故なら貿易赤字とは、対黒字国で見ると『借金の増加』を意味するからです。
しかも、ギリシアやスペインがドイツからの輸出を制限しようとしても、自由なユーロ圏、EU圏であるが故、関税はかけられません。さらに、為替レートも常に一定であるため、南欧諸国はまるでサンドバックのように、ドイツからの輸出攻勢を受け続けなければならなかった。このような理由で、ギリシア政府は外国からの借入を増やし続け、最終的には破綻に至ったと分析できるのです」
「そんなの、分かってるわよ、……わたしが言いたいのは、そうじゃなくて」
ソフィアは頬を紅潮させながら、懸命に言葉を繋げる。
「……だから、ギリシアが貿易戦争で負けたのは、ユーロという自由市場での競争に敗れたためで、そんなのは仕方がないのよ。だって、それが自己責任よ。だからわたしは、そんなギリシアを見限って、グローバリストとして生きてるんじゃないの!」
「その割には、君、お国自慢をしょっちゅうしているじゃないか?」
ここぞとばかりにツッコミを入れ、航太郎はソフィアを今度こそ部屋から連れ出そうと躍起(やっき)になる。が、ソフィアはソフィアで徹底抗戦し、首相の前だというのに、二人はまる

で取っ組み合いのケンカをしている兄妹のようである。
やいのやいのやっている二人をしばらく眺めた後、さくら子がおもむろに切り出した。
「ソフィアさん。わたくしの考えを少し、聞いてくださる？」
さくら子の穏やかな声掛けを受けたソフィアは、何故か素直に、すとん、と椅子に腰を落とした。そんなソフィアの様子にひとまず安堵し、航太郎も椅子に座り直す。しかし遠巻きに見ている六角たちにとっては、まだまだ肝を冷やしっぱなしの事態であることに変わりは無い。
少しばかり目を伏せながら、さくら子は静かに口を開いた。
「ギリシアがユーロの市場で負けたのは、確かに自己責任かも知れない。あるいは、ギリシアの国内でギリシア国民が貧乏になったのも、確かに自己責任かも知れません。でも国家って、そういうものかしら？　ギリシアが負けた、あるいはギリシア国民が負けたということは、反対側に必ず勝利した誰かがいる、ということでもあるわよね。
本来の政府の役割とは、国内の貧富の差をできるだけ作らず、中間層を中心に国民全体の所得を増やしていくことだと、わたくしは思うの。誰かが何らかのルールを設けなければ、国も世界も弱肉強食の状況に陥り、多くの敗者が生まれてしまうのは当然だわ。勝者はそれを〝自己責任〟と切り捨てるでしょうけれど……。でも、そんな状況が長く続けば、

いずれは敗者側の不満が募り、人間同士が争い、最後には殺し合いにもなりかねない。だからこそ、国が法律を造り、国民全体の所得がバランスよく拡大していくように努める。この調整機能が必要不可欠なことだと、わたくしは考えているの。

もちろん国の法律を定めるのは、その国の国会議員です。そして、国会議員は国民から選挙で選ばれるわね。国民の代表である国会議員が、過渡な奪い合いを防ぐためのルールを作り、国民経済が成長するための基盤を構築するための予算を決めるからこそ、その国は国民主権国家と言えるのです。

つまり、そういう意味では」

ここでさくら子は、先刻までの柔和なものとは打って変わった厳しい表情で、ソフィアの目を見た。

「現在のギリシアは、すでに主権国家とは言えないのではないですか？　ユーロ加盟の代償として、エーゲ海の島々や高速道路、ガス、水道といったインフラストラクチャーを、グローバル資本に買い叩かれてしまったんですもの」

「……それは……」

「ユーロ離脱によって、財政主権や通貨発行権は何とか取り戻すことができましたが、一度失われた主権を取り戻すのは、非常に困難なことです。

幕末において日本が開国を迫られた際、同時に関税自主権なども奪われてしまいました。自国の主権の一部である関税自主権を取り戻すため、日本はその後、何度も戦争を重ねなければなりませんでした。

主権とは、国民自身の手によって、自国の行く末を決められる、重要な権利です。それを安易に捨て去り、文化や言語を同じくしない他国民同士が互いに主権に干渉し合うのは、奇妙な事態と言えるでしょう。そしてその状態を理想とするグローバリズムとは、やはりわたくしには、奇妙な思想としか感じられないのです」

凛と語り終えたさくら子に気圧され、ソフィアは、二の句が継げなくなってしまった。仮にグローバリズムが全面的に実現したとして、そのような世界の中で、各国の民は何の主権を持つことになるのか？　世界政府など存在しない現時点では、膨大な「何物の主権も持たない、何物にも属さない民」が生まれるだけなのではないか。

ソフィアが黙り込んでしまったのを見て取ると、さくら子は努めて声のトーンを明るくし、話を続けた。

「ギリシアがまだユーロに属していた頃の話ですが。当時ユーロ圏の問題を解決するには、ドイツの主導によって財政統合し、所得が多い国から少ない国への『所得の移転』、つまり『ユーロ交付金』を実現するしか道がありませんでした。これは、ドイツ人の所得の一部を

無条件でギリシア人に付与する、ということです」
「それは日本で言うなら、地方交付金ですか？」
航太郎が尋ねると、さくら子は、
「厳密には異なる点もありますが、まあ、そのようなものです」
と答えた。
〝国の主権〟の観点からユーロ問題を凛然と語るさくら子を、ぼんやりと眺めながら、ソフィアはすっかり物思いに沈んでしまった。航太郎とさくら子の対談の声が、まるでどこか遠くから聞こえてくるようだ。
なぜ、あれだけ懸命に学んだグローバリズムの思想をもって、さくら子に反論することができないのか。そもそもグローバリズムとは、主権や国民意識の上位に、市場を置いている。しかし、現実の世界は国家を否定して生きていけるほど、甘いものではないのかも知れないのだ。グローバリストを自称しているソフィアでさえ、弱肉強食の荒野に突然放り込まれ、「自らの能力を自由に駆使し、生き残りなさい」と命じられたなら、躊躇（ちゅうちょ）するのは必至だ。少し前までのソフィアには、勝者たりえるとの自信があった。だが、さくら子の話を聞いているうちに、次第にその自信は、根拠の無い、〝無謀な勇気〟に過ぎないような気がしてきた。

さくら子が航太郎に語りかける声が、ソフィアの耳に流れ込んでくる。
「東京都民は、地方のインフラ整備に自分たちの税金が使われることを認めています。何故なら、同じ国家の内であり、自分たちもその地方のインフラを、直接的にまた間接的に利用することが当たり前だからです。ところで、もしもギリシアが豊かでドイツが貧しかったとして、ギリシア国民は、自分たちの税金がドイツのインフラ整備に使われることに納得できますか?」
さくら子の質問にソフィアは、そんなことは許せない、と即座に思った。ギリシアは第二次世界大戦中にナチス・ドイツの占領下に入り、数十万の死者を出したため、ドイツへの悪感情は未だ残っているのだ。あるいは、ギリシア人にとってやはり禍根残る国である、トルコはどうか。トルコがユーロに加盟し、「トルコのインフラ整備のため、ギリシアから送金する」となったら、やはりソフィアには到底納得することなどできないのだ。
二人の対談も無事に(?)終わり、航太郎や六角たちが帰りの準備を始めると、ソフィアはさくら子に向かい、ぽつりと、
「霧島総理は、いったいどこで、それだけの知見を身に着けたの?」
と口に出した。それを受け、さくら子は一気に面白そうな表情になる。
「では、わたくしの首席秘書官をご紹介しましょうか? 今日わたくしが述べた経済面の

知識の大半は、彼の受け売りなの。……そうね、彼と知り合うことは、きっとソフィアさんの為になるわ」

そしてさくら子は、東田剛(ひがしだつよし)という名前をソフィアに告げた。東田の名が出た瞬間、航太郎は微妙に顔をしかめた。が、ソフィアはと言えば、

「是非、お会いしたいわ」

と即答し、すぐさま航太郎にも、

「一緒に行ってくれるわよね?」

と念押ししてきたのだ。航太郎は内心がっくりだが、総理の手前、肯くしかない。明らかに嫌がっている様子の航太郎を不思議に思いながら、ソフィアは東田首席秘書官とのアポイントを取った。そして二人は後日あらためて国民経済について学ぶため、官邸を訪れることが決まったのだ。

国会議事堂から道路を一つ挟んだ西側に位置する、参議院議員会館。頬を切るような冷たい風が吹く日に、航太郎とソフィアはここを訪れた。通りの街路樹から枯れ落ちた黄葉が、強風に舞っている。航太郎はいつも通りのスリーピース姿だが、ソフィアの方は完全防備で、細身のデニムをブーツ・インし、厚手のフェルトのコートの上に、さらに大判の

ストールを巻き付けている。ソフィアのウエーブを描いた長い髪は、風に煽られ、そこら中に広がってしまう。

やっと室内に入りホッとしたのも束の間、議員会館の応接室のドアが、物凄い音を立てて開いた。背後に数名のスタッフを引き連れ、入口からいやに颯爽と現れたのは、日本中でその名を知らぬ者はいない、霧島内閣の主席秘書官・東田剛である。190センチ近い上背に、妙に細長い体躯にブラック・スーツ。髪はべっとりと整髪料でオールバックに固められ、その眼鏡の奥、光る瞳は蛇のように鋭い。一言で言えば、ホントにこいつは秘書官なのか？　と疑いたくなるほどに、異様に威圧的な男なのだ。

東田は二人の前に立つと、

「東田と申します。以降、お見知りおきのほど、お願い致します」

と挨拶をした。航太郎も挨拶の言葉と共に頭を下げたが、東田の方はと言えば、頭を傾ける気配すら無い。

「わたし、ソフィア・ヴァシラキです……」

あのソフィアまでが、珍しく大人しい。それもそのはず、東田の言葉遣いは酷く丁寧なのだが、彼独特の慇懃無礼さは、来客側にもひしひしと伝わってくるのだ。ここに来るまでは、東田との会見を楽しみにしていたソフィアだったが、航太郎ふくめ他の聴衆が一様

にげんなりしている理由が、会って数秒で分かってしまった。確かにこれは、身の毛もよだつ雰囲気の男である。

航太郎とソフィアが超ビジネスライクな挨拶を済ませると、東田は、

「これはこれは」

と、黒のセルフレームの眼鏡をキラリと光らせ、航太郎を凝視した。

「先生は確か、橘航太郎先生、でしたか。『絶対当選確実!』と太鼓判を押されて菅原幸也氏に挑みながら、比例復活もできないほどの惨敗を喫したという、伝説の秀才先生と聞き及んでおりますが。いや素晴らしい、オールストン・ビジネス・スクールもサマサマですなあ」

『な、なにぃいいい……!!』

断っておくが、航太郎はあくまで、このセリフを心の中で叫んだのである。東田の嫌味っぷりに、さすがのソフィアも驚きを隠せず、目を真ん丸くして東田を見ている。東田の横にいる霧島内閣の名物官房長官・九条守(くじょうまもる)が、何やら勝手に恐縮した風だが、いや、彼に罪はまったく無いのだが……。

風の吹き荒れる戸外よりもさらに冷え切った空気もお構いなしに、東田は容赦なく、いつもの調子で喋り出した。

「それで、何が聞きたいのですか。私のような者でお役に立てるのであれば、どうぞ何なりと」
まさに、慇懃無礼もここに極まれり。わなわなと体を震わせる航太郎の横から、ソフィアは一つ目の質問を東田に投げかけた。
「あの、ギリシア経済の、どこがダメなんですか？」
すると何故か東田は、恐竜が舌なめずりするような顔をしたため、ソフィアは思わず一歩後ろに下がってしまった。
「ギリシア経済は、何故にダメなのか！　ほう、これは大変面白く、奥深い質問と言えますな。しかし質問に答える前に、まずは定義から明確にしなければなりません。それでは、始めましょうか」
東田は聴衆に座るよう合図し、手近にあったホワイト・ボードを引き寄せる。黒サインペンで大きく「経世済民」と書き殴ると、まるで大学の講義のように話し始めた。講義内容とは関係ないが、字はかなりヘタである。
「経済とは、漢字で『経済』と書きます。これは『経世済民』という四字熟語の略なのです」
東田の言に寄れば、経世済民とは、元々は「民を済（すく）うために、世を経（おさ）める」という意を

持つ四字熟語から、「経」と「済」を抜き出して新たな用語を創ったものだそうだ。つまり経済とは、ビジネスを指し示すのではなく、人々を救うための政治を意味する。語の本意に立ち戻ってみれば、経済だけでなく治安の改善や安全保障の確立などについても、実は立派に「経済」の範疇に入ることになるのだ。

「総理から事前に、『経済活動の基盤であるインフラストラクチャーを構築するのも政府の務めである』という話を聞いたかと思いますが、まさにインフラ整備は経世済民の一部です。別に、金銭を稼ぐことだけが経済の目的ではない」

おどろおどろしい雰囲気ばかりが前面に出ている男だが、説明は分かりやすく、納得させられてしまう。とりあえず最後まで真面目に聞いてみよう、とソフィアは思う。

「それどころか、経済を経世済民としてとらえると、金を稼ぐことや『国の借金を返すこと』は、優先順位がべらぼうに落ちてしまうんですな。何故かと申しますと、政府とは通貨を発行することができる唯一の経済主体であるため、国内のインフレ率が低いままである限りは、利益や借金の額などどうでもいい問題だからです。

例えば、ソフィアさんが無制限に日本円を発行できる権利を手にしたとします。するとあなたは、『利益を上げよう』『借金を返そう』などとは夢にも思わなくなるのです。お金が欲しければ紙幣を刷ればよいだけのハナシであり、また、借金返済という一般人にとっ

ては非常に大きな問題についても、あなたはプリンティング・マネーという方法によって、簡単に問題解決することができるのですから」

独自通貨国における中央銀行とは、実は〝中央政府の子会社〟という位置づけになる。我らが日本国についても、日本銀行の株式は、その55％を日本政府が保有している。日本銀行は日本政府の子会社だ。中央政府である日本政府は、子会社である日本銀行に命じ、日本円の通貨を発行することが可能である。

勿論、プリンティング・マネーには、リミットが設けられて然るべきだ。日本円の通貨が新たに発行され市中に出回っていけば、当然、インフレ率は上昇していくからである。だからこそ日本政府は、インフレ率が許す限りにおいて、日本銀行に通貨を発行させることができる。具体的には、過去に日本政府が発行した国債を、日本銀行に、新たに発行した日本円で買い取らせるという手順である。

このように通貨発行権を有する中央政府や中央銀行が、「利益を上げよう」あるいは「自国通貨建ての対外債務を返済しよう」と主張することは、珍妙な行為としか思われない。日本政府の経済政策の役割はあくまで経世済民、つまりは日本国民の豊かで安全な暮らしを実現することであり、自らの利益追求や借金返済ではないのだ。

「つまり、政府とは企業ではなくＮＰＯである、と言えるのです。本質がＮＰＯであると

いう観点からすれば、利益の追求など笑止千万、もってのほか。どうです、ここまで聞けば、異国人のソフィア嬢にも、よーくお分かりいただけたことでしょう？　しかし、まったく嘆かわしいことに、こんな基本的なことすら理解できない連中が、我が国にはゴマンといるワケですよ」

「え、分かんないわよ」

ここまで大人しく振る舞ってきたソフィアだったが、東田から急に話題を振られたためか、いつも通りの口調に戻ってしまった。

「仮に、政府の目的は借金を返済することじゃない、としてもよ。実際にギリシアはデフォルトして、国民生活がボロボロになってるの！　これは、ギリシア政府は〝経世済民〟を実現できていないってことで、その原因は借金を返さなかったから、ってことでしょ」

対抗する意見を平然と言い放ったソフィアに、東田は明らかにイヤそうな顔になった。しかし如何に〝あの〟東田と言えど、さすがに国際親善に水を差す気はないらしく、すぐに元の鉄仮面のような顔つきに戻り、答える。

「……ソフィア殿。あのですね、ギリシア政府が借りていた金は、自国で発行することができない、共通通貨ユーロ建てだったのですよ。これでは、先ほどの理屈は成り立たないのは当然でしょう」

「あ」

言われてみればその通りで、ソフィアは返答のしようが無かった。先ほどから東田は「通貨発行権を持つ中央銀行が、中央政府の子会社」という前提で語っている。しかしユーロに加盟していた頃のギリシア中央銀行は、ギリシア政府ではなく、ＥＣＢ（欧州中央銀行）の管理下に置かれていた。マーストリヒト条約により、ユーロ加盟国の各中央銀行は「自国政府の指示を聞いてはならない」と決められていたほどの徹底ぶりであったのだ。

東田はニコリともせずに続ける。

「通貨を発行する権利とは、国の持つ立派な主権の一つです。さらに、自国への輸入に対し関税をかけて国内の産業や企業を保護する権利も、あるいは為替レートを切り下げて過度な輸出攻勢を防御するのも、国の主権です。

ギリシアはＥＵやユーロなど加盟せずに、関税や安い為替レートで自国市場を外国から守りつつ、産業や企業についてじっくり腰を据えて育てるべきだったのです。国民の需要を国内の供給能力で満たすことも、国民経済の目的の一つなのですから。ところが現実のギリシアは、自国の供給能力向上ではなく、ユーロ加盟という道を選んでしまった。

関税や為替レートという防御壁を失い、さらに政府が国際金融市場へ多額のユーロ建て借金を作り、国債金利の暴騰に手も足も出ない事態となった。本来であれば、インフレ率

上昇を唯一の代償に、ギリシア中央銀行が過去に発行された国債を買い取ってしまえば、少なくともデフォルトに陥ることはない。ところがギリシアはユーロに加盟していたため、国として至って普通の対抗策すら講じることができなかった、と」

ソフィアとしては、先ほどからずっと自国をけなされているようで、内心はイラつきが抑えられなかった。しかしいまさら講義から脱落することもできず、しかめっ面のまま、東田の話に耳を傾けている。

「為替レートの切り下げや関税とは、元来、他国からの輸出攻勢を防ぐための、国が持つべき盾なのです。未だ十分な生産力を持たず、有力な企業も少ないギリシアが、ユーロ圏のような〝ルールなき市場原理主義の戦場〟に放り込まれれば、対外債務が膨れ上がり政府がデフォルトに陥る可能性は否定できなかった。盾無しの状態で、戦地に赴くも同然なのですから。

それでも、せめて為替レートだけでも切り下げることができれば、ギリシアは国家全体として実質的な所得、つまりは人件費を引き下げ、輸出競争力を回復することもできたのです。ところが、ユーロ加盟国間では1ユーロは常に1ユーロであり、変動することがない。結果的に、対外負債の返済不能に陥ったギリシアは、デフォルトという破滅に至り、ユーロ崩壊の引き金を引くこととなった。

……正直、私からすれば、こんなのは共通通貨システムの発足当時から予測していていたシナリオなワケです。ユーロ内で各国が勝ち組と負け組に二極化していき、負け組が勝ち組に対しての債務不履行に陥る、という程度のことは。何と言っても、負け組には自分たちの生産力を高めるための機会すら与えられないのですからね。他国から恒常的な輸出攻勢を受け、市場を外資に席巻(せっけん)されている国においては、新たに企業が育っていく余地が非常に少ない。国内市場なしに国内企業を成長させるというのは、至難の業です」

呆れたような口ぶりで、東田は話し終えた。

「だったら！」

ソフィアは鋭い声を上げずにはいられなかった。

「何故ＥＵは、そんな、最初から破たんが見えているようなシステムを導入したのよ⁉ユーロ加盟国が勝ち組と負け組に分かれてしまうなんて状況、いずれ行き詰るのは分かってたはずでしょ⁉」

「いい質問です！　ソフィア殿。お答えしましょう、つまり、その元凶は」

何やら勝ち誇ったような顔つきで、東田は答える。

「グローバリズム、あるいは新自由主義という怪物です。

ユーロ圏内でルール無用な市場競争を実現すれば、例えばドイツのような生産性が極端

に高い国が勝者になるのは至極当然です。その点に気づいていた頭のいい連中が、共通通貨の仕組みを構築したのでしょう。ユーロの枠組みを作った上で、そこに生産性が低いギリシアのような国を引き入れ、ドイツ企業からギリシアへ雪崩（なだれ）のごとく製品を輸出させる。連中はそのドイツ企業に事前に投資をしていれば大儲けできる、と。こういうシナリオ、茶番劇ですよ。

まあ、どうせ長続きしないことは分かっていたでしょうが、同時に、負け組が財政破綻したならば〝自己責任〟で片づけ、その国の国民に借金の返済をさせればよいとも、考えていたんじゃあないですか？　ついでに、借金の肩にエーゲ海の島々やインフラなどを安く買いあげ、後々はそちらのビジネスを通してギリシア国民の所得を吸い上げる。いや、うまく〝してやられ〟ましたな。あやかりたいもんですなあ」

今や、東田一級の嫌味な物言いもまったく気にならないほどに、ソフィアはショックを受け、愕然としてしまった。自分が信奉してきたグローバリズム思想への憧れ、その憧れの風船に致命的な穴が開き、徐々にしぼんでいくような気がした。これほど自明であることを、ユーロの、あるいはギリシアの政治家は何故、分からないのだろうか。

ギリシア国民が総選挙で「ユーロ離脱」を掲げる急進左派連合を選択したことについて、ソフィアはこれまで怒り心頭だった。ユーロを否定しかつてのドラクマに戻るなど、歴史

の針の巻き戻し、国家としては後退でしかないと。しかし東田からの説明を受けた今となっては、むしろユーロ離脱が、あの時点ではギリシアにとって最良の選択であったように思われた。

それでは、ギリシアやユーロの並みいる政治家が、あれほどユーロ加盟の維持にこだわった理由とは何なのか? ソフィアにはまったく分からなくなった。しかし、だからと言って、ユーロ離脱が正しかったとも思えないのだ。ギリシアがユーロ離脱したことで、政府がデフォルトし、ドラクマが暴落した。ドラクマの暴落によって、ギリシアから資本が流出し、それがドラクマの暴落にさらなる拍車をかけた。国民は貧困に陥り、現在のギリシアにおいて、急進左派連合の人気は地に墜ちている。

東田の言うことのすべてが正しい訳ではないだろう。だいたい東田は日本人であって、ギリシア人ではない。どこまでいっても彼は、外から冷めた目でギリシアの情勢を眺めているに過ぎない。ギリシア人であるソフィアからすれば、ユーロ残留も、ユーロ離脱も、共にギリシア国民を不幸にした、忌むべき方策なのだ。それなら……それなら、結局、ギリシアはどうすればいいのだろうか……?

東田がさっさとホワイト・ボード上の文字を消し、ガタガタと音を立てて片づけを始めると、九条は他のスタッフにお茶をだすよう指示を出してから、会議室から姿を消した。

航太郎は、くたりと座り込んでいるソフィアの、悲しげな横顔を見遣った。明らかに落ち込んでいる彼女に、何か言葉をかけてやりたいと思う。自国が悲惨な状況になっているのは、その国の民であれば重々承知のことである。しかしそれを他国民から指摘されるのは、まったく違うことだ。厳しい事実を突きつけるときほど、人は相手の心中をおもんぱかって言葉を選ばなければならない……。

すると数分後、殺風景な会議室に、なんと首相のさくら子が姿を現したのだ。航太郎はさっと腰を上げ、総理を室内へ迎え入れる。

「ソフィアさんがいらしてると聞き、参りましたの。ねえソフィアさん、この後お時間あるかしら？　宜しかったら、和服をお召しになってみない？」

あまりに意外な声掛けに、ソフィアは顔を上げた。

東田による容赦ない講義を終え、極度に落ち込んでいたソフィアは、さくら子にすすめられるまま、和服を着てみることになってしまった。ソフィアにとっては、自分でも意外なほど、さくら子の申し出が嬉しかったのだ。航太郎の方も、東田と同席しないのであれば待つのはやぶさかでもないようで、快く承諾してくれた。

官邸内の和室に通されたソフィアが目にしたのは、華やかな天色（あまいろ）の辻ヶ花（つじがはな）の振袖である。

胸から裾にかけて細かな絞りの花が飛び、紫から青、水色への、微妙な色合いのグラデーションが美しい。袖の長さもたっぷりと、絢爛豪華な大振り袖だ。

しかし喜んで着せてはもらってはみるものの、初めての和服は、ソフィアには窮屈に感じられて仕方がなかった。襦袢やら何やら、山のような下着を着せられ、その上に本番の振袖をやっと羽織っても、またそこから紐や帯が幾重にも巻きつけられるのだ。ソフィアにとっては特に胸のあたりが苦しいように思われ、着付けの途中ながらもぞもぞと落ち着かないでいると、さくら子が、

「こちらの着物は、ソフィアさんに差し上げますわ」

と言った。

「えっ？　だって……」

「わたくしの家の桐箪笥の奥にね、眠っていたものなの。わたくしには大きすぎるから、どなたか似合う方にプレゼントしたいと、ずっと考えていたのよ。そうしたら、サイズがぴったりなソフィアさんが現れたんですもの。これは神様の思し召しとしか考えられないわ」

手際よく着付け、さくら子が早くも帯を整えていると、ソフィアが目を伏せ、

「さっきも言ったけど。わたし、キモノを着たのって、今日が初めて。母は日本人なのに、

わたしはこれまで一度も着せてもらえなかったわ。……わたしが日本人じゃなかったから、かしら」

と言った。思いつめたような声を発したソフィアに対し、さくら子はくったくない様子で答える。

「ソフィアさん、日本に来るのは今回が初めてだったのでしょう？　和服を着るのには、着物と帯だけでなく、帯締めやら帯揚げやら何やら、たくさんの付随物が必要ですもの。お母様が外国でそれらをすべて揃えるのは、とても難しいことだったと思うわ。

さあ、今日の写真を撮って、お母様にお送りしましょう！　きっと、すっごく、喜ばれてよ。ギリシアの青い海と空みたいな色の着物が、ソフィアさんの白い肌に映えるわ」

不思議なことにこの女性首相の前では、いつもより素直に振る舞える、とソフィアは気づいた。

「総理って、優しいのね」

さくら子は九条に撮影を頼もうと立ち上がっていたが、ソフィアの言に振り返り、

「わたくしは別に優しいのではないわ。ただ、わたくしたちを守るために亡くなった先人のご恩に報いるために、わたくしは常に人を助けることに注力する。そう、心に決めてるのよ。……もう、ここ何年も、ずっと」

そう言うと、少し寂しげに笑った。
現在、ギリシア政府はドイツに対し、ナチス・ドイツの戦時賠償を要求し、政府の対外債務返済の不足分に充てようとしている。しかしソフィアにしてみれば、このギリシア政府の姿勢には違和感を禁じ得ない。
東田の講義を受け、その後も独りで多数の文献を読みこんだソフィアは、ギリシアが対外債務のデフォルトに陥った理由をよく理解できるようになっていた。だからこそ、ギリシアの講じるべき解決策とは、「ギリシア人が働き、ギリシア企業が製品を海外に輸出し、対外負債を返済する」ことだと、ソフィアは考えている。ユーロを離脱し、為替レートが大きく下落した今、やりようによっては、ギリシアは、対外純資産国への道を目指すことも出来るのだ。ギリシア国の持つ底力を、ソフィアは現在も信じている。それにも拘わらず、多くの国民は「政府のせいだ」「ドイツのせいだ」と言い募り、政府もまともな政策を打てていないのはおかしい。
今、ソフィアは自宅のマンションで、さくら子から譲り受けた振袖を広げたまま、物思いに沈んでいる。ギリシア国の抱える国民経済の問題点、ギリシア政府が犯している誤認や失政。ソフィアには、それらは全て、ギリシアの歴史的背景に起因しているように思わ

れて仕方がない。

ギリシアの歴史は凄惨だ。歴史上、ギリシア人たちが独立国家を持ったことは、1830年のロンドン議定書までではなかった。しかもロンドン議定書によるギリシア独立は、英仏露という欧州の列強がオスマン帝国に対し、ギリシアを独立させるよう要請したことで達成されたのだ。1821年のイプシランディスの蜂起以降、ギリシアは対オスマン帝国の独立戦争を戦ってはいたが、結局は列強の都合により独立を許可されたに過ぎず、ギリシア人が自らの力で独立を達成したのではない。

遥か古代において、ギリシアは、まさにヨーロッパの中心だった。そもそも「ヨーロッパ」という言葉自体が、古代ギリシア神話の王女エウローペに由来している。フェニキアの王子カドモスの妹、エウローペは、ある日、牡牛に化けたゼウスによってクレタ島まで連れ去られてしまう。その後ゼウスとエウローペとの間に生まれた男子、ミノスはクレタの王となり、ミノス文明を築く。西洋文明の元始たるミノス文明は、クレタ島からギリシア本土、欧州全域へと広がっていき、だからこそこの地域全体が、ミノス王の母の名から「ヨーロッパ」と呼ばれるようになったのである。自らの住む地域の語源なのだから、ヨーロッパの人々がギリシアに対し抱いてきた憧憬の大きさと言ったら、尋常では無い。

しかし、15世紀から19世紀上旬までの四百年近く、ギリシアはトルコクラティア、つま

りトルコによる支配の下にあったのだ。ギリシア人は近年まで、西欧に行くことを「ヨーロッパに行く」と表現していた。つまり独立前のギリシアは、「トルコに支配されたヨーロッパ」ではなく、事実上、中東の一地域だったのである。1830年に何とかトルコからの独立を達成したものの、その後もギリシアは、変わらず外国によって翻弄されてゆく。

独立後のギリシアは列強が選んだ国王を頂いたが、実はギリシア初代国王のオトン一世はギリシア人ではなく、親ギリシア主義者であったバイエルン国王ルートヴィヒの次男、つまりドイツ人だった。このオトン一世は、黎明期のギリシア王国において、かの「メガリ・イデア」の口火を切った人物である。

メガリ・イデアとは、1832年に英仏露三国が確定させたギリシア王国の領土に、ギリシア人が住んでいる地域を例え王国外に位置してもこれを加えようとする、領土拡張政策だ。当時、実際にはギリシア人の多くがマケドニアやバルカン半島北部から小アジアまでの広大な地域に居住していたが、これらは建国直後のギリシア領土に含まれず、アッティカとペロポネソス半島、それに幾つかのエーゲ海の島々しか領土として与えられなかった。特に、ギリシア民族の歴史と文化の中心都市であったコンスタンティノープルが領土に含まれなかったのは、手痛い損失であった。

当時のマケドニア、バルカン、クレタ島などのエーゲ海の多くの島々、アナトリア、そ

してコンスタンティノープルは、オスマン帝国の支配下にあった。ギリシア王国の求めたメガリ・イデアは、当然ながら、オスマン帝国や周辺のバルカン諸国との継続的な戦争を引き起こす。

しかし初期のギリシア王国においては、領土の拡張はそれなりに順調に進み、将来的にはメガリ・イデアを実現するかにも見えた。1864年にオトン国王がクーデターで追放され、デンマーク王室からゲオルギオス一世が新たなギリシア王として来希すると、その即位を祝し、イギリスは自らが領有するイオニア諸島をギリシアに譲り渡した。さらに1881年のベルリン会議では、オスマン帝国がテッサリアとイピロスをギリシアに割譲する。ギリシアは戦争に勝利することなしに、列強の都合とオスマン帝国の凋落という幸運により、着々と領土を増やしていったのだ。

しかし、1897年。当時のメガリ・イデアの一大焦点であったクレタ島の帰属をめぐり、オスマン帝国とギリシア王国が真正面から激突し、強靭な軍隊を持たなかったギリシアは惨敗する。1905年、クレタ島でエレフセリオス・ヴェニゼロスが、即座のギリシア王国編入を求めて蜂起し、結局は失敗に終わるが、彼の名は英雄としてギリシア中に轟くこととなった。三年後の1908年、オスマン帝国で青年トルコ人革命が勃発。さらに翌年1909年にはギリシア側でクーデターが発生し、クレタ島から招へいされたヴェニ

ゼロスが、翌1910年にギリシア首相に就任した。数年前までは無名の、しかもギリシア人ですらなかった若きカリスマが権力を掌握し、ここから本格的なメガリ・イデアが開始される。

1912年。ギリシアはブルガリア、セルビアと連合軍を形成し、オスマン帝国と戦端を開いた。いわゆる第一次バルカン戦争である。バルカン戦争勃発の直接的な原因は、青年トルコ人革命以降のオスマン帝国が「汎トルコ主義」に基づき、バルカン地域のトルコ化を推進していたことによる。オスマン帝国の政治姿勢にバルカンの人々が不満を抱いていたところに、ギリシア、ブルガリア、そしてセルビアの領土欲が加わり、激戦へとつながったのだ。第一次バルカン戦争はオスマン帝国側の敗北に終わり、オスマン帝国領だったマケドニアが三カ国に分割される。さらに、1913年4月のロンドン条約で、オスマン帝国はついにクレタ島の領有権を放棄した。

ところが、この戦勝国による領土分割の内容に満足しなかったブルガリアが、今度はギリシア軍とセルビア軍を相手に、いわゆる第二次バルカン戦争を始めたのだ。しかし今度はオスマン帝国やルーマニアまでもがギリシア、セルビア側につき、ブルガリアは孤立無援となってしまう。結局、ブルガリアは早期の段階で敗北し、マケドニアのギリシア領編入が確定した。また、ブカレスト条約により、クレタ島もギリシア王国に併合される。二

回にわたるバルカン戦争で、ギリシア王国の人口は、280万人から480万人に膨れ上がった。

数度の戦争を経て、メガリ・イデア達成までの道程は、トラキアと小アジア西岸、そしてコンスタンティノープルを残すのみとなっていた。1917年に始まった第一次世界大戦において、ヴェニゼロス首相率いるギリシアは連合国側で戦い、戦勝国となった。1920年、第一次世界大戦後のセーヴル条約により、ギリシアはマケドニア東部のトラキア及び小アジアの西岸スミルナを獲得する。アナトリア西岸のギリシア植民地は、古代ギリシア文明の中心の一つであり、この地の支配権を獲得したことは、ギリシア人にとって大きな喜びであった。その上トラキアをも獲得したことにより、夢にまで見たコンスタンティノープルはギリシア人の目前に迫る。もっともオスマン帝国はセーヴル条約を批准しなかったため、ギリシアはスミルナを軍の支配下に置き、さらに小アジアの内陸へと侵攻を開始する。

だが、ギリシアによるスミルナ獲得とアナトリアへの進撃は、トルコ人のナショナリズムを燃え上がらせてしまう。1920年3月16日、革命派ムスタファ・ケマル・アタチュルクらが革命政権を樹立し、小アジア西岸に上陸したギリシア軍を相手に戦闘を開始する。1921年、小アジアはサカリア川の戦いで、ギリシア軍はトルコ軍に完敗。さらに翌

１９２２年には、ギリシア軍が逃げ込んだスミルナに対してトルコ軍が攻撃をしかけ、街は炎上した。実に二千五百年間も続いた小アジアにおけるギリシア人社会が消滅する事態となり、メガリ・イデアの夢はここに潰(つい)えたのだ。

１９２３年、ギリシアとトルコ間で、強制的住民交換協定が締結される。１１０万人のギリシア正教徒がトルコからギリシアに、38万人のイスラム教徒がギリシアからトルコに移送された。その七年後の１９３０年。ギリシアとトルコはアンカラ協定を締結し、ようやく両国の国境線が確定した。

メガリ・イデアの挫折後、ギリシアは大恐慌で経済が崩壊し、さらに第二次大戦初期には枢軸国の侵略を受ける羽目になる。１９４１年以降はナチス・ドイツによる支配、第二次世界大戦後はイギリスの支配を受け、その後、支配者がアメリカ人に変わり、国内では共産主義者ＥＡＭの流れをくむギリシア民主軍と、政府軍が内戦を繰り広げる事態になった。その内戦は、１９４９年のグラモス山の戦いでようやく終焉(しゅうえん)を迎える。

それでもギリシアの政治的混乱は続き、１９６７年にはまたもや軍のクーデターが発生、ギリシア国民はパパドプロス大佐のファシズムによる支配を受ける。その後のキプロス問題をきっかけに、ようやく軍事独裁からは解放された。が、次のパパンドレウ政権以降は今度は腐敗政治が横行し、経済は壊滅状態になり、デフォルトの危険性と常に隣りあわせ

の国になってしまった。最後はユーロにすがろうとしたものの、それも失敗に終わった。そして今、ギリシアはユーロからも離脱し、深い懊悩の淵に立たされている。

　こんな有様では、民間が落ち着いて設備投資を積み重ね、供給能力を高めることなどできるはずがない、と、ソフィアは唇を噛みしめた。対して日本は、島国ということもあり、他国の侵略を受けた過去がない。国民は営々と設備投資を重ね、技術と感性を磨き、その結果として現在の日本は、供給能力が非常に高い技術大国となっているのだ。

　航太郎から教えられたところによると、日本の神話は「神々の世界（高天原）」と「人間の世界（芦原中国）」、さらには「死後の世界（黄泉）」を舞台に、多くの神や人間の交流を描いているそうだ。聞かされたソフィアが驚いたのも無理はない。日本神話はまさに、オリンポス十二神を中心とした神々と下界の人々との交流が繰り広げられるギリシア神話に、そっくりだったのだから。神話という形を借り、国や民族の起源を解説しているという点でも、両国は似ている。

　ただ違うのは、現在のギリシアからはオリンポスの神々が姿を消しているのに対し、日本には八百万の神々がそこかしこに息づいているという点だ。ギリシアから古代の神々が失われてしまったのは、国土が幾度となく侵され、民族や言語こそ生き延びたものの、施政者は次々に入れ替わっていき、人々はオーソドクスまたはイスラムという一神教の下で

生きてきたからである。不幸な歴史、と言ってしまえばそれまでだが、元々は同じ多神教の民族だったにも関わらず、現在の日希両国の立場は大きく変わってしまった。

日本には、創業後百年以上の年月を経た企業が、何と1万5千社もあるという。さらに世界最古の老舗企業は、創業が西暦578年という、日本の金剛組という建設会社だそうだ。各社が安定的に、市場競争による潰し合いではなく、「国民全体で豊かになろう」という発想に基づいて切磋琢磨したのでなければ、これほど多数の老舗企業が日本に存在することの理由は説明しにくい。

ソフィアはふと思い当った。もしかしたら、日本人の内に「国民全体で」という発想が強いのは、天皇という不抜の権威が存在し、国全体が八百万の神々に守護されているという感覚が、心のどこかに残されているからではないだろうか?

過去の歴史においてギリシアは、神々の住まいである神殿を破壊され続けてきた。1687年9月26日、オスマン帝国軍が火薬庫として活用していたパルテノン神殿は、ヴェネツィア共和国の攻撃によって爆発炎上した。神殿や彫刻に残る傷跡が、その凄まじさを今も生々しく物語っている。二十年ごとに新築されてきた伊勢神宮に比べ、戦争による破壊の修復さえ満足にできていないパルテノン神殿の、何と悲痛なことか。壮大な設計と、頑強な石造であるが故、訪れる人々にさらに孤高の印象を与えるのだ。

ソフィアはあらためて、目の前の着物の、その生地に触れてみた。しっとりとした絹の質感が指を通して伝わってくる。オートクチュールのドレスのような、上質なシルクの感触だ。

しかし晩餐会に招かれる際に纏うドレスと同様の素材であっても、これはあくまで日本の〝絹〟であり、ヨーロッパの〝シルク〟とは別物だ。ソフィアの目の前にあるのは、異国文化の産物であり、自分のものではない。これは、今までのソフィアの持つ思想からすれば、明らかにおかしな感覚だった。グローバリスト、つまり国境を否定する者ならば、この着物もパーティ・ドレスも、同じ地球の文化として、自分の文化として、同等に受け入れられる筈なのだ。しかしソフィアには決してそうは思えない。

この着物は明確に、日本のものだ。さくら子のものであり、ソフィアの母、京香のものである。しかし、ギリシア人であるソフィアのものではない……。

ソフィアは今こそ、はっきりと自覚した。わたしはギリシア人だった。これまでわたしが抱えてきた、あまたの迷いや苛立ちは、全てギリシア人としての苦悩だったのだ。

第六章

血脈へのリベンジ

桜の蕾がその硬さを少しく和らげ始めた、三月の中ごろ、日本列島では総選挙の幕が切って落とされようとしていた。

しかし、その公示日の直前。花園が数枚の紙を手にし、息せき切って橘ビルに走り込んできた。

「賀茂さん、これ、酷いのよ」

花園は航太郎がいないと思い話し始めたのだが、航太郎は偶然、街頭演説の開始時間が遅れ、しばしの休憩をとるため事務所内にいたのだ。賀茂と六角が目配せする中、航太郎が花園の前に進み出た。

「僕に見せてください」

しわくちゃになった紙を航太郎が受け取ると、そこには、航太郎への酷い批判の文句が羅列されていた。「世襲、非・庶民、外国かぶれ、スネカジリ」などの文言が目につく。賀茂が航太郎の横からチラシを覗き込み、小さく嘆息した。花園の方はと言えば、傍目にもはっきり分かるほど落ち込んでいる。

「うちだけじゃないみたいなの。ご近所さんに聞いたんだけど、これと似たようなのが、もうほとんど毎日、ポストに投げ込まれてるって言うの」

肩を落として語る花園の証言を受け、六角は猛然と立ち上がり、

「俺が行ってくる！　全部さらって、集めてきてやるよ！　だから航太郎君は、気にすんじゃないぜ、こんな外道なことしやがって！」
と息まき、脱いであった上着を掴むと、今にも事務所から走り出ようとした。しかし航太郎は慌てて六角を引き留める。
「ありがとう、でもここに書いてあることは事実だよ。僕は世襲の七光りで、バイト経験もない、ボンボンの若造。その通りです」
と航太郎は語り、すぐに立ち上がった。
「でも、僕はそれだけで終わる男じゃないさ。公衆の面前で、あんな恥ずかしい挫折を、あれほどの失態を演じたんだ。お蔭で僕は強くなった。だから、こんなの、放っておけばいいんだ」
航太郎が事務所を出た直後、その場に姿を現したソフィアは、普段とは打って変わった重たい空気に驚かされた。

いわゆる総選挙とは、正しくは衆議院議員選挙を指す。小選挙区から300人、さらに日本全国を11のブロックに分割した比例代表制から180人の衆議院議員を選出するため、14日間の選挙運動期間の末、投開票が行われる。これが総選挙である。

選挙の公示日より前において、あらゆる候補者は「立候補予定者」である。航太郎は東京十八区の政友党選挙支部長、つまり候補者なのは自明だが、街頭演説などで「私が候補者です」と言ってしまうと、なんと公職選挙法違反となる。公職選挙法では選挙公示日前の「選挙運動」については、「事前運動」であるとして、厳しく禁じているからだ。そこで、選挙公示日前の街頭演説は、あくまで「立候補予定者の政治運動である」という建前に落ち着いている。「政治運動」であるなら、公示日前でも公示日後でも可能なのだ。

建前では二週間となってはいるものの、実際の選挙運動とは、公示日以降の活動だけではなく、そこに至るまでの地道な努力すべてを含んでいる。もちろん落選議員にとっては、選挙運動は敗北した翌日から始まるのである。特に厳しいことに、二度落選した候補者には、それ以降、政友党は公認を出さないことになっている。つまり航太郎にとって、次の総選挙はラスト・チャンスなのだ。

航太郎は落選のショックから無理矢理立ち上がって以降、これまで持っていたグローバリズム的思考をとりあえず自身の内から排除し、国家観について本を読み漁った。読書を好んで育ってきた航太郎のこと、それは当然の成り行きだった。庭師と警備員以外は人っ子一人いなくなった橘家邸内、それも書斎に陣取り、日々あまたの本を読み、勉学を重ねた。落選から数か月経った頃、フリー・ジャーナリストを名乗る一之宮雪乃と、カメラマンの

神庭亮一から取材のオファーがあり、航太郎は快諾した。ある種世間から見捨てられたように感じていた航太郎にとって、有難い申し出だったからである。いざ会ってみると、ジャーナリストにしてはスタイリッシュ過ぎる二人の雰囲気に驚かされた。が、もっと驚いたことには、紀之彦の日記を読んで以降の航太郎の中に芽生えていた疑問、つまり「国家とは何ぞや、祖国を守る、国力を上げる、国家経済を成長させるとは何なのか」、そういった疑問に、雪乃が強く共鳴してくれたのだ。

雪乃は航太郎に、自分の大学時代の恩師、宍戸を紹介してくれた。宍戸は政治学と経済学の両方に造詣の深い人物である。彼は現在リベラルアーツ大学に身を置き、政治学について教鞭を執りながら、その一方で国家経済のあり方に関して論評を重ね、著作も多数発表していた。航太郎はときおり宍戸を訪ねては、まるで講義を受けるように、彼の穏やかな声音に耳を傾けた。

また雪乃は、こちらも国家経済に造詣の深い政治家、朝生一郎についても言及した。橘家の嫡男である航太郎は当然、朝生家とも長年の付き合いがあり、疑似的な親族の如き関係にあった。落選の直後、朝生から厳しい叱責を受けたのは、未だに記憶に新しい。その朝生と雪乃の間に面識があったことに、航太郎はまたしても驚かされた。

そして雪乃と出会ってから半年ほどの月日が経過した頃、航太郎は橘家から外界へ踏み

出した。航太郎は、まさに、様変わりしていた。紀之彦の教えを受け継ぎ、国のために働こうと決意した政治家志望の若者、橘航太郎の再挑戦への第一歩だった。

それ以来、航太郎は、本郷大やオールストン時代には想像もしていなかったような、地道な活動に専念してきたのだ。もう既に通算1000日近くなるが、吉祥寺や三鷹、武蔵小金井、そして府中の各駅に立ち、メガホンで自分の政治信条を訴えた。経済政策、社会保障政策、安全保障政策について、持論を繰り返し語り続けた。

「皆さんが心配している年金。現在の日本が抱える年金問題とは、主に、国民年金の不払い率が上昇していること、そして年金の運用成績が落ち込んでいること、この二点です。実は、この二つの問題は、国が経済成長することにより解決が可能なのです。

国民年金の不払い率は、経済成長率とリンクしています。つまり、国民経済が成長せず、国民の所得が伸び悩むと、年金保険料を払えない人が増える、という構図です。しかし日本は現在、経済成長路線に戻りつつあります。したがって、国民年金の不払い率は減少してきているのです。マスコミに頻繁に流れる、年金破綻の報道に騙されないで下さい。経済成長すれば、いずれ年金不払いの問題など消え去ってしまうことでしょう。

また現在、経済成長率が高まったことで、年金の運用成績も改善に向かっています。年金とは、国民から預かった保険料を、株式などの金融資産に運用することで、支払いの原

資を増やしていくものなのです。経済成長を継続的に達成すれば、年金の運用成績は上がっていきます。

安全保障の危機も、経済に起因している部分も大きいのです。安全保障を強化するには当然お金が必要であり、そのお金とは、国民が所得から支払う税金が財源になります。国民の所得を増やす経済成長を達成し、財源を豊かにしない限り、安全保障の確立も実現できないのです

かつて、田中角栄は『福祉は天から降ってこない』という名言を残しました。日本には未だに、成長と福祉充実を二者択一で考える人が少なくありませんが、これは誤りです。福祉は天から降ってくるものではなく、外国から与えられるものでもありません。日本国民自身が経済を発展させ、その経済力によって福祉充実の財源を豊かにするしか方法が無いのです。

日本国民が経済成長を否定すると、日本経済は成長しません。経済成長に最も必要なものは、『成長しよう』という国民の意志なのです。皆さん、私は一日本人として国政に携わり、皆さんと共に経済を成長させる、その一助になりたいのです」

過去の日本において、国家全体の経済成長という大きなビジョンを掲げた政治が行われた時期、ミクロレベルでの国民の生活も改善された。逆に、国民の生活の改善といったミ

クロレベルの政策を訴えた政党が政権を握ると、国家の経済成長は達成されず、結果的に国民生活も貧困化を辿った。こういった歴史の経緯を、航太郎はよく理解していたのだ。
しかし忌々しいことには、この事実を航太郎に教えてくれたのは、あの東田であった。
経済政策について地道な演説を行い始めた航太郎に、朝生が東田を紹介してくれたのである。朝生の声掛けを有難く受け取った航太郎は、期待に胸を膨らませ、官邸を訪ねた。
…そこで出会った〝東田剛という男そのもの〟についての率直な感想はひとまず置いておき、その経済政策に関しての解説には、航太郎は大きな感銘を受けたのだ。
東田の講義によって更なる進化を遂げた航太郎は、その後も、例え十人程度の小さな集まりであっても、謙虚に持論を語り続けた。
「日本が少子高齢化で成長できない、という考えは、根拠が曖昧です。デマ、と言っても差支えないと思います。現に、世界には日本以上に人口が減少していっている国が20以上ありますが、それらの国の経済状況が一様に悪化しているのか、と言うと、必ずしもそうではありません。この二十年以上、日本経済が成長しなかったのは、日本国民自身が、国の成長を信じられなかったためです」
当初は「こんな土着的な会で、国の経済成長について語るとは」と呆れられたものだが、繰り返し訴えるうちに、有権者たちも徐々に熱心に話を聞いてくれるようになった。霧島

内閣の政策によって国内の景気が上昇しつつあったことも功を奏したのだろうが、それ以上に、懸命に訴え続ける航太郎の姿に、単純に好意を持つ人が増えていったのかも知れない。

この頃になると時折、テレビ局から出演依頼が来ることもあったが、航太郎は全て断った。今更、浮ついたことをする気は毛頭ない。地元の有権者一人一人と接触し、会話を交わし、意見を聞き、自分に何が出来るか考えたい。相変わらず地元のイベントや祭りには欠かさず顔を出し、頭を下げながら「日本国家の発展と、皆さんの豊かな生活のために、お手伝いをさせて下さい」と訴え続けた。

そして前回の総選挙から三年近くの歳月を経た、201X年、三月、春。

国会の議場、中央部に座った衆議院議長が、手元の詔書の写しを読み上げている。衆議院の解散は、今上陛下による国事行為である。内閣が解散を閣議決定した後に、陛下から直々(じきじき)に、詔書への御署名と御璽(ぎょじ)の押捺(おうなつ)を賜るのだ。

「ただ今、内閣総理大臣から、詔書が発せられた旨、伝えられましたので朗読致します」

衆議院議長が立ち上がり、一礼する。

「日本国憲法、第七条により、衆議院を解散する」

「万歳！」

総立ちの衆議院議員たちが万歳三唱を行い、割れんばかりの拍手を送った。

解散から十日後、ついに第四十八回総選挙が公示された。航太郎の陣営でも華々しく出陣式が執り行われ、選挙活動の始まりを告げようとしている。

「それでは、これより、東京第十八区、政友党公認候補、橘航太郎の出陣式を始めさせて頂きます。えー、私は、本出陣式の司会を務めます、後援会会長の六角です！　お集まりの皆さん、宜しくお願いします！　毎度の六角興業の六角です、いや、恐縮です！」

顔見知りばかりの出席者から、笑いと拍手が起こる。

「それでは開会のお言葉は、支援者のひとりである賀茂様から、お願いします！」

いつも通りテンション高く六角が紹介すると、紳士然とした賀茂は静かにマイクを握り、一礼した。

「ただ今ご紹介に預かりました、賀茂と申します、……」

その後も次々に支援者による挨拶が行われ、出陣式は滞りなく進んでいく。しかし、既に政友党内からも今回は〝落選の太鼓判〟を押されている航太郎の出陣式には、党の有力者の顔は見当たらなかった。

「それでは、ここで橘候補の当選を祈念いたしまして、ダルマに目を入れさせていただき

ます。橘候補、お願いいたします」
後援会の若手、と言っても既に40代の二人の男性が、巨大な達磨を抱え、壇上に設置した。航太郎は、筆ペンで左目に大きく墨を入れる。歓声と拍手とが起きた。
「ただ今、ダルマに目が入りましたよ！　皆さん、もう一回、拍手！　拍手をお願いします！」
二度目の拍手の中、航太郎は観衆に向かって丁寧に頭を下げている。何故〝赤いマスコット〟に目を描き入れるのか？　ソフィアは一瞬吹き出しそうになったが、周囲を見ればみな大真面目の様子である。慌てて、笑いを収めた。
「それでは、橘航太郎候補の必勝を期して、ガンバロー三唱といきましょう！　皆様方、ご起立下さい！」
参列者が一斉に立ち上がった。またもソフィアにはよく分からないセレモニーだが、とりあえず周囲に合わせて立ち上がる。
「ガンバロー三唱のご発声を、えーと、……あ、私だ。えー、後援会会長の六角、やります！　皆様、腰に手を当て、ご唱和くださいよ」
六角は勢いよく壇上に上がり、さらにマイクを強く握りしめた。額には、中央に日の丸の描かれたハチマキが、目立って巻かれている。

「それでは、皆さん。僭越ながら、六角興業の六角が、ガンバロー三唱の発声をさせて頂きます！　私たちが応援する航太郎君は、まあ体力が有り余った若者ですよ。〝とうが立った〟皆さんも、あ、いや、とにかくね、候補に負けないよう、元気いっぱいでお願いしますよ！」

六角は左手を腰に当て、右手のこぶしを握りしめると、支援者もそれに倣う。

「西東京の宝！　橘航太郎君の当選を願い、ガンバロー！」

「ガンバロー！！」

「ガンバロー！！」

「どうも、どうも、ありがとうございました!!」

来場者たちの拍手も収まると、事務所の目の前に選挙カーが現れた。それを確認し、六角が再び声を上げる。

「皆さん、ご多忙の中、長時間にわたり橘航太郎候補の出陣式にご出席いただきまして、本当にありがとうございました！　航太郎君もいよいよ、出陣の時を迎えました。橘航太郎、今から選挙戦の最前線に突撃ですよ！　皆さん、盛大な拍手でもって、航太郎君を送り出してください！」

タスキをかけた航太郎は一礼し、人々の真ん中を通り、車に向かった。選挙カーの助手

席に乗り出し、白手袋に包まれた左手を窓から差し出す。
「それではみなさん、行って参ります」
「航太郎君！　がんばれ！」
「今度こそ勝ってよ！」
温かい声援をほうぼうから浴び、航太郎は窓から出した左手を力いっぱい振った。ウグイス嬢の声が、辺りに響き渡る。
「皆様、お騒がせ致しております。政友党公認候補、橘航太郎でございます」
選挙カーが動き出した。
日本人ではないソフィアは、航太郎の選挙活動を手伝うことはできない。選挙戦を進めていくには、人手はどれだけあっても足りはしないが、ソフィアがその一助となることは不可能なのだ。
ソフィアはどことなくぼんやりとしたまま、遠ざかる航太郎の姿を見送った。選挙カーに乗り、大勢の支援者とスタッフに囲まれた航太郎は、これまでソフィアが軽口をたたいてきた航太郎とは別人のように、遠い存在に思われた。
今回の総選挙においては当初から、政友党は厳しい戦いを強いられると予想されていた。

前回、前々回と大勝を重ねたため、極端なことを嫌う日本人の国民性から、揺り戻しがあると考えられていたのである。

また、霧島内閣のデフレ対策により国の経済成長自体は達成していたが、やはり国民全体に恩恵を行き渡らせることは不可能だった。好況を呈する建設業界はともかく、その他の産業への波及効果は未だ小さい。特にグローバル市場での戦いを強いられている輸出企業については、国内の人件費を引き上げることは困難であった。

それを受け、野党側は、「政友党の政策は、土建業など一部の既得権益を利しているに過ぎない。現実に、家電や自動車など日本の主力産業の給与所得は、ほとんど増加していない」と、政友党の「公共投資傾斜政策」を批判することを続けた。無論、野党の有力支援者が、家電や自動車といった大産業の労組であることも無関係ではない。

さらに、家電や自動車といったグローバルに展開する大規模製造業の経営者たちまでもが「政友党のインフレ政策は、内需中心で成長している企業しか潤さない」と批判の声を上げ始めた。なぜなら、国内のインフレ率がプラスに戻った結果、各企業に国民から給与引き上げの圧力がかけられているからである。従業員の給与を引き上げると、当然ながら企業の利益は減る、しかしだからと言ってこれらの企業が製品価格を上げれば、他国企業に敗北してしまう。つまり、グローバル依存度が高い企業にとって、霧島内閣のインフレ

政策は、利益縮小策と捉えられてしまった。利益が減れば、株主への配当金が減り、外国人を含めた株主たちから経営者へ圧力がかけられる。グローバル企業の経営者たちは、株主と政府の政策との間で板挟みとなっている状態だ。

加えて、政友党が、製造業などの派遣労働者雇用を禁止したことも響いている。企業は派遣社員を正規社員に切り替えざるを得ず、これまたコストアップ要因となってしまった。

もちろん国民経済が順調に成長し、国民の個々の所得も増加傾向にあることから、家電や自動車の国内での売り上げは伸び始めている。しかし、グローバル製造業の経営者からすれば、人件費アップの圧力をカバーできるほどではないと言う。

つまり現在の霧島政友党は、「デフレ対策（インフレ政策）の効果が到達する時期の、産業ごとに避けられないタイムラグ」と、「グローバル市場で競争する企業の持つ、人件費上昇の圧力への嫌悪」という二つの問題により苦しめられているのだ。このタイムラグが、一般庶民の目には格差拡大と映るのも、問題の過大評価に拍車をかけている。

野党はこぞって「政友党の〝格差拡大〟政策を許すな！」と叫び、その先頭に立っているのが、他でもない航太郎の対抗馬、菅原幸也候補である。東京十八区において、航太郎は菅原ら野党陣営の「格差社会反対」という、極めて分かりやすいメッセージと戦わなければならないのだ。

選挙カーは、選挙区内の主要な駅、繁華街などを巡回する。選挙スタッフは航太郎のスケジュールに合わせ、地元の警察に遊説の許可を取り、自家用車で先行して場所を確保した上、周辺の店舗や住宅へ挨拶して回る。

航太郎本人も、朝の7時から夜の20時までのフル稼働だ。街頭でマイクを握り、地元の中小企業を訪ね、地域の集会で演説をさせてもらい、商店街を練り歩き、有権者と握手を交わし、食事は選挙カーの中で手早く済ませる。とにかく「移動する」「喋る」「握手する」という行為をひたすらに繰り返すのだ。

遊説の最中に時折、口汚い文句を浴びせられることもある。それでも航太郎は堪えて、柔和な笑顔を維持したまま演説を続けた。朝から夜まで働き続け、やっと自宅に戻ったとしても、今度は明日以降の遊説のための準備に暇がない。睡眠時間は毎日3〜4時間程度であり、当然、航太郎の体は疲弊し切っていた。しかしひとたびマイクを握れば何故か、体中に再度のやる気が漲(みなぎ)った。

ときどき雪乃が取材に訪れ、神庭が写真を撮る。しかし、その写りの良い写真がマス・メディアに出ることは少なかった。新聞や雑誌の紙面に航太郎の名が出ることもある。しかし大抵の場合それは、「政友党の四世議員候補、橘君」「親の七光りはどこまで続くか？橘家の御曹司(おんぞうし)！」といった、からかい文句の三文記事の中だった。

連日、選挙カーに乗ったウグイス嬢の面々が、「橘航太郎を、宜しくお願いします」と繰りかえし叫ぶ。子供のころから見慣れた光景ではあるが、果たしてこんなことが選挙結果に本当に影響を及ぼすのかどうか、正直なところ航太郎も疑問を持っている。とりあえず、「古参の支援者や、先輩からやれと言われたことは、全てやり尽くす」と自分に言い聞かせてはいるが、持ち前の合理的思考により、もっとまともな選挙活動の方法があるのではないか、とも思うのだ。

そんな中、航太郎は毎朝、事務所からほど近い神社へのお詣りを欠かさなかった。

ある早朝のこと、いつも通り航太郎は本殿前で二礼二拍手一礼をし、心の中で願いを唱えた。帰途に就こうと航太郎が背後を振り返った。と、階段の下には、驚き顔のソフィアがいたのだ。

「うわ。何だ？　いつからいたんだよ？」

航太郎が階段を一足飛びに降りると、ソフィアが興味を隠せない様子で聞いてくる。

「今の、何？」

「必勝祈願だよ。今度こそは負けられないからな」

神社の境内の木々のそこかしこに、小さく、萌黄色の新芽が出ているのが目に入る。

「航太郎が毎朝、家とは違う方向から来るから、わたし、気になってたの。……住宅からこんなに近くに、それも戸外に、お祈りのために集まる場所があるのね。伊勢神宮や明治神宮とかが特別なんだと思ってたわ」
「うん、日本人はあくまで日常的に、気負うことなく、頻繁に神社を訪れる。祈願しなくとも、ただ散歩したり、植物の写真を撮りにきたり。神社は、日本人の生活に自然なものとして根付いているんだろうな」
　航太郎が語ると、暫くソフィアは黙っていたが、やがてぽつりと、
「あんたのお母さん、ずっと帰ってきてないんでしょ」
　と聞いてきた。航太郎は木々の間に見える空を見上げながら、淡々と答える。
「母は生粋（きっすい）のお嬢さん育ちだからね、仕方がないんだ。最初から向いてなかったんだよ。……きっと今までも無理してたんだ、可哀相に」
　すると、ソフィアが意を決したように口にする。
「あんた、ヒボウチュウショウ、されてるんですって?」
　普段とはあまりに異なる声音に驚き、航太郎はソフィアを振り返った。彼女にしては珍しい、酷く悲しげな表情をしている。
「ああ、でもあんなのは、放っておけばいいんだ。過剰に反応することが、奴らをますま

す喜ばせるんだよ」
するとソフィアが、鋭い声を上げた。
「そんなの駄目よ！　あんた、男らしく反論しなさいよ！　そうじゃないと……」
「いや、いいんだよ。っていうか、そんなこと、君にとってはどうでもいいことじゃないか」
この話題にあまり触れられたくない航太郎がそっけなく返すと、ソフィアは泣き出しそうな顔になり、
「……また落ちちゃったら、どうするのよ……!?」
と口にしたのだ。航太郎は驚き、ソフィアの顔を見直す。
枝の間から春の木漏れ日が差し込み、辺りに美しい空間を形作っている。光はソフィアの焦げ茶の髪を透かし、一瞬、それを金色に輝かせた。……まるで本物の天使のようであり、航太郎は目を見張った。

とうとう選挙戦最終日を迎え、吉祥寺駅前での最後の演説に、航太郎は臨んだ。春の夜の未だ冷たい空気が、辺りに満ちている。
首相のさくら子まで駆けつけ、素晴らしい応援演説をしてくれた後、航太郎は選挙カー

の上から、自身の最後の言葉を語り始めた。淡々と進む航太郎の演説だったが、何故か途中から、辛辣な非難の声が掛かりはじめた。
「お前のような若造に、俺たちの貴重な一票を入れるわけがないだろう」
「世襲候補に、国会議員になれる資格があるのか！　最初から有利な立場でスタートするような人間に、一般人の我々の気持ちが分かるのか」
「ビラを読みましたよ！　外車を乗り回し、外国製のオーダー・メイドのスーツを着て、外国製の高級家具を事務所に置いてあるような外国かぶれ、金持ちの人間が、日本の庶民のための政治など、できるんですか⁉」
　明らかな罵声が、連続して聞こえてくる。怒鳴っている男たちは、互いに示し合わせているようにも思われる。もしや、菅原陣営からの回し者だろうだろうか。
「皆さん、私は確かに若造です。父親、祖父、曾祖父と、三代にわたって政治家一家の四代目、世襲候補です。橘航太郎は、甘ったれの七光りのボンボンと言われても仕方がないのかも知れない。
　しかし私は、日本を愛しています。日本は、このままで終わるような、そんな小さな器の国ではないんです。日本は、とてつもないポテンシャルを秘めている、この広い世界でも稀有な国なのです。

私はこれまで、経済と政治について勉学を重ね、日本をより良い方向へ導く方法や政策についても、考えを深めてまいりました。皆さんと共に豊かになるために、この国を成長させるために、一命を賭けたい。ただそのためだけに私は、前回の選挙で皆様から厳しい審判を受けても、それでも恥を忍び、二度目の挑戦をさせて頂いているのです」

穏やかなポーカー・フェイスを崩さぬよう、航太郎は歯を食いしばった。しかしそれでも、次から次へと、罵声は投げつけられる。

「日本を成長させるなど、絵空事を言うな！　少子高齢化で借金大国の日本は、もう衰退していくだけなんだ」

「政友党が、戦後数十年かけて、この日本をダメにしたんじゃないのか」

「お前のようにいい加減な楽観論を振りまく若造よりは、現実的な菅原の方が幾分マシだ」

途切れることのない怒号に、航太郎はマイクを握りしめたまま沈黙した。彼らは、本気で言っているのだろうか。霧島内閣成立後、日本が成長路線への道筋を着実に歩みつつあるのは、世界にも認められた事実であるのだ。にも拘わらず何故彼らは「日本は衰退する」などと叫ぶのか。

航太郎の心の奥底から、ゆっくりと、しかし激しい怒りがわき起こり、じわじわと広がり始めた。

戦後数十年、日本をダメにしてきた元凶とは、彼らではないか。自らの祖国を嘲笑し、貶め、未来を否定する言葉を口にする。日本の敵は、中国でもロシアでも、もちろんアメリカでもなければ、グローバル資本でもない。本当の敵は、〝誇りを失った日本人〟だったのだ。

民族の誇りを持つことを放棄し、国への崇敬の念を完全に失ってしまった日本人。世界最長の皇統を頂く日本という共同体に保護され、世界でもトップレベルの快適な生活を営んできたにも拘わらず、祖国・日本を否定する。それほど日本が嫌ならば、他国へ移住すれば良いのだ。しかし決して国外へ脱出することはなく、日本国籍を失うこともなく、国内で安穏と暮らしながら、しかし口では日本への文句を言い続ける。

こんな連中のために何故、自分が身を粉にして働かなければならないのか。何故、恥を忍んで、総選挙に再チャレンジしなければならないのだ?

かつてない怒りが、航太郎の全身を支配した。同時に全てがバカバカしくなり、これまでは常に最大量にまで充填されていた〝やる気〟が、自身から急速に抜け出ていくのを感じた。……もう、うんざりだ。日本など、選挙など、どうでもよい！　自分はもう呆れかえってしまったのだ。最後に、最後に一度だけ、感情をぶつけさせてもらおう。この三年耐え続け、決して表に出さなかった感情を、全身に充満した怒りを、この醜い人々にぶち

まけてやろう。結果として自分は間違いなく落選するだろうが、もう、それで構わないのだ！

航太郎がそう決意を固めつつあった、まさにその時。

選挙カーの上の航太郎を見つめるソフィアは、不可思議な感覚に捉われていた。わたしは日本など、選挙など、ましてや〝橘航太郎〟など、どうでも良かったのだ。ただ、アテネ大を出た後、友人たちと同様に海外留学をしたいと、そう思っただけだ。そして親に言われるまま、留学先に日本を選び、何となく政治学専攻を選んだだけ。さらに留学中の大学でつまはじきのような経験をしたから、その埋め合わせのために、航太郎の事務所に入り浸っていた。ただ、ただ、寂しかっただけ。しかし今、ソフィアは自分の中の激しい感情に気づいたのだ。

……わたしは航太郎を当選させてやりたい。

こんなにも頑張ってきた航太郎。どれほどバッシングされようと、卑劣な誹謗中傷を受けようとも、耐え忍び、表面上はにこやかに穏やかに振る舞った。悔しい感情を抑え込み、もしかしたら男泣きに泣いた夜、荒れた夜もあったかもしれない。それでも負けじと再挑戦を願い、日々活動してきたのだ。完全に休みを取ったことなど、明治神宮の結婚式の一

日と、伊勢神宮にソフィアを連れていってくれた二日間、合わせて三日間だけだった。何かに追い立てられるように、まるでワーカホリックの病に侵されたように、止まることなしに動き続けたのだ。

思い返してみれば、ソフィアが見てきた航太郎の日々は、悲痛そのものだった。わたしは、そんな航太郎だからこそ、すぐ横で見守り、心のどこかで応援してきたのかもしれない。

ソフィアは強く思った。航太郎を救いたい。数年前の、挫折したあの日から、受けたトラウマから、今こそ航太郎を救ってやりたい……！

とうとう航太郎はマイクを口元に引き寄せ、醜い日本人への怒りを叫びだそうとした、その瞬間。

焦げ茶色の長い髪が、航太郎の前を横切った。群衆の内に航太郎を見守っていたはずのソフィアが、なんと選挙カーの上に登ってきたのだ。手引きしたのは、どうやら、梯子のすぐ下に陣取っている六角と花園、賀茂、御室である。橘事務所でも最若手である30代の好青年、御室が、群衆の中に必死で梯子を守りながら、さくら子同伴のSPとやり合っている。

航太郎やさくら子、雪乃、神庭を含む、その場にいた千名近い人々、全てが唖然とする中、ソフィアはマイクに向かい大声で言い放った。
「あんたたち、いい加減にしなさいよ！」
ソフィアの少し舌っ足らずの声が、周囲一帯に響き渡る。
「あんたたち日本人は、恥ずかしくないの？　こんなに素晴らしく恵まれた国に生まれ、幸せを享受しているくせに、国に対する文句ばかり言って！　『日本はダメだ』と主張している政治家を応援したりして！
わたしの生まれ育ったギリシアは、昔は他国から支配されたり、今は経済的にひっ迫してたり、散々よ！　でもわたしは、ギリシアが大好き！　ギリシアをバカにする人がいたら、おもいっきり怒ってやるわよ！
だから、だから、こんなスゴイ国、日本のために頑張っている航太郎を応援しないなんて、あんたたち、バカじゃないの!?」
一気にまくしたてたソフィアに、先ほどから航太郎に執拗に罵声を浴びせていた中年男性から、
「お前、誰だ！」
と野次が飛ぶ。ソフィアはその方角を振り返ると、大きく叫んだ。

「わたしは、航太郎の、恋人よ！！！」
度肝を抜かれた航太郎は、慌ててソフィアを制止する。ところが、ソフィアは必死で抵抗し、手すりにかじりつきながら続けたのだ。
「あのね、一応言っておくけど、わたしが今ここで喋ってるのは、選挙運動ってヤツじゃないから。正直、航太郎みたいな軟弱男、当選してもしなくても、どっちでもいいし！あんたたちも別に、航太郎に投票しなくていいんだからね！
でも選挙とは関係なしということで、言ってるのよ。あんたたち日本人は、自分たちがどれだけ素晴らしい国に生まれたのか、よーっく自覚したほうがいいわ。歴史や伝統、文化に恵まれ、治安がめちゃめちゃ良くて、経済成長してて。って、こんなにすごい国に住んでいるのに、自分たちの祖国に文句ばかり言ってるヤツって、何なの？
それに比べて、航太郎はちゃんと『日本は素晴らしい、この国を守りたい』って、そう言ってるのよ！　その航太郎を攻撃してるやつらって最悪じゃないの！　誹謗中傷のデマを流して、恫喝（どうかつ）するような輩（やから）を野放しにしておくなんて、あんたたちの責任も大きいのよ！
だってあんたたちは、ただ傍観してるだけで、その悪質な奴らに対して何にもしなかったんでしょ？　航太郎が可哀相だわ……航太郎はずっと、たったひとりで、ひとりぼっちで、がむしゃらに戦ってんのよ。だから、だから……」

ソフィアは思いっきり大きく口を開き、叫ぶ。
「……だから、わたしは、航太郎を救ってやりたいと思うのよ！！」
言いたいことを言いつくし、ソフィアはマイクを放り投げ、そのまま街宣カーを降りてしまった。航太郎は、慌ててマイクを受け取るが、しばし固まったままだった。ふと気づくと、先ほどまで自分を支配していた怒りの感情が、いつの間にやら綺麗さっぱり消えてしまっている。
「えー……」
マイクを握り直すと、改めて航太郎は、吉祥寺駅前の大群衆に向き直った。
「ええ、彼女が言った通りです……皆さん、私に投票してくれなくても一向に構いません。ただ、これだけは確認しておきたい。私たちが住んでいる、この日本という国は、世界屈指の豊かさを、輝かしき歴史と伝統、文化を誇る国です。それを何故、日本人であるのにも拘わらず忘れている人がいるのか、私にはその理由が理解し難い。
私は三年前、手痛い経験をしました。周囲に持ち上げられるままに選挙に立候補し、惨敗した。私にとって人生初の挫折でした。それまでの私は、有名進学校から日本の最難関大学に現役合格し、アメリカのトップ大学院で修士を取りました。しゃれたものが好きで、高級な服、高級な車、高級な食事……何もかも自分は秀でていると、そう信じて疑いませ

んでした。しかし、負けた。負けたのは確かにつらかった、しかし何よりも辛かったのは、負けた自分を多くの人が見捨てたことです！　それこそ蜘蛛(くも)の子を散らすように、私の周りから人が、物が、去って行ったことです……！

皆さん、私はかつて、多くを持てる者でした。しかし蓋を開けてみれば、それらは盤石(ばんじゃく)と言うには程遠く、風が吹けば飛ぶような砂上の楼閣に過ぎなかった。恥ずかしいことですが、今回の選挙を手伝ってくれた人々の中に、私の親族、血族はおりません。皆、私を恥とし、選挙に再挑戦する資格などないと、去っていきました。それも当然です、三年前の私は本当にバカだったのだから。曾祖父、祖父、父と、橘家の男たちが築き上げた国民の皆様からの信頼を、私はものの見事に打ち砕いてしまったのだから。

家族も親族も友人も失った私は、本当の意味で孤独でした。そんな中、私に手を差し伸べてくれたのは、名だたる有力者が肩を並べる橘家ではなく、現在はエリートばかりの本郷大やオールストン時代の友人たちでもなかった。貧相な負け犬の私に手を差し伸べてくれたのは、私が事務所を構えている、吉祥寺商店街の人々だった！　面白いじゃないですか、全てにおいて自分が凄いと思い込み、そう言い張って負けたような若造、呆れ果てて捨てておいても良かったんだ……でも、そうじゃなかった。まだ航太郎は子供なんだと、だから育ててやろうよ、と、彼らはそう思ってくれたんだ。その彼らに支えられ、僕は思っ

たんです、ああ、これが古き良き時代の、日本人ならではの他者との関わり方だったたんじゃないか、って。
外国かぶれだった私を最後に助けてくれたのは、日本の、それも当たり前の、普通の人々だった。だからこそ私は、日本人に恩返しがしたい。前回の立候補は、確かに世襲議員一家のおぼっちゃんの、甘えた立候補だったかも知れない。でも今回は違う。世襲だから立候補した、という訳ではないのです。私が、私が今回の選挙に立候補したのは、日本を愛する日本人に恩返しがしたいと思ったからです。曾祖父や祖父、父がしてきたように、彼らの背中に見習い、わが身を日本の為に使いたい、と。
私はこれからも精一杯、日本を守っていきたいと思います。そして皆さんにも、私と同じように感じていただけたら嬉しい。
……何の経験もない、バイトをしたこともないほど情けない、私の選挙戦にお付き合いをいただき、ありがとうございました。感謝の言葉しかありません」
一礼して顔を上げた航太郎の中に、すがすがしい気持ちが満ちていた。観衆は静まり返っている。
もう、いいのだ。ここまでやりきったのだから、当選しようとしまいと、自分は自分の人生を誇って生きていける。下馬評通りに落選したなら、自分は泥臭い仕事を喜んでやろ

う。何のキャリアも経験も無い自分が、すぐに正社員になれるはずもない。だから最初はバイトで修行をさせてもらうのだ。昔の自分なら、そんなカッコ悪いことは絶対にしない、と突っぱねていただろう。でも今はそうは思わない。自分は、甘ちゃんだった。だからこそ、すぐに〝議員先生〟になるのではなく、挫折を味わい、地道な苦労を重ねることに意義がある。

もう、選挙の当落など、どうでもいいのだ。航太郎は晴れやかな笑顔を浮かべ、選挙カーから降りた。すると。

聴衆から小さな拍手が起きた。始めは遠慮がちだったそれは、徐々に重なり合い音量を増し、拍手と共に上げられた声援も、最終的にはまさに大喝采となった。航太郎は大いに面食らい、周囲を見渡した。人々の顔が、生身の人間一人一人の温かい顔が、航太郎の視界に飛び込んできた。

桜の季節である。事務所の前にある寺の境内には、樹齢数十年と思しき桜の大木が植わっており、今日がまさに満開だ。ほの白い花弁が舞い落ちる中、航太郎は立っている。

結果的に航太郎は、野党候補を圧倒的な票差で引き離し、衆議院議員に当選した。敵対候補の菅原は、比例復活もできない惨敗、つまり、前回の選挙結果と真逆の結末となった

のだった。
春の空気の中、前回の選挙を思い出す。
今なら、自分が落選した理由がよく分かる。三鷹や吉祥寺の市民たちは、菅原幸也と橘航太郎という二人の話を聞き、結局のところ、どちらにも共感することはなかった。最終的に、どちらも同じならせめて政治経験が長い方に、という判断がなされたに過ぎない。航太郎に投票しないという選択を、有権者たちはしたのである。
自分で所得を稼いだ経験が全くない若造が、現実の社会を全く知らない若造が、言葉の響きだけは良い空虚なフレーズを連呼していたのが、前回の自分の選挙運動だ。社会人として日夜働き続けている有権者たちが、こんな自分に投票すると思う方がおかしいのだ。
事務所前の大きな駐車場に歓呼の声が響く中、一台の黒塗りの車が停まった。人ごみを割って道を作り、威風堂々たる男性が航太郎に近づいてくる。
「航太郎君」
呼びかけられた航太郎は背後を振り向き、そこに立っていた朝生の姿を認めた。そしてその目をしっかりと見返した。三年前のあの日が脳裏にありありと蘇る。自分の恥ずかしい行動も、朝生の厳しい表情も、あの時と寸分たがわぬ様子で脳内に鮮明に再生されている。

航太郎はそこで朝生に、深々と頭を下げた。そして、顔を上げる。
「朝生先生。僕は、先生のお言葉を常に心に留め、この数年を過ごしました。……自分は、愚かな子供だった……今は、そう、気づきました」
朝生はここで手を上げ、航太郎の独白を遮った。そして航太郎の手を取ると、力強く握りしめたのだ。
「橘君、おめでとう。……君は勝者だよ。しかし、それは選挙戦に勝ったという意味ではない。君が、自分の弱さに打ち勝ったということだ」
朝生の言葉に、航太郎は不覚にも熱いものが込み上げ、たまらなくなった。慌てて、目をしばたく。朝生は続ける。
「人生は、失敗や挫折と常に隣りあわせだ。自分なりに必死に努力をしたというのに、結果が失敗であれば、他人は無責任に、容赦なく責め立てる。これは確かに辛い、しかしそこで終わってしまったら、ただの負け犬だ。その最低最悪のどん底から、いかに自分を立て直し挽回するかに、その人間の価値が現れるのかも知れない。航太郎君……君は今こそ、橘家の嫡男として一人前だ」
航太郎は今度こそ、溢れる涙を抑えることができなかった。ぐいと腕で拭くと、よれよれになったスーツの袖が、更に汚く滲んだ。三年前の航太郎ならば考えられないような、

くたびれた服装、八方破れの外見だ。しかし今は、そんなことはどうでも良いのだ。航太郎は朝生に向き、
「僕は、自分の血を、橘家を守ります」
と宣した。
周囲には当選の熱狂がうずまき、歓声が途切れることなく飛び交った。
桜の花が、辺り一面に舞っている。

人も少なくなった橘航太郎の選挙事務所に、夜遅くの来客があった。
訪れたのは、前回の選挙以来、たびたび航太郎に叱責（しっせき）を重ねてきた、大叔父の頼正である。頼正は事務所に航太郎とソフィアの姿を見つけると、相変わらずの威圧感を伴いながら二人に歩み寄ってきた。大叔父は航太郎に型通りの祝辞を述べた後、なんとソフィアに声掛けした。
「ソフィア君だったね」
「ええ……」
ソフィアは委縮したように頼正に向き合った。すると意外なことに、頼正はそのいかめしい雰囲気に不似合なほど、優しげな声を発したのだ。

「航太郎を支えてくれたそうで、礼を言うよ。……型破りだが、君みたいに夫を支える妻もいても良いのかも知れない。ただ、日本に嫁ぐならば、これはなかなか許されるものではないと知っておきたまえ。個性的な独自の道やスタイルは、必ず批判の対象となる。礼儀礼節を守るということは、そういった無用のバッシングを避け、傷つくのを避けるための知恵でもあるんだ。その知恵を活用しない以上、君たちの進む道は、いばらの道になりやすいことを覚悟する必要がある」
ここで頼正は少し表情を崩した。
「とはいえ、君たちは頑張った。自分たちを誇りなさい」
驚きすぎたため咄嗟(とっさ)に言葉も出てこなかった航太郎が、
「ありがとう、ございい、ます」
と、やっと声を絞り出した。
「まあ私としては、公衆の面前であのような恋人宣言をする女性は、ご免こうむりたいがね……」
頼正は苦笑した。航太郎は、あの最後の演説を、大叔父もどこかで聞いてくれていたことに気づいた。深い感謝の念が湧き起こり、航太郎は生まれて初めて、この大叔父に心からの笑顔を見せた。

伝えるべきことを伝えると頼正はすぐに事務所を後にし、その後を追うように、六角や花園、賀茂、御室など、その他の支援者も次々に帰途に就いた。そして、とうとう他の誰もがいなくなっても、航太郎とソフィアは事務所の椅子に並んで座り続けた。

　壁掛け時計が夜の12時を告げ終わり、事務所内には長い沈黙が訪れていた。ソフィアが居心地悪そうに立ち上がろうとした時、航太郎がやっと口を開いた。

「ありがとう、ソフィア。ずっと僕は自分の血を誇れなかったんだ。君のお蔭で、サラブレッドとか二世三世とか親の七光りとか、そういう揶揄（やゆ）から抜け出せた。でも考えてみたら自分が自分を誇れてないんだから、他人が僕をバカにしたのも当然だ」

　振り返ったソフィアの目を見つめ、航太郎は続ける。

「書斎の壁に、祖父の手による書が掲げられているんだ。書いてある言葉は『**人人悉道器**（にんにんことごとくどうきなり）』」

「何それ？　どういう意味？」

　ソフィアが怪訝（けげん）な表情を浮かべる。

「禅語のひとつなんだけど、……簡単に言えば、『どんな人間も、何者かになれる可能性を持っている』って意味なんだ。前回の選挙で負けるまで、僕はこの言葉の由来さえ調べたことが無かった」

航太郎は、気持ちよさそうに伸びをした後、ソフィアに穏やかな微笑を向けた。
「ソフィア、負け犬根性でふてくされてた僕に、祖父が話しかけてたみたいな言葉じゃないか？　あの日の夕方、あの書斎でさ。あの時は薄暗い夕暮れだったけど、今は違う。やっと、長かった夜が明けたんだ。三年間の、長い、暗い夜が」
ソフィアは驚いた。何故なら航太郎の表情が、これまで一度も見たことがないほどに、穏やかで優しい顔つきだったからである。あまりの違いに、ソフィアはどぎまぎし、動悸すら早くなっていることに気づいた。
そんなソフィアの様子を知ってか知らずか、航太郎が急に話題を変えた。
「それで、さ。最後の演説のときに、君が言ってたことだけど」
「……何よ」
ソフィアは不覚にも頬が紅潮し、声までかすれてしまった。覚悟を決めたように、航太郎が口を開く。
「恋人とか、なん……」
航太郎が言い終わらないうちに、ソフィアはいきなり立ち上がると、なんと、コップの水を彼にぶちまけたのだ。
「あれは出まかせだってば！　あんた、バカじゃないの！」

大股で歩き去り、ソフィアは凄い速さでドアの向こうに姿を消してしまった。後に残された航太郎はと言えば、髪から冷水の雫を無限に垂らしながら、

「ほんっとに、何なんだよ!?」

と、抗議の声を上げたのも無理はない……。

第七章

僕の下へ舞い降りた天使は

ゴールデン・ウイークも過ぎ去り、日本上空の大気が今年も入梅の準備に入ろうとする五月下旬。晴天の合間に、走り梅雨の空模様が少しずつ織り込まれていく。去年の寂しい思い出のせいもあり、梅雨がイヤでしょうがないソフィアは、選挙も終わったというのに未だに航太郎の周辺に纏わりついていた。かつての選挙事務所は、現在は橘航太郎議員の地元事務所として使用されている。勿論、衆議院議員会館内の事務所が、現在の航太郎のメインの事務所である。議員会館に入り浸ることは叶わないソフィアであるから、当然、永田町ではなく吉祥寺の方に通い詰めているのだ。

しかし、これまでと変わったことが幾つかある。ソフィアが今期は大学に時折顔を出しているらしいことと、彼女が吉祥寺の事務所だけでなく、橘家の邸宅にも遊びに来ているという点だ。大学にはどうやら、宍戸の研究室にときどき話を聞きに行くだけのようだが、橘家の豪邸には、ソフィアは実に頻繁に訪れる。何が楽しいのか、クラシカルな造りの書斎と、広い庭園がソフィアのお気に入りの様子である。

ソフィアにとって橘家はもはや勝手知ったる第二の自宅だ。航太郎が知らぬうちに、警備員や庭師とも仲良しになっていたらしい。ソフィアは航太郎が不在でも、平気で書斎でくつろいでいるのである。花園も未だに手製の和菓子や、割烹の料理人が作ったちらし寿司やらを差し入れしたり、ときには六角や賀茂まで応接間でお茶を飲んでいる始末だ。そ

の他にも支援者が入れ替わり立ち代り橘家の応接間と書斎を訪れ、本当の家族は住まないのに、「おかえり」という台詞と共に航太郎の帰宅を喜ぶ面々が常にいるという、不可思議な状態になっているのだ。

この日もソフィアが書斎の椅子に座り、日本神話の本のページを繰りながら、時折顔を上げては窓外の雨に濡れた庭を眺めていると、航太郎が予定より幾分早く帰宅した。しかも今日の航太郎は、心が浮き立つような話を土産に携えてきたのだ。

何と近々、日本希臘友好協会の招待により、衆議院議員となった橘航太郎はギリシア政府からの招待で、アテネを訪れることになったと言うのだ。現在のギリシア経済の諸問題を解決するために、ギリシア政府は、先般より経済成長路線に戻りつつある日本からの助言を求めている。そこで霧島内閣の経済政策断行の立役者である東田や、若手ながらやはり経済通である航太郎に、白羽の矢が立ったのだ。

事の発端は、総選挙前、ギリシアの現首相エミリオス・ペイディアスが来日した際に、霧島首相に今後のギリシア経済について相談を持ちかけたことにある。その会談の中、さくら子は東田ら秘書官と相談したうえで、ペイディアスに対し、「ギリシア国内で製造業の興隆を」と力説したのだ。

「製造業、ですか?」

ペイディアスは現在のギリシア経済の苦境を打破するために、各国の首脳に相談を持ちかけることが少なくない。それに対する反応は、「エーゲ海の島々やアクロポリスなど、多数の観光資源を持つギリシアは、観光業に更に注力すべき」「かつてのように、地政学的優位性を活用した海運業を興してはどうか」といった助言を受けるのが一般的であった。製造業の勃興を、などと提案されたのは、今回のさくら子が初めてだ。当然、ペイディアスは大いに驚かされた。

「特に、自動車産業はいかがかしら。ギリシアは鉄道網が未だ十二分に整備されているとは言えず、完全な自動車社会だと聞きます。また、国民は耐久消費財への購買意欲が大変高いとの調査結果も拝見しました。ギリシア国内に限っても、〝国産車〟と言うものに対して、十分な需要があるのではないでしょうか」

「確かに一理ありますね。しかし国内に自動車産業をあらたに興すと言っても、これだけの大事業、とても一朝一夕には……」

「もちろん起業に関しては、やはり貴国の並々ならぬご尽力が必要かと存じますわ。しかし、その努力は、報われる種類のものではないでしょうか？　例えば、今日わたくしは、ペイディアス首相と友人になりました。わたくしは、いち友人として、あなたに協力したいと考えておりますわ。そして我が国の民もおそらく、日本に対して良い印象を持って歩

み寄ってくる国とは、協力し合いたいと考えていると存じます。
わたくしは常々誇りに感じていることですが、日本は、歴史ある自動車メーカーを多数有しています。当然それらの企業は、卓越した技術と充分な経験を持ち併せているのです。日希両国で協力し、『ギリシアの国民車を作る』という夢を共有できるのは、素敵なことではありませんか？
荒唐無稽（こうとうむけい）な夢ではなく、利益を生み出す可能性のある、実現可能な夢を持つ。それだけでも、ギリシアの復活に大きく寄与するはずです。国民には、未来に向かって歩いていくための〝希望〟が必要なのですから」
「ありがたいお申し出です……！」
ペイディアスは、さくら子の揮（ふる）った熱弁に感動すら覚えた。
自動車産業とは、裾野が大きく拡がる事業のひとつだ。最初は日本から輸入した資本財の組み立てから始めざるを得ないが、いずれは自国の資本材メーカーも育っていくだろう。
またギリシアで国産自動車産業が興隆すれば、高学歴の若者の就職先が公務員しかないという、異様な状況からも脱却できる。
「おっしゃる通り、かけてみる価値はあります。時間はかかるかも知れませんが、いずれは自動車製造業のみでなく、多種多様な製造業を国内に作れるよう、一度検討してみたい

と思います。……私はギリシアを、過去の歴史においてそうであったように、輝かしい国に戻したいのです。ありがとう、霧島首相」

現在ユーロを離脱しているギリシアは、極端に安い為替レートという武器を持っている。また、ユーロ離脱と同時に、イギリスに倣いEUからも距離を置き始めたため、関税という国家の主権を活用することによって、外国製品から自国市場を保護することもできる状態にある。つまり、ギリシア国民車の実現は、決して妄想ではないのである。最初に必要な技術とノウハウさえ、もたらされるのであれば。

帰国したペイディアスは早速、自国の製造業の現状を視察してもらうために、日本の政権与党内の人間を招待してよこしたのだ。総選挙で勝利し、続投となった霧島内閣としても、国益保持と国際貢献とを同時に果たせるこの好機を、逃すわけにはいかない。

霧島内閣はこの視察団に、日本の各自動車メーカーの首脳陣はもちろんのこと、経済畑に属する若手政治家の面々も、そのメンバーに加えた。国民経済を根本から解する、期待の政治家、橘航太郎がそこに含まれていたのは、当然と言えば当然のことであった。

「あんた、わたしも連れていきなさいよ！」

ギリシア行を聞かされると、案の定ソフィアは同行したがった。しかし即座に航太郎から、

「公費でそんなこと、できるワケないだろう。これは遊びじゃないんだ、国や世界の利益に貢献する、立派な仕事なんだよ」

と、切り捨てられてしまった。

「だいたい君、里帰りぐらい勝手にしたらいいじゃないか。留学してきてから、未だに一度も帰ってないんだろ？　ギリシアに残してきた家族や友達、恋人が寂しがるよ」

航太郎がにべもなく言い放つと、ソフィアは頬を真っ赤に染めた。

「航太郎なんか、大っ嫌い！」

捨て台詞を吐き、そのまま書斎から走り出て行ってしまう。慌てた六角が、

「ソフィアちゃん！　戻っといで！　この後、花園さんから差し入れが届くよっ」

と呼び止めたが、素早いことにソフィアは、既に廊下にも姿が見当たらないようだ。長椅子に座っていた賀茂は航太郎を見上げ、

「航太郎君も、女性の気持ちを少しは察してあげなきゃね」

と面白そうに言った。航太郎はと言えば、返答に詰まり、こちらも書斎からそそくさと出て行ってしまった。

その二週間後、航太郎は、パリのシャルル・ドゴール空港経由でアテネに降り立った。

かの有名政治家の名を取った、エレフセリオス・ヴェニゼロス・アテネ空港である。羽田を発ってから、乗り継ぎの待ち時間も含め、既に20時間が経過している。
飛行機を降りた航太郎がスーツケースを引きながら入国管理局に向かうと、
「航太郎！」
という呼び声が辺りに響き渡った。なんと入管のゲートの向こうには、仁王立ちして待ち構えるソフィアの姿があったのだ。しかも彼女はベイビー・ブルーのコットンのキャミソールに、デニムのホット・パンツ、頭には大振りの麦わら帽子という、バカンス全開の出で立ちである。はっきり言って、男どもは全員が下心と共に彼女を凝視したのだが、航太郎の全身には変な汗がどっと出た。
しかしソフィアは、そんな微妙な空気もお構いなしに、
「あんた、思ったより遅かったのね。待ちくたびれちゃったわ」
と普通に話しかけてくる。
「なんで、いるんだよ!?」
面食らって声まで裏返ってしまった航太郎に、ソフィアは、
「あんたの仕事が終わったら、ギリシアを案内してあげようと思って。このわたしが、わざわざ来てあげたんだから、心行くまで感謝しなさいよ」

嬉しそうに返したのだ。航太郎の口から大きなため息が漏れた、と、そのとき、彼の肩に、わなわなと震える手が掛けられたのだ。当然ながら、霧島内閣の首席秘書官、東田である……。
「……橘議員。これは一体、どういうことでしょうかな……？」
「いえ……」
航太郎は一瞬間の内に、必死で脳をフル回転させた。はっきり言って、航太郎史上、最速記録である。
「あー、そうです、今回の訪問において、ギリシア滞在時間は72時間程度、つまり三日間のみ日程が充てられていましたので、その後の二日間を私個人のギリシア視察とさせていただくよう、事前に申請し、許可もいただいております。当然ながら、追加日程の費用は自己負担です。その公務時間外のガイドにと、日本語、ギリシア語、英語、ドイツ語と、4か国語に堪能なソフィア・ヴァシラキさんを手配しておりました！　東田秘書官もご存じのとおり、彼女はアテネ大学法学部を優秀な成績で卒業、現在は日本の国際リベラルアーツ大学に留学中の秀才です！」
ソフィアがガイドである、というのは航太郎の口から出まかせだ。が、ギリシア訪問が僅かに三日のみであり、しかもその後の数日間の航太郎の日程が調整可能であったことか

ら、航太郎が事前に個人的なギリシア視察を旅程に組み込んであったのは事実である。
　この一年、ソフィアからギリシアの政治経済や歴史、文化について散々に聞かされてきた航太郎は、その実情をいつかこの目で確かめたいと考えていたのだ。しかしギリシアへの直行便も廃止されて久しい現在、片道20時間、往復40時間の移動時間を費やす旅行は、航太郎の過密なスケジュールの内では実現困難だった。そんな折の東田からの誘いは、まさに好機だったのだ。
　そうは言っても、ここアテネ空港にソフィアが待っているなどということは完全に予想外であり、さすがにテンパった航太郎は、咄嗟に言い訳がましいセリフを次々に並べ立ててしまった。
　物凄い剣呑（けんのん）な視線で航太郎を睨みつける東田であったが、何故か彼はソフィアとは目も合わせようとしない。
「あくまで勤務時間外、ということですね。了解致しました」
　オールバックの側頭部を頻（しき）りに撫でつけながら、東田は、ふん、と鼻を鳴らした。
　日本は鬱陶（うっとう）しい梅雨だったが、ギリシアは夏季らしくカラリと乾燥している。
　製造業の現場視察は三日間でその全行程を終え、最後の夜の晩餐会も済むと、もはや航

太郎は自由の身だった。それでもやはりその日は公務の範疇（はんちゅう）ということで、航太郎はホテルに直帰し、翌朝には空港まで東田たちの見送りにまで赴いた。律儀（りちぎ）な航太郎としては、公務とプライベートをきっちり分けておきたかったのである。

晴れて完全なオフの日を迎えた航太郎は、早速姿を現したソフィアに連れられ、アテネ市内の観光に向かった。アクロポリスや、また国立考古学博物館の所蔵品など、古代ギリシア文明の遺物を見学するのだ。

ギリシアの民は、紀元前２０００年の占からエーゲ海沿岸の全域に進出し、先住民族の宗教と互いに影響を与え合いながら、ギリシア神話の壮大な世界観を創り上げていった。また幸運なことに、紀元前８００年頃にはフェニキアからギリシアへアルファベットが導入されたため、文字による神話の伝承にさえ成功していた。

紀元前８００年頃には、ホメロスによって二大叙事詩「イーリアス」と「オデュッセイア」が著された。イーリアスはトロイア戦争を、オデュッセイアは英雄オデュッセウスの漂泊（ひょうはく）の旅を題材としている。両叙事詩は、西洋文学の元祖とも言われ、古代ギリシアにおいては教養ある市民が必ず読むべき書物として位置付けられていた。

紀元前７００年代、ホメロスからは時代が少し下った頃、詩人ヘシオドスが「神統記」を書き、ギリシアの神々の体系を明らかにした。神統記はギリシア語の原題では「テオゴニア」

といい、そこには混沌から創造された世界、さらには神々の系譜と三代にわたる政権交代の様が描かれた。ここで言う三代とは、四神、ティタン、そしてオリンポスの三世代の神々の意である。テオゴニアは、ギリシア神話が描く宇宙観の原典と考えられ、主神ゼウスの正当性を強調している。

ヘシオドスが神統記を記してから、およそ二百五十年後。アテネの政治家ペリクレスが、アクロポリスのパルテノン神殿を建設した。この地には元々、アテネに捧げた神殿があったのだが、紀元前480年のペルシア戦争によって破壊されていた。ギリシアの古代民主制の絶頂期における大政治家であったペリクレスは、デロス同盟の資金までをも流用し、アクロポリスの丘の上に壮麗な神殿を復活させたのである。

アクロポリスという語は、元々は「ポリスの小高い丘」という意味を持つに過ぎない。従って古代ギリシアには、数百のポリスにそれぞれのアクロポリスがあったのだ。その地の防衛の拠点でもあり、聖域でもあるアクロポリスには、各ポリスの守護神が祀られた。当然ながら、アテネのアクロポリスに祀られたのは、女神アテネであった。

しかしペリクレスの時代から1000年近くが経過した紀元500年頃には、パルテノン神殿は、なんとキリスト教に取り込まれていた。アテネの女神に捧げられた大神殿が、聖母マリアの聖堂になってしまったのである。

さらにその後、アテネがオスマン帝国に征服されると、パルテノン神殿は、今度はイスラム教のモスクへと変えられてしまう。女神アテネのために建てられた神殿の脇に、モスクの塔、ミナレットが設けられ、さらにはコーランの読唱の声が、パルテノンからアテネの市街に響いたのだ。

そして現代。アクロポリスには、世界の津々浦々から、あまたの観光客が押し寄せる。パルテノン神殿に向かいアクロポリスの丘を登り始めた航太郎は、何気なく路面を眺め、驚いた。何故なら航太郎の足元には、大理石で舗装された道が続いていたからである。

「凄いな、これ！　たかが道路に、いったいどれほどの巨額が投じられているんだ!?　やっぱりギリシアにとって、パルテノン神殿の存在は特別ってことなんだろうな」

航太郎が盛んに感心しているが、ソフィアには何が凄いのか分からない。

乾いた土地であるアテネ近郊では、実は木材はほとんど採れない。逆に、大理石はそれこそ豊富に採れるのだ。例えば、家屋の床を大理石にする場合と、木製にする場合とでは、その価格はほとんど変わらない。日本が〝木の国〟であるのと同様に、ギリシアはまさに〝石の国〟なのである。

「あのね、パルテノンも確かに凄いけど、ギリシアの宝はそれだけじゃないから。ペロポネソス半島にある、デルフォイ神殿なんかも実は凄いのよ。ここはアポロンを祀ってるん

だけど、古代ギリシアでは〝世界の中心〟と信じられてたの！　神殿で下される『デルフォイの神託』は超・有名だから、航太郎でも知ってるでしょ？　まあでも、こんなことは、ギリシアの小学校の教科書にも載ってるから、ギリシア人なら誰でも知ってるレベルの知識なんだけど」
ソフィアが得意げに話す中、二人はパルテノン神殿の膝元まで、白く乾いた石段と土を踏みしめ進む。一足毎に神殿は近づき、とうとう航太郎はその真正面に陣取った。間近に迫るパルテノンの立ち姿に圧倒され、航太郎は首が痛くなるほどに、この巨大建造物を見上げ続けた。
……この神殿は、シアン色の広すぎる空をバックに、巨石の柱の列が、白く眩しく輝いている。
遥か二千年以上の昔から、この地に変わらず建ってきたのである。伊勢の式年遷宮による技術伝承への崇敬の念と似ているようで、しかし全く似ていないような、不可思議な感情が胸の内に湧き起こり、航太郎を少しく震わせた。古代ギリシアの名だたる哲人、ソクラテス、プラトン、アリストテレスも、この道を、パルテノン神殿を見上げながらにこの道を歩き、思索を重ねたことだろう。
航太郎の肌に染み入るのは、千古の歴史の重み。昨年の秋に伊勢神宮を訪ねた時には、ソフィアも、今の自分と同様の思いを味わっていたのだろうか。

アテネ観光の最後の場として、二人はソフィアの母校、アテネ大学を訪れた。彼女がかつて在学していた法学部のキャンパスを散策した後、大学の正門前に回り込む。すると雄々しく建つ正門の脇には、男性の聖職者の像があったのだ。
「あの彫像は、グレゴリウス五世。正教会のコンスタンディヌーポリ総主教を三度も務めた、凄く偉い人よ。でも１８００年代初めに、オスマン帝国支配下のギリシアで独立運動が始まり、その責任を取らされて絞首刑にされちゃったの」
「殺されたって……独立運動の指揮を彼が執っていたから、ってことなのか？」
ソフィアの説明に、航太郎は驚き声で返した。日本であれば、ここに立っているのは、その学校を興した人物であるのが一般的だ。
「実際は無関係だったみたいだけど、でもオスマン皇帝は、グレゴリウス五世こそがギリシア反乱軍の後ろにいると信じていたのね。だからグレゴリウス五世は、ギリシア独立の象徴とも言えるのよ」
「反目していた国に殺された人物が、大学の正門に立ってるのか……」
二人は壮麗な大学の校舎の前に立ち、巨大な玄関を眺めた。玄関の上部には、見事な壁画が描かれており、見物客の目を大いに引く。緻密な描写に、色取り取りの彩色が華やかだ。

「あそこにいっぱい並んでるのは、知恵を象徴する神々よ。アテネだけではなく、ヨーロッパ中の大学は、ギリシアの知恵の神々に守られてるの。古代ギリシアの神こそが、ヨーロッパの全ての叡智の守護神なのよ。どう、凄いでしょ」
ソフィアが誇らしげに解説する様を眺め、航太郎はやはり不思議な思いを禁じ得なかった。
「君、自国の大学で、国や学校に対して強い愛着を持って学んでいたんじゃないか。アテネ大を出た後、いまさら日本に留学する必要性が、どこにあったんだ?」
ソフィアは明確な返答に窮したように、
「ただ、外に出たかっただけよ」
と口にした。
「もしかして、ギリシア以外の国で働きたかった、とか?」
「……そんなことより、あんた、このままアテネにいて、そのまま日本に帰るの?」
話題を変えられてしまい、航太郎は少しばかり消化不良の気分である。
「いや、今夜から島に行くんだよ。夕方の便でサントリーニに向かい、そのままフィラ・タウンのホテルにチェックインだ」
ソフィアは目を丸くしたが、すぐその美しい顔に満面の笑みを浮かべた。

ギリシア神話の世界は、〝混沌(カオス)〟から始まった。そこにオリンポスを持つ大地〝ガイア〟、地の底にある闇の世界〝タルタロス〟、さらに愛の神である〝エロス〟が生まれた。カオス、ガイア、タルタロス、そしてエロスの四神が、ギリシア神話の原初の神である。

やがてガイアが、天であるウラノスと、海であるポントスとを独力で産む。その後、ガイアは自分の息子であるウラノスと交わり、オケアノスやテミス、クロノスやレアなど、ティタン十二柱の神々を産んだ。

しかしクロノスは、母親であるガイアから依頼され、父ウラノスを襲撃することとなってしまう。ウラノスを倒し世界の支配権を握ったクロノスは、姉妹であるレアと結ばれ、二人の間には女神ヘスティア、女神デメテル、女神ヘラ、冥界の王ハデス、海の王ポセイドンという五柱の神々が生まれた。

ところが、あろうことかクロノスは、王位を奪われることを恐れ、生まれた子供たちを次々に飲み込んでしまう。そこでレアは最後の子供だけでも助けたいと、クレタ島に赴き、主神ゼウスを産む。クロノスの元に戻ったレアは、布にくるんだ岩を赤子と偽って差し出し、謀られたクロノスはそれを飲み込んだ。一方クレタ島のゼウスは、父神から隠れ、ニンフたちに育てられる。無事に成長を遂げたゼウスは、クロノスの体内から兄弟たちを助

け出した。
そしてゼウスを筆頭とするオリンポスの神々は、クロノスを長とするティタンの神々との決戦の時を迎える。戦いは混迷を極めたが、ゼウスは巨人キュクロプスから雷鳴、雷電、雷光の力を得て、何とかティタンの神々を打ち負かすことに成功した。さらにゼウスらは、ウラノスとガイアの間に生まれた巨人族と戦って勝利し、とうとう、オリンポスの神々による支配を確立したのだ。
その後ゼウスは多くの女神や人間の女性と交わり、その結実として、知恵の女神アテネ、音楽の神アポロン、月の女神アルテミス、戦争の神アレス、鍛冶の神ヘーパイストス、豊穣の神ディオニソスなどの神々が、ペルセウスやヘラクレスなどの半神半人の英雄が生まれた。さらに、ゼウスはフェニキアの王女エウロペとの間にも子をもうけ、それが後のミノス王、つまり、クレタ島で勃興したミノス文明の祖なのだ。
ギリシアの神々の泥臭い愛憎劇によって、欧州の歴史はその始まりを見た。ヨーロッパの叡智はまさに、古代ギリシアから生まれたと言っても過言ではないのだ。その元始の文明の発祥地であるエーゲに浮かぶ、大小様々の島の内のひとつが、ソフィアの故郷、サントリーニ島である。
アテネ空港から国内線に乗り僅か30分程度で、飛行機はサントリーニに着陸した。日本

からアテネまでの長い旅程を思い出し覚悟していた航太郎は、あまりに速い到着に拍子抜けしたほどである。そこからタクシーで20分ほど走れば、島で一二を争うリゾートの街、フィラ・タウンである。

事前に予約しておいた宿をソフィアにキャンセルさせられた航太郎は、なんと今夜、ソフィアの生家であるホテルに泊まることになってしまった。当然ながら気後れもしたのだが、ここまで来ておいて、今更ソフィアの家に泊まらないのもおかしなことかも知れない。ソフィアの父の経営するホテル・クリティアスは、島では最高クラスの老舗ホテルだ。現在は島一番の教会の真横に位置し、数歩足を進めれば繁華街にたどり着くこの一等地も、サントリーニがリゾートとして開発される前は、持ち主であるヴァシラキ家にとっても無用の長物であった。

三十年前に大々的リゾート開発が始まった頃、ソフィアの祖父はフィラ・タウンの中心であるここに、ホテル・クリティアスの起業を決めた。が、その大型建造物の棟上げ直後、彼は他界してしまったのだ。エーゲ大学の卒業を間近に控えた父アキレスは、当時の恋人であった京香と共に祖父を看取り、そのままホテル経営に着手することを決意したと言う。

しかし、せっかく遥々(はるばる)ソフィアの故郷の島を訪れた航太郎だったが、現地に滞在できる時間は僅かに24時間程度である。明日の夕刻には、航太郎はもうサントリーニを発たなけ

ればならないのだ。
航太郎がチェック・インを済ませると、ソフィアはすぐに彼を部屋から連れ出した。夕日が落ちる様を共に眺めようと、ホテル真横の広場に向かう。ソフィアの着るピスターチ・グリーンのコットンのワンピが、島を渡る風に揺れている。断崖ギリギリの位置にある広場の手すりにもたれかかり、二人は沈み行く太陽を見つめた。
夕日は水平線に近づくにつれ大きく膨れ上がり、今にも溶け、コーラル色の雫を滴らせるかのようだ。広いエーゲはそれを映し、海面にもコーラルの光の道が現れている。
ソフィアは、小さく息を漏らした。
「ねえ航太郎、神様はまだこの地に息づいてる気がするの。古代ギリシアの神々は、わたしたちを見捨ててなんかない、今この瞬間にも見守ってくれてるって」
意外過ぎる物言いに、航太郎は少なからずの衝撃を受けた。ソフィアの整った横顔を眺めながら、航太郎は意味深長な言葉を紡ぐ。
「あらためて思うけど、〝君の国〟は、凄い国だよな」
「え……」
ソフィアはなぜか戸惑ったように口を濁し、すぐさま反論した。

「やめてよ！　わたしはギリシア人というよりも、グローバリストのカテゴリーに属するっていう方が、正しいんだから」
　せっかく本音を引き出せそうな糸口を見つけたというのに、その直後、ソフィアはまたも自分の殻の中へ戻ってしまったようだ。無論、航太郎は苛立ちを隠せない。
「もういい加減、素直に話してくれてもいいだろう？　君、僕の選挙戦の最終日には、あれほど素晴らしい演説をしてくれたじゃないか。日本人に対しては日本を愛せと説教して、ギリシア人の自分には、ギリシアを愛することを否定させる。君は何故、自分の内にいつまでも矛盾を抱え、その矛盾の存在を認めることすらできないんだ？」
　顔をしかめたソフィアは、航太郎に背を向け、凄い勢いで歩き出した。と、バカンス客の家族に真正面からぶつかってしまったのだ。慌てて子供に手を差し伸べたソフィアに対し、その西欧人と思しき幼い少年が、
「チン・チョウ・チャン！」
　と口にした。
　すぐさま、ソフィアの顔色が変わった。家族は子供を促し、その場を足早に去っていったが、ソフィアは立ち止まったまま、暫く動かなかった。

ホテル・クリティアスにて、ソフィアの両親から食事に誘われた航太郎は、喜んでその招待を受けた。他の宿泊客も交え、こじんまりとではあるが夕食会が催され、参加した航太郎も英語での会話を楽しんだ。人々の酔いもほどよく進んだ頃、ソフィアの父のアキレスは、エーゲ海の語源についての有名過ぎる神話を、航太郎に語って聞かせてくれた。

クレタ島のミノス王には、二人の弟がいた。弟との王座争いに勝つため、ミノスはポセイドンに雄牛をもたらしてくれるように願い、勝利の暁にはその雄牛をポセイドンに生贄(いけにえ)として捧げると約した。ポセイドンはその願いを聞き届け、海から雄牛を出現させる。これが神に認められた証であるとして、ミノスはクレタの玉座に就くことを得た。

ところがミノスは、あまりに立派なその雄牛を手放すのを厭(いと)い、別の雄牛をポセイドンに捧げてしまう。激怒したポセイドンは、ミノスの妻パーシパエに雄牛へ恋をするよう差し向ける。その恋の結実として生まれたのが、半人半獣のミノタウロスである。ミノタウロスは、その凶暴性の故、ミノスのクノッソス宮殿の奥に閉じ込められた。

さてクレタの支配下にあったアテネは、ミノタウロスへの生贄を定期的にミノスへ差し出すことを強いられていた。しかしある年、英雄テーセウスが立ち上がり、ミノタウロス退治に向かうことを決意する。テーセウスは父のエゲウス王に、「成功の暁には、白い帆を上げて帰ります。黒い帆が上がっていたら、私は死んだものと思ってください」と話し、ク

レタへ出発した。
　クレタにおいてテーセウスは、首尾よくミノタウロスを倒すことに成功する。しかし、アテネへ戻ろうと船に乗りこんだはいいが、彼は帆を白く取り換えるのを忘れ、黒い帆のまま帰還してしまう。水平線の向こうに黒い帆を見とめたエゲウス王は、絶望するままに、海に身を投じたのだ。
「それ以来その一帯の海域が、エゲウスの海、つまりエーゲ海と呼ばれるようになったんだよ」
　アキレスは得意げに語り終えた。
「なるほど、エーゲ海とは、エゲウス王の悲しみの溶け込んだ海なんですね。……しかしミノタウロスも災難です、半人半獣で生まれたことは、彼本人に罪はないでしょうに」
　ジョークも交えて答えたが、航太郎は無論、この話を幼い頃に本で読んで知っていたのだ。が、エーゲ海に浮かぶ島の上で実際に聞くのとは全くの別物だった。それに加えて、楽しげに語るアキレスの姿に、航太郎は父、龍之介のことを懐かしく思い出した。父が存命の間に、このように和気藹々（わきあいあい）とくだけた雰囲気で話せるよう努力をすべきだった、と今更ながらに後悔した。
　食後のコーヒーの段になると、航太郎はロビー奥のテラスへ出、テーブル・セットにひ

とり座った。羽目を外して飲み過ぎてしまったため、夜の海を眺めながら酔いを醒まそうと考えたのだ。

そんな航太郎の背中に、艶やかな声が掛かった。ソフィアの母、京香である。ウエストを絞ったウィスタリア色のドレスに、彼女の持つ漆黒の髪が恐ろしく映える。

「お礼を言うのが遅くなってしまったけれど、昨年末に送ってくれた写真、とても嬉しかったわ。ありがとう」

「お母様に喜んでいただけたなら何よりです。帰国したら、霧島首相にもお伝えしておきますよ」

ソフィアの和服姿の写真の礼を言われ、航太郎はあの時からずっと疑問に感じていたことを思い出した。航太郎には、ソフィアが日本の文化にあまり触れずに育ってきたことが、不思議でならないのだ。航太郎の友人の帰国子女たちは、日本人としてのアイデンティティを殊更に意識して育てられた例が少なくない。

率直に尋ねてみると、京香は少しばかり声のトーンを落とし、

「どこから始めればいいのかしら……実はソフィアは幼い頃、混血だという理由で苛められっ子だったのよ。徐々に強くなり、その後は苛められるというよりも、男女問わず誰とでも喧嘩ばかりするようになったのだけれど」

と答えた。

「……そういうことだったんですか」

航太郎は驚きもしたが、同時に合点もいった。ソフィアに対して航太郎が抱いてきた数々の違和感も、そういった背景があるとすれば納得がいく。

度々近所や学校でトラブルを起こすソフィアに、京香は手を焼きつつも、当然ながら心配し通しだった。そしていつからか、日本のものを押し付けることは子供たちにとって良くないのではないか、と考えるようになったという。二つの国の血や文化の狭間で迷いながら育つよりは、生粋のギリシア人として育つ方が良いのではないかと。しかしそれでも母の祖国を知ってほしいという思いは捨てられず、彼らが十分に成長した頃に、日本に留学させるようにしたのだ。

「ご苦労お察しします。しかし、お母様の考えは良い結果を生んだと思いますよ。ソフィアは今や、ギリシア同様に日本も大好きですから」

「そうだと嬉しいわ。……ああ、でもね。ソフィアにはもうそろそろ、ギリシアに戻って欲しいと思い始めているの」

「……え？」

航太郎は思わず、大きく目を見開いて聞き返した。京香はそんな航太郎の様子を気にも

留めず、淡々と語り出す。
「ギリシアが経済危機に陥ってから、ずっと廃止されていた日本とギリシア間の直行便が、年内にも復活の見通しなのよ。それでね、羽田とサントリーニ間の直行便も、今回初めて運行される計画なの」
　サントリーニへの直行便の開通に伴い、当然ながら日本人観光客の大幅な増加が見込まれており、ソフィアの父アキレスはさらに事業を拡大する心づもりであると言う。しかしその一方で、長らく将来不安を抱えながら暮らしてきたソフィアの兄と姉も、境遇の転換期を迎えつつある。兄は近々外交官として正式に登用されることが決まり、姉の方はドイツ人との結婚の話が進んでおり、おそらくドイツへ渡ることになるのだ。
「だから今回、一度帰省してくれるよう、ソフィアに連絡したの。日本人向けの事業を大きくするのだから、日本語をあれだけ美しく話すソフィアが戻ってきてくれるなら、これ以上に心強いことはないわ。上の子は二人とも、サントリーニに戻らないことが決まってしまった訳だし」
　ユーロ撤退によって為替レートも大きく下落したギリシアにおいて、外国人向けの観光業は依然伸びしろの大きい分野である。加えて、アキレスの現在抱いている野心についても、男である航太郎には頗(すこぶ)る理解出来る類のものだ。しかし……。

「……お話はよく分かりますが、しかしソフィアは、海外で勉学を修めたい気持ちが強いように見受けられます。そして将来はギリシア以外の国で暮らしたいと彼女が語るのを、僕は幾度も聞きました。それについて、お母様はどうお考えなんですか？」
「あなたたちが将来について考えているように見えるから、敢えて今日、こういったお話をしているのよ。……橘さん、あなたは日本の国会議員でしょう？　日本有数の名家の御曹司なのでしょう？　それだけの立場をお持ちのあなたと、ギリシア人のソフィアとは、うまくいく組み合わせだと果たして言えるのかしら」
本来であれば随分と言いにくい筈の言葉を、京香は一気に語り終えた。しかし航太郎の方はと言えば、返答のしようもなく、ただ黙り込むしかなかった。
すると、何かが割れるような音がロビーに響き、航太郎は後ろを振り返った。……ソフィアである。彼女の足元に、割れたコーヒーカップの破片が散らばっている。
「どうしてわたしを、今更になってギリシアの地に縛り付けるのよ！　わたしは結局、ギリシアにも日本にも属せない、半端者の〝チン・チョウ・チャン〟なのに！」
ソフィアは着ていたワンピースの裾を両手できつく握りしめ、その手指は傍目(はため)にもはっきり分かるほど小刻みに震えている。
「わたしはいつも独りだったし、今も独りだわ……母さん、あなたが悪いのよ！　異国の

人間と浅はかな恋をして、将来の子供の苦悩も考えずに、わたしたちを産んだから！」
ソフィアは京香に向かってひとしきり叫んだあと、航太郎には見向きもしないまま、その場を走り出ていってしまった。
航太郎はすぐに立ち上がった。横を見れば京香は涙ぐみ、しかしその体には動く気配もなく、椅子に座りこんだままである。航太郎は急ぎ、ホテル入口の重厚な扉から往来へと飛び出した。路地から路地へと器用に走って行ってしまうソフィアを追いかけ、航太郎も走り続けた。
夜の中、サントリーニの白い道の両側に、賑やかな灯りに照らされた商店や、人々の笑い声さんざめくレストランが立ち並んでいる。煌（きら）めくガラス細工、色とりどりのオリーブ石鹸。白壁に垂れ下がる濃いマゼンタ色の花々は宵闇の中でも美しい。その、様々な色のゆらめく水の中を、か細い魚が泳いでいく。航太郎は、愛すべき小さな魚を捕まえようと、夢中で後を追いかけた。
「ソフィア！　何だよ？　気に入らないことがあるなら、僕に話せばいいじゃないか！　なぜ僕にさえ、心を開いてくれないんだよ⁉」
街の外れの暗い路地で、やっとソフィアに追いついた航太郎は、ソフィアの二の腕を掴み、自分の下へ引き寄せた。すると間近に見るソフィアの瞳は、真っ赤に充血し潤んでい

たのだ。
「いつも君はそうだ、本当は言いたいことがあるのに、それを隠し、必死で虚像を演じているんだ。だから何か不測の事態が起きたとき、いとも簡単にそれら問題を抱えきれなくなり、必要以上に動揺してしまうんだ！　……話せよ、ソフィア。君の心の底にある澱を、僕だったら受け止めてやれる」
　大きな両の瞳が、航太郎をねめつけている。
「……じゃあ、じゃあ、言ってやるわよ、わたしは、本当は、ずっと苦しかったのよ！　国籍はギリシアの筈なのに、母の血は日本で。幼い頃から好奇の目で見られたり、学校に行くようになってからは嫌がらせにも遭ったり。どうして？　わたしはギリシア人なのよ？　紛れもなくこの地で生まれ、この地で育ったのよ！」
　ソフィアの頬に、涙が後から後から零れ落ち、いく筋もの道を作る。
「だから必死で〝日本の血〟をバカにしたわ。同時に〝ギリシアの血〟もね。だって、わたしを好奇の目で見たのは、他でもない、ギリシア人なのよ。わたしはどちらも否定しなきゃいけなかった……ギリシアも日本も」
　初めて聞く本音の言葉が、ソフィアの唇から怒涛のように溢れ、流れ出した。
「だから、わたし、こんなにイヤな奴なんだわ。グローバリストなんて、そんな気持ち、

本当は欠片も持っちゃいないわ」
ソフィアはもうべったりと、石の道に座り込み、まるで幼子の用に泣いていた。航太郎の胸に、激しい自己嫌悪の念がこみ上げてきた。自分は今まで何も気づいてやれなかった。自分の中に流れる血。血の繋がり故の、苦しさ。その痛苦に翻弄されていた自分を救ってくれたのは、他ならぬソフィアだったではないか。にも拘らず、自分はソフィアの苦悩には無関心だったのだ……。
今この場で、自分はソフィアのために、何ができるのだろう？　必死で考えを巡らした航太郎の脳裏に、とんでもない思いつきがよぎった。一瞬躊躇したが、すぐに意を決し、えい、と口にする。
「ソフィア、君は紛れもなくギリシア人だ。この島で生まれ、海と空を愛して育った、ギリシア人だ。そして僕は日本人だ。極東の島に生まれ育ち、八百万の神々に見守られ、豊かな四季に彩られた国に生きる、日本人だ。その僕が、ギリシア人の君を、はっきり言って、大好きなんだよ！」
両手で顔を覆い、泣きじゃくっていた彼女は、ぴたりと泣き声を止めた。
「ギリシアは凄い国だ。これほど長い歴史を持ち、素晴らしい神話と哲人を生み、ヨーロッパ文明を発祥させた地。それを、ここ数百年の他国とのイザコザや、現代の経済問題ぐら

いで蔑むな！　列強やトルコやドイツなどとの間に、辛い過去もあったかも知れない、でも君らはやっぱり、輝かしい国の民として生まれたんだ。君らには、誇るべき歴史と文化がある！
どの国だって皆、お家事情を抱えてる。日本だって同様だ、近隣諸国との問題を抱え、時にはいがみあいながら、それでも何とかバランスしてやって来たのさ。言ってみれば、どの国も悪くて、逆にどの国も悪くないんだ。大事なのは、僕は日本を誇っているってことだ、自分は素晴らしい国の民だと、自負心を持っていることだ！
さあソフィア、今から言うことが最も重要だ。いいか、君は、ギリシア国内だけでなく世界的に見ても、絶世の美女だ！　頭も良く、美人で、しかもスタイルが滅茶苦茶いい！はっきり言って、君は、君の存在は……」
一呼吸おいてから、航太郎は叫んだ。
「反則だ！」
「は、反則⁉」
場違いな言葉が突然飛び出し、ソフィアは涙を拭うのも忘れ、航太郎をぽかんと見上げた。そんなソフィアに向かって、航太郎は頭をガシガシと掻きながら、続ける。
「マジで、反則レベルだ……もう白状する、生まれてから今まで出会った全ての女性の中

で、君が最高の美人だ！　いいか、男どもは皆、君と交際したかったんだ、でも高嶺の花過ぎて近寄れない、歯牙にもかけられないもんだから、アホな男は君を逆恨みしたりするんだ！　大学で友達ができなかったのだって同様だ。十人並みの女の子たちは、君と一緒に歩くのがイヤだっただけだ！　男どもから容姿を較べられるのがイヤだったんだ！

……ここまで言えば、もう十分に分かったろう、君のこれまで抱えてきた問題は、全て君のあまりに才色兼備であることに由来するもので、決して、君の出自、血の問題によるものではないんだ！　君の本当の良さを、内面を理解してもらえなかった、単なる誤解だ！」

ソフィアの両頬を手ではさみ、上を向かせる。

「国なんか、人ひとりの価値に較べたら、やっぱりただの共同体でしかないんだ。だからそんな概念に振り回されるな。国や家、血は大事だ、守っていかなきゃいけない。でも、それらによって、人が不幸になったり、理不尽な枷を付けられてはいけないんだ。つまり、国も民も同時に幸福になる道を模索して進んでいく、それが、叡智に満ちた人間のやるべきことなんだ。

そして僕は今、ただの男だ。ソフィア、国も家も血も関係ない。ただ素晴らしい君に、ただの男の僕が、好きだって言ってるんだ」

一世一代のセリフを吐いた航太郎は、期待を持ってソフィアの返事を待った。しかし、

ソフィアは頬から航太郎の手を外し、ぽつりと、
「……わたし、帰るわ」
と呟いたのだ。そのまま、いやにゆっくりと歩き始めたソフィアに寄り添い、航太郎も共に歩を進めるしかなかった。航太郎には聞きたい言葉が山ほどあるというのに、ソフィアは口を噤んだきり、自室に姿を消すまで沈黙を守り続けた。
仕方なく部屋に戻った航太郎だったが、しかしベッドに入っても一向に眠れる気配はなかった。目を瞑れば京香の発した言葉が脳内を駆け巡る。日本の国会議員であり名門橘家の御曹司である男と、かたやリゾートの島に生まれ育った日希混血の美女。確かに現実味の無い組み合わせなのかも知れない。しかしそんなことで、人の将来は、未来の道筋への決断は、捻じ曲げられなければならないのか？

ふと時計を見れば、もう夜明けも間近である。窓外に視線を遣ると、まだ薄暗がりの中、船の灯りがちらちらと覗く。素早く身支度を整え、ホテル一階のテラスに出てみた航太郎は、なんとそこに、ひとり佇むソフィアの姿を見つけたのだ。
「航太郎！」
ソフィアは、パジャマのような、部屋着のような、緩やかなラインのドレスを着ている。

夜明け前のプルシアン・ブルーの背景の中に、ソフィアの真っ白の立ち姿が浮かびあがる。
「……あ、あんたに言うことがあるわ、わたしは……」
遠慮がちに開かれた彼女の唇からは、今にもネガティブな台詞が飛び出しそうだ。と、航太郎が、いきなり叫んだ。
「ソフィア、僕と結婚しないか！」
「……は？？？」
「必ず、幸せにする。君がいつも笑顔でいるために、僕は、僕の残りの人生を捧げる！」
想像に難くなく極度に面食らっているらしいソフィアをそっち退けで、航太郎は一気にまくし立てる。
「今日、日が昇ったら、このサントリーニの教会で式を挙げよう。そしてすぐに日本に戻ろう。君を笑顔でいさせる代わりに、君は僕の政治人生を支えてくれ！　……親の意向なんか気にするなよ、君には、君自身の判断によって未来を選び取っていく、権利と義務があるんだ。
いいか、橘家は君を必ず優しく受け入れる、当主の僕が言うんだから間違いない！　これから君は部屋に戻り、荷物をまとめるんだ。そして、そして僕が、君を親元から日本へ、さらって行ってやる！」

さすがに恥ずかしくなったのか、ここで航太郎は一度口を噤んだ。しかしすぐに顔を上げソフィアの目の前に進むと、彼女の両肩を掴み、これまでとは打って変わった小さな声で尋ねた。

「OK、してくれるよな?」

しかし、航太郎の目の前、まつ毛が触れるほど間近にいるその美女は、プロポーズを受けた直後の女性とは到底思えぬほど、酷く顔をしかめたのだ。

「……OKしないわよ」

「え?」

あまりの冷たい即答に、航太郎は目をしばたいた。なんとソフィアは、少しばかり不遜な表情すら浮かべている。

「航太郎は正教徒じゃないでしょ? ここの教会では、正教徒同士しか結婚式を挙げられないのよ。あの明治神宮みたいに、どの宗教の信徒でも結婚式を挙げられるような、無節操な場所と一緒にしないで。あんた、わたしと結婚するために、オーソドクスの洗礼を受けられるの?」

「いや、それは知らなかった……」

航太郎は視線を泳がせた。そんな航太郎から目を逸らし、ソフィアは一語一語を噛みし

めるように、
「でも正教の問題だけじゃないわ。わたし、あんたと一緒に日本には行けない。ギリシア人のわたしは、ギリシアに残る。……もうこのまま、日本には帰らないわ」
と口にした。突如ソフィアが為した宣言に、航太郎は驚きを隠せない。
「えーと……ちょっと待ってくれ、結婚の話は確かに、急ぎ過ぎだったのは認めるよ。でも君、日本に戻るのはまた別の話だろう、大学だってまだ……いや、それ以前に、君はあれほど、自分はグローバリストだと、ギリシアには戻りたくないと、散々に言ってたじゃないか?」
「だって気づいてしまったんだもの」
ソフィアは顔を上げた。凛とした眼差しで、航太郎をまっすぐ見つめる。
「わたしは、ここで生まれ、ここで育った。ギリシアこそが、わたしの生きる場所なんだわ」
夜明けが近づき、空は微かに明るさを帯び始めている。
「国に枷を付けられてはいけないっていうの、よく分かったわ。それでもわたしはギリシアが好きなの、サントリーニが大好きなの！　日本という国から否定されたのではなく、わたしの個性が人を遠ざけていた、と言ってくれて、ありがとう。正直、救われたわ。だか

らこそ今、素直に思うの。一個人としてわたしは、ギリシアを愛しているの」
ソフィアの表情は、これまで航太郎が一度も見たことがなかったように強い意志を感じさせるものだった。
「それに昨夜の話、大部分は賛成だけど、やっぱりひとつ分からないわ。あんた、わたしが大好きでしょう？　だからわたしに、日本に来い、って言うんでしょう？　でもおかしいわ、あんたが本当に国を関係なくわたしを大好きなら、あんたがギリシアに来てもいいはずよ」
思いがけず虚を突かれ、航太郎は返答に窮した。
「つまりあんたは、絶対に日本を捨てられないのよ。それはなぜ？　その答えは、あんたの中に、絶対に動かせない、〝日本人〟ていう意識があるからよ」
黙ってしまった航太郎に、ソフィアはさらに続けた。
「私の母の京香は、三十年前に、日本から遠くギリシアの地で父と恋愛をしたわ。兄を身ごもり、さらにはギリシア国籍を選んだ。それ以来、日本の親族とうまくいってないの。東京の根津ってとこにある実家に、母はもうずっと帰ってない。その期間、なんと三十年よ」
航太郎は大きく目を見開いた。あの優美な京香の背後に、そのような苦渋の事情があっ

たとは、思ってもみなかった。
「わたしはそんなのイヤよ。わたしはね、家族も親戚も、皆で上手くやっていきたいのよ。だからわたしはずっと、母のことを可哀相だと思ってた……ううん、違う、正直に言うわ、わたしは母の二の舞はしない、同じ轍は踏まない。そう心に決めてた。
　わたし、母のことをバカにしてたのよ。たかが一時の感情で人生を棒に振ったって。もともと母は日本の茗荷谷女子大で、哲学の勉強をしてたわ。中でも特にギリシア哲学を好んだ母は、その地が見たいと、19歳のときにギリシアに来たの。それなのに父と恋をして、ましてや子供までできてしまった！　本当にバカだわ、聞けばその女子大は、日本だとかなり名門だっていうじゃない？　母は一度の激情に身を任せたために、両親の下へ三十年も帰れなくなったのよ。……そう、つまり日本人の血をもっともバカにしてたのは、わたし本人だったんだわ」
　ソフィアは航太郎の腕から抜け出し、テラスの手すりに身をもたせた。二人は揃って沈黙し、辺りには島を渡る風の音のみ響いている。どちらもが口を開こうとしては躊躇い、黙り、また暫くすると言葉を発せようと唇を震わせ、しかし再度諦める。そんなことを幾度も繰り返した。ようやっとして、航太郎が呟く。
「……だったら、君、ギリシアから出ないほうが良かったんだ。どうしたって、ギリシア

人と恋愛したかったならば」
本当は航太郎には、他にもっと言いたいことがあったのだ。しかし口を衝いて出てくる言葉は、そこからはほど遠いものだった。
「それに、君がお母さんを責めるのは傲慢だ。だって君は今、日本に留学しているのだから、日本の祖父母とコンタクトを取り家族の仲を取り持つことだって、実の孫の君には可能なんだ。でも、やらなかった。それは君の怠慢が原因かも知れないし、もしくは臆病の故かも知れない。しかし僕は、その不実を責めようとは思わないよ。何故なら、それは、当事者にしか分からない、苦痛や戸惑いを伴う行為だからだ」
「そうね、きっと、航太郎の言う通りだわ」
「……加えて言っておくけど、お母さんが君に戻って来てほしいと願っているのは、たぶん、君を信頼しているからだよ。君だけにヴァシラキ家を押し付けようとしているんじゃなくて、おそらく君が子供の中でもっとも頼りがいがあると、そう思ってるんだ」
「……そうかもね」
そのまま二人はテラスに並び、朝靄の中のエーゲ海を見つめた。今にも日は昇ろうとしていた。もはや航太郎には語るべき言葉が見つからず、ただひたすらにサントリーニの海景を目に焼き付けるのみであった。

するとソフィアが、おずおずと航太郎へ向かい手を伸ばしたのだ。初めはシャツの裾に控えめに触れ、しかしその手指は徐々に込める力を増し、気が付けば航太郎の背中は、抱きついてくるソフィアの体温で覆われていた。

「あのね、航太郎。わたしのことは、もういいの。それに母のことも本当は分かっているの、浅はかで自分勝手で、凄く凄く弱い人だけど、でもずっと、とても苦しい立場にあったと。その母がわたしを頼っているのだから、わたしはここに残ろうと思う。

……考えてみれば、本気で勉強する気もないのに学籍だけ保持しておくなんて、わたしは他のILU学生に対して、随分失礼なことをしていたものよね。わたし、真面目に生き直す。このサントリーニの地で、父と母を支えながら、もう一度自分の将来について考え直すわ」

朝日が、確かに周囲を照らし始めた。明るさの中に視線を落とせば、ソフィアの白く細い指がすぐそこに。航太郎は逆に彼女を抱きすくめたいと強く思った。しかし航太郎が微かに身を捩ると、ここでソフィアは腕を解き彼の瞳を覗き込み、俄かに花のような笑顔を見せたのだ。

「航太郎の長い夜が明けて、ホッとしてる。あんたはこれから絶対に、どんどん偉くなるわ。わたし、遠くからでも、応援し続けると思う」

サントリーニ空港までは、ソフィアが送ってくれた。ソフィア自ら、フォルクスワーゲンのパサート・ヴァリアントを運転する。彼女の父、アキレスの長年の愛用車である。
「今はドイツ車に乗ってるけど、十年後にはきっと、ギリシア・ブランドの車に乗ってるわね。霧島首相にお礼を伝えておいて。ギリシアは必ず復活するわ！　だって、全ての叡智は、ギリシアから始まったんだから」
助手席に座った航太郎は、道すがら、乾いた島の横長の景色を眺め続けた。
「ああ、僕も、ギリシアの未来を信じてるよ」
ソフィアの妙にゆっくりとした運転によって、航太郎が空港まで送り届けられると、離陸の時刻はもうすぐだった。速やかに手続きを済ませ、搭乗口に向かうべき刻限である。
それに気づいた二人は、黙ってゲートの前に立ち止った。しばしの沈黙の後、ようやっと、ソフィアが顔を上げる。
「会えて良かった。わたしの長年の呪縛(じゅばく)を解いてくれて、ありがとう。……祖国や家族への思いと、恋人への思いの狭間(はざま)で揺れ動いて、最終的に恋人を選ぶ人もいる。そういうのを、きっと、〝運命の恋〟って呼ぶんだわ。それは凄く美しいと思うけど……でも、わたしは違ったの」

ここでソフィアは、一気に泣き笑いの表情になった。ボロボロと涙が、後から後から零れ出た。航太郎はその涙を拭ってやりたいと思ったが、手を伸ばすのを必死で我慢した。今、彼女に触れたなら、きっとそれだけでは済ませられないと思ったからである。
ただただ航太郎は、ソフィアを見つめた。桁外れに整った、その容姿を。大きく潤んだ灰色の瞳、通った鼻筋、ぽってりとした唇を。透き通るように白い肌に、ヘリオトロープ色のワンピースからところどころ垣間見える、しなやかな肢体を。この一年、彼女はずっと航太郎の真横にいたはずなのに、その美しさをしっかりと見つめるのは、これが最初で最後のことだった。
名残惜しい気持ちを振り切り、黙って踵を返した航太郎の背中に、声がかかった。
「……今なら、母が父を選んだときの気持ちが分かるわ。わたし、あんたのこと、少しは大好きだったかも知れない！」
人通り少なくない発着ロビーで、臆面もなく叫ぶソフィア。その舌っ足らず気味の声に、航太郎は微かに表情を歪めた。
「反則だ」
航太郎は振り返らず前方を見つめ、真っ直ぐに歩を進めた。
「本当に反則だ」

ひたすら闊歩し続けた航太郎は、搭乗口が間近に見えてくると、少しその進むスピードを落とした。そして右手でぐいと目元を擦った。
「……君みたいな子、二度と、めぐり逢えるものか」
航太郎の長かった夜は、一人の天使の出現によって引っ搔き回され、その重い緞帳を撥ね退けられた。彼の人生の第二幕は、華々しく開演の時刻を迎えたのだ。そして、与えられた大役を見事に演じ切った天使は、続きの台本の存在を見届けると、かなた遠い島へ還って行った。
夢のような、ジェットコースターのような、そして生涯残る宝物のような、一年間だった。

エピローグ

「ソフィアさんは、本当にお帰りになってしまったんですね」
総絞りの瑠璃紺の浴衣を着込んださくら子が、残念そうに口にした。
ここは橘航太郎の自宅である。今日はこの場に、既知の仲間が花火大会鑑賞のために集まっているのだ。橘家の裏庭は、多種多様な木々が溢れる林があるが、真ん中はぽっかりと空いた芝生の空間だ。その芝生の上に大小様々のテーブルが置かれ、人々がグラスを片手に談笑している。
八月の終わり、地元の花火大会の夜に行う宴は、橘家の長年の恒例であった。もっとも、三年前の選挙で航太郎が大敗を喫してからは、このイベントも下火になっていた。しかし今夜は本当に久方ぶりに、大勢の人が集ったのだ。かつて紀之彦が存命であった頃のような、大仰な賑わいさえ取り戻している。
航太郎の母、八重子は、このほんの数日前に、隠棲していた軽井沢から吉祥寺へ帰ってきた。先の落選からはや三年、もう随分と長く顔を合わせていなかったというのに、親子は感情の昂ぶりを見せ合うことなく、互いに淡々と昔の通りの日常に戻った。航太郎は少しく安堵したものの、八重子の以前にも増して痩せた体躯を見るだに、彼女の抱えてきた苦悩について思わされた。おそらく八重子も、航太郎やソフィアと同様に、何らかの呪縛に捉われて生きていたのだろう。その呪縛に初めての抵抗を試みたのが、今回の軽井沢行

きであったのだと、航太郎は推測している。今日のパーティ会場に八重子の姿は見られないが、航太郎としては母の好きにさせてやりたいと思うのだ。

そのガーデン・パーティを訪れ、テーブルに着座したさくら子は、今まさにソフィアの不在を知ったところである。さくら子はもう長らく、航太郎の選挙活動を横で支えていたソフィアを、健気(けなげ)に感じて来たのだ。当然、今日この場に彼女もいると思い込んで橘家の招待を受けたのだが、肝心のソフィアがいないとは、一抹の寂しさを禁じ得ない。

「ええ。……あれから、もう二か月ほど経ちますか」

航太郎は言葉少なに答えた。人づてに聞いたところによると、あれからソフィアは国際リベラルアーツ大学に退学届を出したそうだ。ギリシアで生きると決めた以上、日本で学ぶ必要性も無くなったのだろう。今夜は花火大会ということで、自分も古い浴衣を引っ張り出して着てはいるものの、航太郎の気分は上昇する気配も無い。

首相に対し、これ以上の説明のしようもなく航太郎が逡巡していると、新たな客人が橘邸を訪れた。背の高い、ジーンズ姿の男女が連れ立って庭に姿を見せる。彼らは航太郎に軽く会釈をした後、その場にいたあまりのビッグネームの存在に驚いたようだ。すぐさま丁寧なお辞儀と共に、

「総理！　まさか、いらしてるとは……橘議員の選挙取材の折はお世話になりました」

と挨拶した。
「まあ、一之宮さん！」
さくら子は先ほどまでの寂寥感を忘れ、朗らかな声を上げた。
「先日は献本をいただき、ありがとう存じました。橘議員の三年に亘る奮闘記、とても興味深く拝見しましたわ。特に橘さんの日本国への思いをまとめたくだり、感銘を受けました。ああいった、素直な郷土愛が政治家の口から語られ、しかも内容が歪められることなく、上梓される。日本は良い時代を迎えたと、つくづく思います……。
そうそう、お写真も素晴らしかったわ！　写りの悪い写真を使って他者を揶揄したりする人もある中で、シャッター・チャンスを逃さずに、素敵な瞬間を撮ってくれるカメラマンさんの存在は貴重だわ。神庭さんのように、愛情を持って対象を撮影する方の作品が、紙面を飾るのが当たり前の世の中になって欲しいと、切実に思わされたほどよ。
まさにこの本は、神庭さんと一之宮さん、お二人の能力とお人柄の結実ね。恋人同士協力し合って一つの作品を創り上げるなんて、本当に素敵だわ！」
一気にまくし立てたさくら子に、その七分丈のデニムにキャミソールを合わせた快活そうな女性、つまり雪乃は恥ずかしそうに、
「ありがとうございます、総理。過分なお褒めの言葉をいただき感慨無量です。……それ

が私、名字が変わりまして、神庭(かんば)、雪乃となりました」
と答え、そのままアッシュ・ブラウンの癖毛を盛んに触っている。さくら子がぽかんと口を開けていると、すかさず、横にいた中肉中背の男性が代わりに尋ねた。
「つまり、カメラマンの神庭氏と結婚された、ということでしょうか？」
首相秘書官の一人、丹後芳樹(たんごよしき)である。この熱帯夜に、丹後は今日もスーツを着ている。
「恥ずかしながら……」
雪乃にしては珍しく、戸惑いがちに答えると、その横から神庭も顔を出した。
「ですからこれは、いわゆる〝二人の初めての共同作業〟というヤツなんですよ、総理」
その甘い造作に、さらに甘い笑顔を浮かべた神庭に、さくら子は一気にテンションが上がってしまう。
「みなさん、ご結婚されたんですって！　お祝いしなきゃ！」
さくら子が周囲の人々に大声でこの朗報を伝えていると、しかし、水をさすのを忘れない男がズイと前に出た。他でもない、我らが東田剛(ひがしだつよし)である。
「お目出度いは結構ですが、神庭雪乃殿はまだ30代前半、それにひきかえ、総理ときたら……」

さくら子は唇がぴくぴく動くのを抑えながら、必死で応戦する。
「わ、わたくしは確かに、もう39歳ですけど！　てゆうか、別によろしいでしょ！！！
そのうち、良いご縁が……」
東田が、フン、と鼻先で笑った。
「完っ全に賞味期限切れ、と言わざるを得ませんな！　昔は女性をクリスマス・ケーキに例える風潮もあったと聞きますが、その説に従っても、31日が限度ですからな。39歳……来年からは介護保険料をも納める、と！　いやはや、総理のお歳にもなりますと、もはや白馬に乗った王子様など、夢にも現れませんよ」
真っ黒の無地の浴衣に、白の博多織(はかたおり)の帯を合わせている東田は、意外にも普段より数段マシな爽やかさを醸(かも)していたのだが、やはり口に出す言葉は最悪である。ある意味、決して期待を裏切らない男だ。
見かねた朝生が葉巻を仮置きし、二人の間に割って入った。朝生が着ているのは、シブい葡萄色(えびいろ)の浴衣である。
「まあまあ、総理も、東田君も……」
軽くいなそうと考えていた朝生だったが、彼はここで、はたと気づいた。おもむろに、さくら子と東田の顔をじっと見る。

「ああ、そうか。君たち二人とも、私が仲人をするから、そろそろ結婚しなさい」

さくら子と東田は、

「誰と⁉」

と同時に返す。その反応に、ニヤリと笑った朝生が、言葉をつなげた。

「目の前に、いちばんの適任者がいるじゃないかね」

「……は？？？」

またも、さくら子と東田は声を揃えてしまった。

先ほどからさくら子の周囲でパタパタと小間使いのように動き回っていた九条が、朝生の言葉を聞いて、がっくりと肩を落とした。そして藍鼠（あいねず）の上品な絽（ろ）の袖を握りしめながら、九条は寂しげに、

「そうですね、僕は悲しいですけど……総理と東田さん以上の組み合わせって、なかなか無いと思います……」

と呟いた。すると丹後さえ、

「水と油ながら、長所と短所を互いに補完し合っているようにも見えますからねえ」

と同意する始末である。自分たちを包囲するヘンな空気に驚いたさくら子が、東田を振り返ると……なんと東田は、これまで誰も見たことのなかったような、照れた様子で黙り

こくっている――
東田につられ、さくら子まで頬を真っ赤に染めた。慌てふためき、話題を逸らそうと、さくら子は必死に航太郎を振り返る。
「あの、橘さん、今後も、日本のためにお力を貸してくださいませね！」
「勿論です、総理。……ご結婚、おめでとうございます」
「違うってば！！！」
神庭が今度はニヤニヤ笑いを浮かべながら、
「皆さん、良かったら、集合写真をお撮りしますよ。総理と東田秘書官を真ん中にすれば、ちょうどいいんじゃないでしょうか？　総理が白無垢を着ていないのが、返す返すも残念ですけど」
と提案する。大騒ぎして否定の文句を並べ立てるさくら子と、異様な空気を周囲にまき散らして沈黙する東田の周りに、庭中の招待客が集まった。
「じゃあ、撮ります。いいですか？」
あまりにあけすけすぎる、愛すべき我が国の総理の姿に、航太郎は大きく笑った。そして和気藹々と騒ぐ面々をあらためて眺めた。

血の通った言葉が飛び交い、人々は笑いさんざめく、夏の夜。空には打ち上げ花火が上がり、庭の草木と皆の笑顔とを、明るく照らしている。凌霄花（のうぜんかずら）が無数に咲き乱れ、白百合が芳しく香り、百日紅（さるすべり）は今を盛りと紅白の花を開かせる、日本の夏。

航太郎には、この日の集合写真に共に納まって欲しかった人がいる。互いの祖国と家族を選び別れた、遠い国の恋人。切ない気持ちは止まるところを知らず、航太郎は唇を噛みしめた。挫折から立ち直る日々を支えてくれた、六角や花園、賀茂、御室などの顔が、順に航太郎の視界に入る。何故そこに、彼らの真ん中に、ソフィアはいないのだろうか？

否、その理由は自明であるのだ……。

航太郎は思う。あの恋があったから、自分もソフィアも成長できた。何物にも気づかず、安閑（あんかん）と生きる道もあったろう。しかし、自身のルーツ、連綿と続く血、心の奥底に息づく神、それらの価値を知り、敢えて離れ離れの道を選んだのだ。

日本。われわれの美しい国。神々の住まう、とてつもない力を秘めた国、日本。この国を守るために、日本人であるために、僕は、今、ここにいる。

いつか自分が何らかの成果を成したとき、もう一度ソフィアに会いに行こうか。陽光に煌（きら）めくエーゲ海に浮かぶ、オリーブの葉が揺れる、あの島に生きる美しい女性に。その頃のソフィアは、家庭を切り盛りするたくましい母となっているかも知れない。それとも彼

女がかつて豪語したように、ギリシアを導く女性宰相に？　だが、どのように齢を重ねていたとしても、その純粋な笑顔は消えないでいて欲しい。自分が愛したあの笑顔は。

航太郎が思いを馳せていると、今や政策担当秘書となっている嵯峨野が、小走りに近づいてきた。

「先生、失礼致します、あの、葉書が届いているんです」

当選後のあまりに多忙な業務に追われ奔走し、すっかり議員然と変貌を遂げた航太郎が、秘書に対して厳しい声を発する。

「なんだ、今は取り込み中だろう」

「それが……」

普段とは違う嵯峨野の様子を見てとり、航太郎は即座にそのハガキを受け取った。すると自分でも驚くほどの衝撃を受け、おそらく表情まで大きく変わってしまったのだ。変化にいち早く気づいたさくら子が、声をかけてくる。

「橘さん、どうなさったの？」

航太郎は何とも不思議な面持ちのまま、黙って首相にそのハガキを差し出した。その場にいた全員がさくら子の周りに集まり、ハガキを覗き込むと。

そこには眩しいエーゲ海と、澄み切って晴れ渡るサントリーニの空。その輝く青色をバックに、並んで笑顔を見せる人々がいた。絶世の美女を中心としたギリシア人一家と、日本人らしい中年女性と、やはり日本人と思しき老夫婦の姿。……そして、見覚えのある筆跡による、殴り書きの一言が。

『明治神宮でなら、結婚してあげる。　ソフィア』

ギリシアの歴史　年表（紀元前2000年〜現代）

年	事項
〈紀元前〉	
2000年頃	ミノス文明（ミノア文明）勃興
1200年頃	ミノス文明崩壊
800年〜700年頃	ギリシア各地でポリスが発展していく。ホメロスが「イリアス」「オデッセウス」を、ヘシオドスが「テオゴニア（神統記）」記す
499年〜449年	ペルシャ戦争
447年	ペリクレスによるパルテノン神殿の建設が始まる
431年	ペロポネソス戦争
334年	マケドニアのアレキサンダー大王による東方遠征が始まる
146年	ローマ帝国がギリシア諸州を含めたマケドニアを属州とする

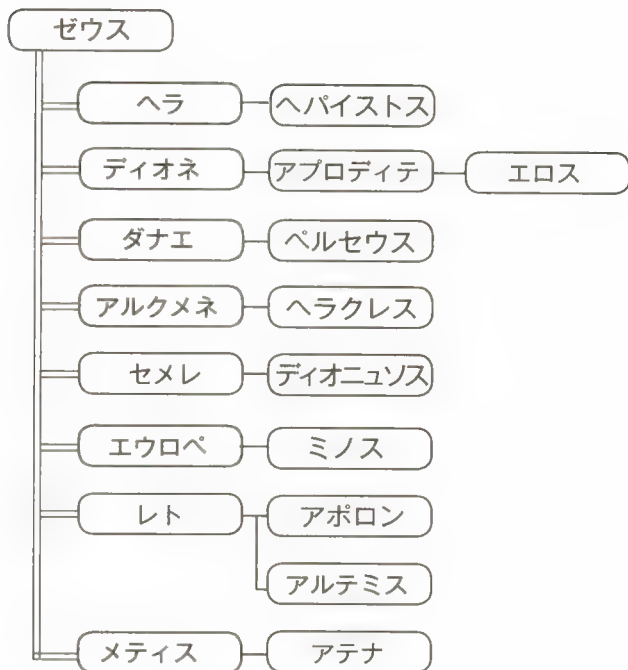
＜紀元後＞

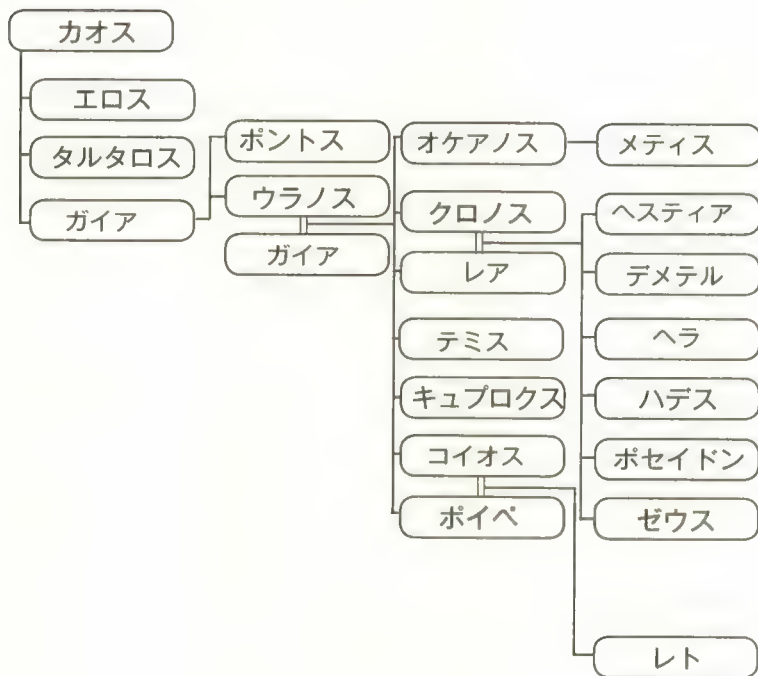
年	出来事
395年	ローマ帝国が東西に分裂する。東ローマ帝国（ビザンチン帝国）の公用語はギリシア語で、事実上のギリシャ人国家
1054年	ローマ帝国とコンスタンティノープル大主教が相互に破門しあい、キリスト教が東西に分裂する
1204年	第四回十字軍がコンスタンティノープルに攻め寄せ、ビザンチン帝国は崩壊する。
1261年	亡命政権の一つニカイア帝国がコンスタンティノープルを奪還し、ビザンチン帝国が再興される
1453年	メフメト二世率いるオスマン帝国軍が襲来し、コンスタンティノープルが陥落する。ビザンチン帝国が滅亡し、トルコクラティアが始まる
1687年	オスマン帝国とヴェネチアの戦争に巻き込まれ、パルテノン神殿が爆発炎上する
1821年	アレクサンドル・イプシランディスが蜂起し、ギリシア独立戦争が始まる。独立戦争の責任を取らされる形で、コンスタンティノープル大主教グレゴリウス五世がオスマン帝国に処刑される
1830年	ロンドン議定書によりギリシアの独立が列強により決定される
1831年	ギリシア初代大統領イオアニス・カポディィトリアスが暗殺される
1832年	オトン一世が即位し、ギリシア王国が誕生
1834年	アテネが首都となる

1863年	オトン一世が追放され、ゲオルギオス一世が即位。イギリスがイオニア諸島をギリシアに譲渡
1897年	ギリシア軍がオスマン帝国軍に敗北
1881年	テッサリア及びイプロス南部がギリシア領となる
1901年	福音書事件
1903年	オレスティア事件
1910年	ヴェニゼロスがギリシアの首相となる
1912年	第一次バルカン戦争開始
1913年	第二次バルカン戦争開始　イプロス、テッサロニキ、マケドニア、クレタ島がギリシア領となる
1916年	ヴェニゼロスがテッサロニキに臨時政府を樹立。ギリシア政府が分裂する
1919年	ギリシア軍がエーゲ海を渡りスミルナ占領。さらに小アジア内部に侵攻する
1920年	ムスタファ・ケマルがアンカラ政権を樹立。ギリシア軍と交戦状態に入る
1922年	ギリシア軍がトルコ軍に完敗。スミルナが炎上し、小アジアのギリシア人社会が消滅する
1923年	ギリシアとトルコ間で強制的住民交換協定が締結される
1924年	クーデターで王政が廃止される
1929年	世界大恐慌発生。ギリシア経済が混乱に陥る

年	出来事
1935年	王政が復活
1936年	イオニアス・メタクサスがクーデターを敢行し、独裁政治が始まる。
1940年	イタリア軍がギリシアへ侵攻。撃退される
1941年	ドイツ軍がギリシアへ侵攻。ギリシア軍が撃破され、ドイツ軍がアテネ入城
1944年	ドイツ軍がギリシア撤退。12月3日、EAMのデモ隊に警察が発砲し、本格的な内戦が始まる
1949年	内戦終結
1951年	ギリシアがNATO（北大西洋条約機構）に加盟する
1967年	パパドプロス大佐らによるクーデター発生。軍事独裁政権が始まる
1974年	キプロス侵攻を切っ掛けに、軍事政権が崩壊する。国民投票で君主制が否定され、ギリシア王国が消滅する
1981年	ギリシアがEC（EUの前身）に加盟する
2001年	ギリシアがユーロに加盟する
2010年	PASOK（全ギリシャ社会主義運動）のパパンドレウ首相が財政赤字の隠ぺいを公表し、ユーロ危機が始まる
2012年	5月6日に総選挙が実施されるが、過半数を獲得した政党がなかったため、6月17日に再選挙が行われる。ND（新民主主義党）とPASOKが過半数を獲得し、サマラス政権が発足する

ゼウスの系譜

- ゼウス
  - ヘラ ― ヘパイストス
  - ディオネ ― アプロディテ ― エロス
  - ダナエ ― ペルセウス
  - アルクメネ ― ヘラクレス
  - セメレ ― ディオニュソス
  - エウロペ ― ミノス
  - レト ― アポロン
    - アルテミス
  - メティス ― アテナ

本文中に登場するギリシア神話の神々の系譜

＊登場しない神々は省略してあります。

本文中に登場する日本神話の神と天皇の系譜

＊登場しない神と天皇は省略してあります。

伊弉冉尊（いざなみのみこと）

伊弉諾尊（いざなぎのみこと）

和久産巣日神（わくむすひのかみ）

素戔鳴尊（すさのおのみこと）

天照大御神（あまてらすおおみかみ）

月読尊（つくよみのみこと）

豊受大御神（とようけのおおみかみ）

天之忍穂耳尊（あめのおしほみみのみこと）

木花咲耶姫尊（このはなさくやひめのみこと）

火瓊瓊杵尊（ほのににぎのみこと）

彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）

鵜鷀草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）

神日本磐余彦尊（かむやまといわれびこのみこと）＝神武天皇（じんむてんのう）（1代）

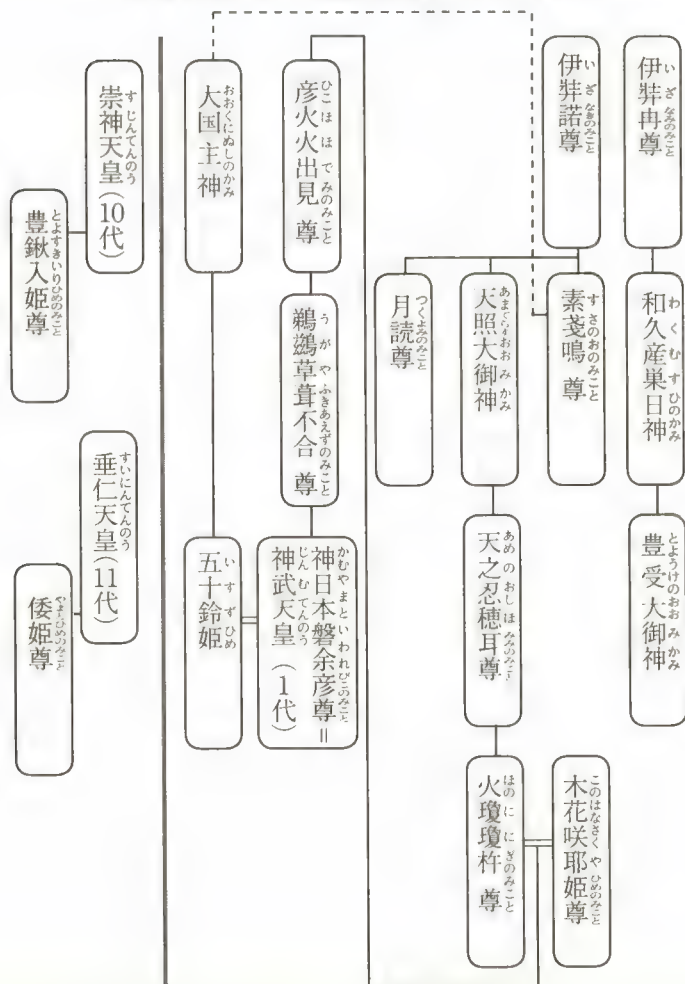
大国主神（おおくにぬしのかみ）

五十鈴姫（いすずひめ）

崇神天皇（すじんてんのう）（10代）

豊鍬入姫尊（とよすきいりひめのみこと）

垂仁天皇（すいにんてんのう）（11代）

倭姫尊（やまとひめのみこと）

★あとがき――国、歴史と文化、そして人の叡智

ギリシアは、筆者にとって思い入れ深い国である。何故なら、若き日に哲学を学び始めた際に先ずもって手にしたのが、古代ギリシア哲学の名著の数々だったからだ。

ソクラテス、プラトン、アリストテレス。その名は世間に著しく浸透する大賢人だが、彼らの思想に触れる機会はそれまで無かった。哲学専攻に入学後、初めて読み下した哲学書は、おそらくプラトンの「饗宴（きょうえん）」であったと記憶している。初夏の日、キャンパスの片隅で独り文庫本を開き、活字を目で追った。すると繰っていた頁のそこかしこから、ギリシアの空のシアン色と、壮大なパルテノンの白さとが鮮烈に浮かび上がったのだ。

学術書を紐解き、それが著された国の情景がまざまざと脳内のスクリーンに展開されるということは、少ないのではなかろうか。しかしギリシアという国は、極東の島国に住む一学生に、その不可思議で甘美な魔法をかけたのだ。以来、遠くて近い、どこか懐かしい国〝希臘〟が、私の中に息づいてきた。

昨年五月、経済評論家の三橋貴明氏との共作の第三弾として「日希両国の経済と文化を比較できる、エンターテイメント性の高い教養小説」という企画を自由社から頂いた。その企画会議の場において、私の心は高鳴っていた。長らく眠っていたギリシアへの憧

憬が、再燃の契機を得たのである。シアンの空が、またも眼前に広がり、眩しく輝いた。その後、九月より取材と資料収集を始め、そして十月に敢行したギリシア取材、伊勢神宮取材。この取材の一日一日に得た感動を、物語として世に出せることの喜びを、今、噛みしめているところだ。

先にも述べたように、本書は三橋氏との共作の第三弾である。第一作目の『コレキヨの恋文』（小学館）では、国民経済と政治家のあり方について。二作目の『真冬の向日葵』（海竜社）では、報道と情報、そして情報の受け取り手である人間について。今回の『希臘から来たソフィア』では、祖国と血の意味、歴史や民族文化の価値について読者に訴えかけたいと思い、筆を進めた。

国に対する意識について、日本では口の端に上らせることすらタブーとされて久しい。しかし世界には常に紛争が存在し、国や民族、あるいは思想や宗教に起因する戦いが繰り広げられているのだ。それらは痛ましい出来事だが、同時に、人間という生き物にとっては至極自然に起こりうる現象でもある。この状況下、日本人だけが国家観について明言を避け続けているのは、不可解だと感じる。

筆者は思想的に右でも左でもなく、単に一日本人として自国の文化と歴史を愛し、今後も日本が幾久しく存続していって欲しいと願うに過ぎない。それは何ら不自然な行為ではなく、ましてや危険な思想などでは全くなく、私見を述べるならば畢竟するに好悪

の感覚、個々人の持てる美意識の問題であると捉えている。日本文化の美に魅せられる私は、我々の文化は美しいと素直に口にする。ただ、それだけのことである。

日本人が古代ギリシアの哲人の書を読めば自然と、ギリシアの海と空、オーソドクスの教会、アクロポリスの光景が、順に記憶の小箱から引き出されるように、異国の人が例えば枕草子を読むとき彼の脳裏にはきっと、日本の神社仏閣、緑生い茂る山並み、舞い散る桜花、和服の人の立ち姿が想起されていることだろう。各国の文化とは本来、このように穏やかに在るべきと考えている。決して、血なまぐさい政争の具になって良い種類のものではない。さらには国という概念についても、同様に穏やかであって欲しいと、日々願って止まないのである。

私は争いを嫌悪する。誰かを攻撃し、蹴落とすことを忌み嫌う。叡智を持つ我々人類は、境界線の向こうの人々と共に手と手を携えて、より良い方角へ船を漕ぎ進められる筈だ。その針路を過たないためにも、各国の育て保持してきた独自文化は大きな役割を果たす。他国の人をも魅了する文化芸術は、国と国との摩擦を減らす最良質の潤滑油であると、私は信ずる。人間とは性悪説に沿って本能を行使して生きているのかも知れない、しかし〝叡智〟は、それでも人に「誇り高く生きよ」と、途切れることなく語りかけてくるのだ。

さて暗鬱な過去の物語であった前作『真冬の向日葵』から一転し、『希臘から来たソフィア』は、近未来の明るい恋愛物語です。憚りながら『コレキヨの恋文』から三冊通してお読み頂き、〝国と人とが備え持つべき叡智〟について、あらためて考察を深めて頂ければ幸甚に存じます。

末筆となりますが、政治経済や歴史問題についての卓越した原案をお預けくださった三橋貴明先生、今回も緻密かつ秀抜な装画を創り上げられた鈴木康士先生、また、監修を頂いた、大妻女子大学比較文化学部助教の渡邉顕彦先生、日本ギリシャ協会事務局長の川上修二様、「自由主義史観研究会」の飯嶋七生様、誠に有難う存じました。この度絶妙な推薦文をお寄せくださいました元京都大学大学院准教授の中野剛志先生、縁あって著者近影用のイラストをお描きくださったアニメーターであり演出家でもあられる平松禎史先生、加えて、私の遅筆を温かく見守り頂いた自由社の榎本司郎様に謝意を表したく存じます。さらに、ここに名は記しませんが日希両国のあまたの取材協力者や支援者諸兄、そして何よりもかによりも、本書を今まさに手に取られている読者の皆様方に、心より感謝申し上げます。

平成二五年一月二四日
さかき　漣

参考文献

『物語　近現代ギリシャの歴史』　村田奈々子：著　【中公新書】
『ギリシャの歴史』　リチャード・クロック：著　【創土社】
『聖性の鏡』　松永伍一：著　【平凡社】
『ローマ人の物語Ⅳ　ユリウス・カエサル　ルビコン以前』
　塩野七生：著　【新潮社】
『ギリシャ危機の真実』　藤原章生：著　【毎日新聞社】
『ギリシア神話』　呉茂一：著　【新潮社】
『ギリシャ神話』　串田孫一：著　【雪華社】
『おにぎりオリーブ赤いバラ』
　ノリコ・エルピーダ・モネンヴァシティ：著【幻冬舎ルネッサンス】
『遠い太鼓』　村上春樹：著　【講談社】
『伊勢神宮のこころ、式年遷宮の意味』　小堀邦夫：著　【淡交社】
『日本の神々の事典―神道祭祀と八百万の神々』
　茂木栄、薗田 稔：著　【学研】
『神道いろは　神社とまつりの基礎知識』
　神社本庁教学研究所：監修　【神社新聞社】
『お伊勢まいり』　【伊勢神宮崇敬会】
『神社Ｉ　伊勢神宮』　【ＪＴＢパブリッシング】
『伊勢神宮ひとり歩き』　中野晴生、中村葉子：著　【ポプラ社】
『随想録』　高橋是清：著　【中公クラシックス】

さかき漣（さかき・れん）

作家

幼少時より茶道や華道など日本古来の伝統芸能を修得。大学では哲学と美学芸術学を専攻。美術関係の職業などを経て、文筆業に。日本文化の保持に貢献したいとの思いから、作家活動を展開している。三橋氏との共作に、ベストセラー『コレキヨの恋文』（小学館）、『真冬の向日葵』（海竜社）がある。

三橋貴明（みつはし・たかあき）

経済評論家・中小企業診断士

東京都立大学（現：首都大学東京）経済学部卒業。外資系IT企業、NEC、日本IBMなどを経て2008年に中小企業診断士として独立。経済指標など豊富なデータをもとに経済を多面的に分析する。単行本執筆と同時に、雑誌への連載・寄稿、各種メディアへの出演、講演活動など多方面で活躍している。近著に「2013年 大転換する世界 逆襲する日本」（徳間書店）、「脱グローバル化が日本経済を復活させる」（青春出版社）、「いよいよ、韓国経済が崩壊するこれだけの理由」（ワック）などがある。当人のブログ「新世紀のビッグブラザーへ」の一日のアクセスユーザー数は10万人を超え、推定ユーザ数は30万人に達している。2013年1月現在、人気ブログランキングの「政治部門」1位、総合ランキング1位（参加ブログ総数は約99万件）である。

http://ameblo.jp/takaakimitsuhashi/

希臘(ギリシア)から来たソフィア

2013年3月8日　初版発行

著　　者　さかき漣
発 行 者　加瀬英明
発 行 所　株式会社 自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
TEL 03-5981-9170　FAX 03-5981-9171
印刷製本　シナノ印刷株式会社

ISBN 978-4-915237-74-4 C0095

URL http://www.jiyuusha.jp/
Email jiyuuhennsyuu@goo.jp

さかき漣

作家

幼少時より茶道や華道など日本古来の伝統芸能を修得。大学では哲学と美学芸術学を専攻。美術関係の職業などを経て、文筆業に。日本文化の保持に貢献したいとの思いから、作家活動を展開している。三橋氏との共作に、ベストセラー『コレキヨの恋文』(小学館)、『真冬の向日葵』(海竜社)がある。

三橋貴明

経済評論家・中小企業診断士

東京都立大学(現:首都大学東京)経済学部卒業。外資系IT企業、NEC、日本IBMなどを経て2008年に中小企業診断士として独立。経済指標など豊富なデータをもとに経済を多面的に分析する。単行本執筆と同時に、雑誌への連載・寄稿、各種メディアへの出演、講演活動など多方面で活躍している。近著に「2013年　大転換する世界　逆襲する日本」(徳間書店)、「脱グローバル化が日本経済を復活させる」(青春出版社)、「いよいよ、韓国経済が崩壊するこれだけの理由」(ワック)などがある。当人のブログ「新世紀のビッグブラザーへ」の一日のアクセスユーザー数は10万人を超え、推定ユーザ数は30万人に達している。2013年1月現在、人気ブログランキングの「政治部門」1位、総合ランキング1位(参加ブログ総数は約99万件)である。
http://ameblo.jp/takaakimitsuhashi/

～主要キャラクター設定集～

橘 航太郎

- 身長 173cm
- こざっぱりとカットした漆黒の前髪を斜め後ろへ流している
- 日に焼けた肌と胸板厚く筋肉質体型の故かボート部出身と勘違いされることシバシバ
- オフィシャルな場へは常にオーダー・メイドのスリーピースで赴く
- 靴と時計だけは絶対に安価なものを身に着けないと固く心に決めている

ソフィア・ヴァシラキ

- 身長 160cm
- 緩やかにウエーブを描いたこげ茶色の髪を腰まで伸ばしている
- 大きな灰色の瞳に上下共に長いまつ毛
- 手足は細いのにスリーサイズは 89・61・84 と永遠のセックス・シンボルの如き
- 美麗さ
- 白皙の肌と勝気そうなアヒル唇が目立つ
- 豪華なドレスよりも洗いざらしのコットンの服に簡素なかごバッグが一番しっくり

霧島 さくら子

- 身長 148cm
- キノコ的な髪型を頑なに変えず幾年月
- 化粧気のまったくない稀に見る童顔かつ幼児体型
- ファッション・センスは皆無だがコンサヴァティブでありたい欲求は強い
- 仕事着から普段着に至るまですべて代々付き合いのある老舗仕立て屋にまかせっきり

東田　剛

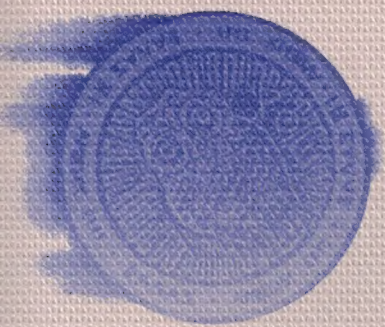
- 身長 188cm
- ワックスで前時代的なオールバックに固めた黒髪
- まるでバジリスクのような鋭い目つきと稀に見る傲岸不遜ぶり
- ファッション・センスは皆無というよりも衣服は布製であればそれで良い
- クローゼット内にある私服は季節ごとにワンセットのみ

一之宮 雪乃

- 身長 168cm
- 超美脚のモデル体型
- 明るい茶色の奥二重の瞳にすっきりと高めの鼻
- アッシュ系ブラウンのショートの髪がトレードマーク
- 常連であるセレクト・ショップの英仏輸入モノで全身を揃えている
- アイシャドウとリップグロスは必須

神庭 亮一

- 身長 182cm
- 彫の深い印象的な顔立ちに細マッチョ体型
- まるでパーマをかけたようなクセ毛のミディアム・ショートの黒髪が風に乱れがち
- 身に着けているもので最も高価なアイテムはヴィンテージのジーンズ
- 際立ってシャレ者だがアクセサリーを付けることは断固拒否する

イラスト／キャラクターデザイン＝鈴木康士
キャラクター設定／文＝さかき漣

希臘(ギリシア)から来たソフィア

元京都大学大学院工学研究科准教授
中野剛志氏も絶賛ブチ切れ!

「大学でも教えない国家の本質を一気に読ませるなんて、反則だ!」

国も選挙も否定する、日希ハーフのソフィアに翻弄(ほんろう)される政治家名門の御曹司。
国家とは、政治とは、そして〝運命の恋〟とは……

さかき漣［作］
三橋貴明［原案］

自由社

政治家一門の４代目である航太郎は、日本のトップ大学を卒業後、アメリカでＭＢＡ取得の超秀才サラブレッド。意気揚々と衆議院選に出馬するが、結果は大惨敗。失意の浪人生活をおくる彼が書斎で見つけたのは、名宰相の誉れ高い祖父・紀之彦の日記だった……！さらに航太郎の目の前に、日希ハーフの超絶美女が現れる。「人間はあらゆる規制から解き放たれて、自由に生きるのが一番幸せなのよ!」と言い放つ、ガチガチの新自由主義者のソフィア。彼女の到来により、航太郎の運命の歯車が、再び動き始める……。

希臘（ギリシア）から来たソフィア